

一般国道  
10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第1集

# 辻垣 ヲサマル遺跡

福岡県行橋市大字辻垣所在遺跡の調査

1993

福岡県教育委員会

# 辻垣 ヲサマル遺跡

福岡県行橋市大字辻垣所在遺跡の調査

1993

福岡県教育委員会



辻垣ヲサマル遺跡全景



(右上) 1区全景



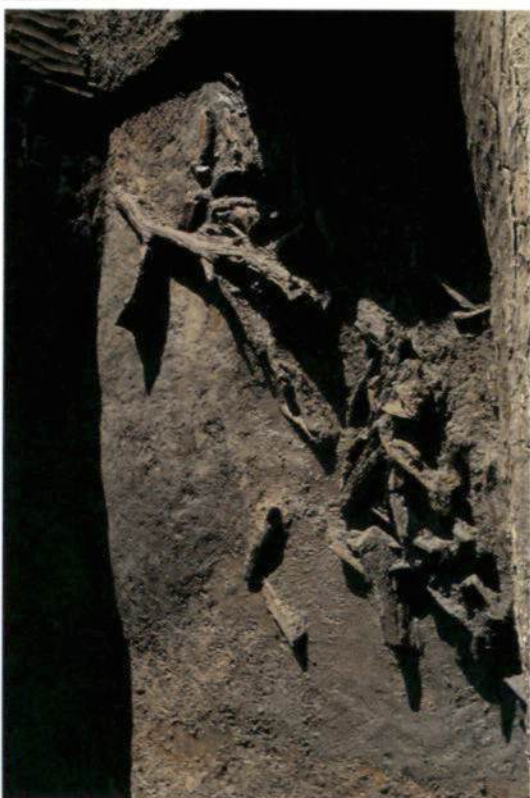
(右下) 2区全景



(左上) 円形周溝 (5区、6区)



(左下) 円形周溝 (6区北側から)



(左上) 4区遺物出土状態  
(左下) 4区木材が出土状態  
(右) 出土遺物弥生前期 壺形土器 (6区出土)

## 序

一般国道10号線椎田道路は、平成4年12月25日に全線供用が開始されました。

この椎田道路に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和61年度より発掘調査を実施して平成2年度に終了をみております。

この報告書は、昭和62年11月～昭和63年1月まで発掘調査を実施しました行橋市大字辻垣地区の遺跡について発掘の成果をまとめたものです。

本書を、学問研究に、教育の場に、広く活用いただければ幸甚です。

なお、発掘調査にあたっては、御協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に深く感謝いたします。

平成5年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 光安常喜

# 例 言

- 1 この報告は、1987年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した一般国道10号線椎田道路建設予定地に係る埋蔵文化財の発掘調査の記録である。
- 2 本書は、椎田道路関係埋蔵文化財調査報告の第1集で、辻垣<sup>ツジガキ</sup>ヲサマル遺跡である。
- 3 遺物の実測は、久富美智子・友永澄子・棚町陽子・副島邦弘が行ない、挿図・図版作製・製図には、秦憲二・豊福弥生・原カヨ子・土山真弓美と副島が、遺物の復原作業は岩瀬正信の指導の下に九州歴史資料館復原室で実施した。
- 4 遺物写真については、石丸洋・北岡伸一、遺構の写真は調査担当者の副島が、空中写真は稲富が実施した。
- 5 花粉分析には、畑中健一教授（北九州大学）の手を煩らわした。
- 6 題字は芝由美子氏にお願いした。
- 7 本書の執筆は、付節を畑中教授に、他は全て副島が担当し、編集も行なった。

# 本文目次

## 序

	頁
I. はじめに .....	1
1. 調査に至る経過 .....	1
2. 調査の組織と関係者 .....	2
II. 位置と環境 .....	5
III. 発掘調査の記録 .....	7
1. 発掘調査の概要 .....	7
2. 生活遺構と遺物 .....	7
IV. おわりに .....	69
1. 辻垣ヲサマル遺跡の景観 .....	69
2. 出土遺物について .....	72
3. 総括 .....	74
付 辻垣遺跡の花粉分析 .....	75



# 図 版 目 次

- 冠首図版 1. 行橋市辻垣ヲサマル遺跡全景  
2. (左上)円形周溝(5区・6区)  
(左下)円形周溝(6区北側から)  
(右上)1区全景(西から)  
(右下)2区全景(東から)  
3. (左上)4区遺物出土状態  
(左下)4区木材・木根等出土状態  
(右)出土弥生式土器(6区出土)
- 図 版 1 辻垣ヲサマル遺跡 周辺俯瞰航空写真(建設省提供)  
図 版 2 辻垣ヲサマル遺跡 付近航空写真(建設省提供)  
図 版 3 辻垣ヲサマル遺跡 全景(南から)  
図 版 4 辻垣ヲサマル遺跡 発掘風景(遺構検出から埋戻まで)  
図 版 5 辻垣ヲサマル遺跡 1区全景  
図 版 6 (1) 辻垣ヲサマル遺跡 1区流路跡と遺構全景  
(2) 辻垣ヲサマル遺跡 1区流路跡と遺構近景  
図 版 7 (1) 辻垣ヲサマル遺跡 1区遺構の状態(上)  
(2) 辻垣ヲサマル遺跡 1区遺構の状態(中)  
(3) 辻垣ヲサマル遺跡 1区遺構の状態(下)  
図 版 8 (1) 辻垣ヲサマル遺跡 近現代水路と溝状遺構(中世期)  
(2) 辻垣ヲサマル遺跡 溝状遺構近景  
図 版 9 (1) 辻垣ヲサマル遺跡 1号溝の状況(北から)  
(2) 辻垣ヲサマル遺跡 1号溝の遺物出土状態近景(北から)  
図 版 10 辻垣ヲサマル遺跡 2区全景  
図 版 11 辻垣ヲサマル遺跡 2区遺物出土状態  
図 版 12 辻垣ヲサマル遺跡 2区遺物出土状態  
図 版 13 辻垣ヲサマル遺跡 3区全景  
図 版 14 (1) 辻垣ヲサマル遺跡 3区近景  
(2) 辻垣ヲサマル遺跡 3区流路跡の状態  
図 版 15 (1) 辻垣ヲサマル遺跡 4区発掘前全景(試掘溝のみ)

	(2)	辻垣ヲサマル遺跡	4 区発掘後全景
図 版 16	(1)	辻垣ヲサマル遺跡	4 区流路跡状態
	(2)	辻垣ヲサマル遺跡	4 区流路跡状態
	(3)	辻垣ヲサマル遺跡	4 区円形溝の状態
	(4)	辻垣ヲサマル遺跡	4 区円形溝の状態
図 版 17	(1)	辻垣ヲサマル遺跡	4 区遺物出土状態
	(2)	辻垣ヲサマル遺跡	4 区遺物出土状態 (三叉鍬)
	(3)	辻垣ヲサマル遺跡	4 区遺物出土状態 (木製品建築材)
	(4)	辻垣ヲサマル遺跡	4 区流路底遺物出土状態 (石庵丁)
図 版 18		辻垣ヲサマル遺跡	5 区全景
図 版 19	(1)	辻垣ヲサマル遺跡	5 区表土剥ぎ終了時状態
	(2)	辻垣ヲサマル遺跡	5 区遺構検出後状態
図 版 20		辻垣ヲサマル遺跡	5 区近景
図 版 21		辻垣ヲサマル遺跡	5 区木製品出土状態
図 版 22		辻垣ヲサマル遺跡	6 区全景
図 版 23		辻垣ヲサマル遺跡	6 区近景
図 版 24		辻垣ヲサマル遺跡	6 区流路跡のカタの部分と円形周溝(1)
図 版 25		辻垣ヲサマル遺跡	6 区流路跡のカタの部分と円形周溝(2)
図 版 26	(1)	辻垣ヲサマル遺跡	6 区流路跡のカタの部分の状態
	(2)	辻垣ヲサマル遺跡	6 区流路跡末端部の状態
図 版 27		辻垣ヲサマル遺跡	4 区・5 区・6 区円形周溝の状態
図 版 28	(1)	辻垣ヲサマル遺跡	6 区円形周溝の遺物出土状態(1)
	(2)	辻垣ヲサマル遺跡	6 区円形周溝の遺物出土土の状態(2)
図 版 29	(1)	辻垣ヲサマル遺跡	6 区円形周溝の遺物出土状態(3)
	(2)	辻垣ヲサマル遺跡	6 区円形周溝の断面(4)
図 版 30	(1)	辻垣ヲサマル遺跡	6 区流路跡中遺物出土状態 (石剣等)
	(2)	辻垣ヲサマル遺跡	6 区流路跡中遺物出土状態 (木製品等)
図 版 31		辻垣ヲサマル遺跡	出土遺物 ① (1 区出土) 土器・石器
図 版 32		辻垣ヲサマル遺跡	出土遺物 ② (2 区出土) 土器
図 版 33		辻垣ヲサマル遺跡	出土遺物 ③ (2 区出土) 土器
図 版 34		辻垣ヲサマル遺跡	出土遺物 ④ (2 区出土) 土器
図 版 35		辻垣ヲサマル遺跡	出土遺物 ⑤ (2 区出土) 土器
図 版 36		辻垣ヲサマル遺跡	出土遺物 ⑥ (2 区出土) 土器

図版 37	辻	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑦ (2区出土) 土器・石器
図版 38	辻	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑧ (2区出土) 石器
図版 39	辻	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑨ (3・4区出土) 土器
図版 40	辻垣	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑩ (4区出土) 土器
図版 41	辻垣	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑪ (4区出土) 石器
図版 42	辻垣	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑫ (5区出土) 土器
図版 43	辻垣	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑬ (6区出土) 土器
図版 44	辻垣	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑭ (6区出土) 土器
図版 45	辻垣	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑮ (6区出土) 土器
図版 46	辻垣	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑯ (6区出土) 土製品 2区・6区
図版 47	辻垣	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑰ (6区出土) 石器
図版 48	辻垣	ヲサマル遺跡	出土遺物	⑱ 2区出土特殊遺物・4区出土石製品

# 挿 図 目 次

	頁
第 1 図	椎田バイパス開通式 (1992.12.25) ..... 1
第 2 図	辻垣遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000) ..... 6
第 3 図	辻垣遺跡の周辺地形図 (1/2,000).....折込み… 6～7
第 4 図	辻垣ヲサマル遺跡遺構配置図 (1/1,500)..... 8
第 5 図	辻垣ヲサマル遺跡 1 区遺構配置図 (1/200) .....折込み… 8～9
第 6 図	辻垣ヲサマル遺跡 1 区溝 1～5 遺構実測図 (1/200) .....10
第 7 図	辻垣ヲサマル遺跡 1 区出土遺物実測図 (1/4) .....13
第 8 図	辻垣ヲサマル遺跡 1 区溝 1・溝 6 出土遺物実測図・石器 (1/2).....14
第 9 図	辻垣ヲサマル遺跡 1 区土壙実測図 (1/20) .....16
第 10 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区遺構配置図 (1/200).....折込み…16～17
第 11 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区大溝土層図 (1/60) .....17
第 12 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区出土遺物実測図①(土器) (1/4).....18
第 13 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区出土遺物実測図②(土器) (1/4).....20
第 14 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区出土遺物実測図③(土器) (1/4).....22
第 15 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区出土遺物実測図④(土器) (1/4).....23
第 16 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区出土遺物実測図⑤(土器) (1/4).....25
第 17 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区出土遺物実測図⑥(土器) (1/4).....27
第 18 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区出土遺物実測図⑦(特殊遺物) (1/1).....29
第 19 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区出土遺物実測図⑧(石器) (1/2).....30
第 20 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区出土遺物実測図⑨(石器) (1/2).....31
第 21 図	辻垣ヲサマル遺跡 2 区出土遺物実測図⑩(石器) (1/2) .....33
第 22 図	辻垣ヲサマル遺跡 3 区遺構配置図 (1/200).....34
第 23 図	辻垣ヲサマル遺跡 4 区遺構配置図 (1/200).....36
第 24 図	辻垣ヲサマル遺跡 3・4 区出土遺物実測図①(土器) (1/4) .....38
第 25 図	辻垣ヲサマル遺跡 4 区出土遺物実測図②(土器) (1/4).....41
第 26 図	辻垣ヲサマル遺跡 4 区出土遺物実測図③(土器) (1/4).....42
第 27 図	辻垣ヲサマル遺跡 4 区出土遺物実測図④(土器) (1/4) .....44
第 28 図	辻垣ヲサマル遺跡 4 区出土遺物実測図⑤(土器) (1/4).....46
第 29 図	辻垣ヲサマル遺跡 4 区出土遺物実測図⑥(石器) (1/2).....48
第 30 図	辻垣ヲサマル遺跡 2・4 区出土遺物実測図土製品 (1/2).....49

第 31 図	辻垣ヲサマル遺跡 4 区出土遺物植物種子	50
第 32 図	辻垣ヲサマル遺跡 5 区遺構配置図 (1/200)	52
第 33 図	辻垣ヲサマル遺跡 5 区出土遺物実測図(土器) (1/4)	53
第 34 図	辻垣ヲサマル遺跡 6 区土層図 (1/80)	55
第 35 図	辻垣ヲサマル遺跡円形周溝実測図 (1/100)	55
第 36 図	辻垣ヲサマル遺跡 6 区出土遺物実測図①(土器) (1/4)	57
第 37 図	発掘風景 (5 区の調査)	58
第 38 図	辻垣ヲサマル遺跡 6 区出土遺物実測図②(土器) (1/4)	59
第 39 図	辻垣ヲサマル遺跡 6 区出土遺物実測図③(土器) (1/4)	61
第 40 図	辻垣ヲサマル遺跡 6 区出土遺物実測図④(土器) (1/4)	62
第 41 図	辻垣ヲサマル遺跡 6 区出土遺物実測図⑤(石器) (1/2)	64
第 42 図	辻垣ヲサマル遺跡 6 区出土遺物実測図⑥(石器) (1/2)	65
第 43 図	辻垣ヲサマル 2 区・4 区出土遺物縄文土器片	67
第 44 図	辻垣ヲサマル遺跡溝状遺構配置図 (1/1,500)	71
第 45 図	処点集落遺跡の基本構造概念図	72
第 46 図	辻垣遺跡の花粉ダイヤグラム	76

## 表 目 次

表 1	一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財一覧表	4
-----	------------------------	---

# I. はじめに

## 1. 調査に至る経過 (第1図)

一般国道10号線は、本州からの玄関口である北九州市を起点とし、東九州の主要都市（行橋市・豊前市・中津市・別府市・大分市・延岡市・宮崎市・都城市）を経て鹿児島市に至る延長約450kmの大動脈であり、東九州地域の経済・社会・文化活動に重要な役割を果たしている。

特に北九州市から大分市に至る区間は、今後一層の発展が予想される地域であり、その発展を図るには、交通体系の整備が急務となっている。

このような状況を勘案して計画が進められているのが、北九州市と大分市を結ぶ北大道路である。

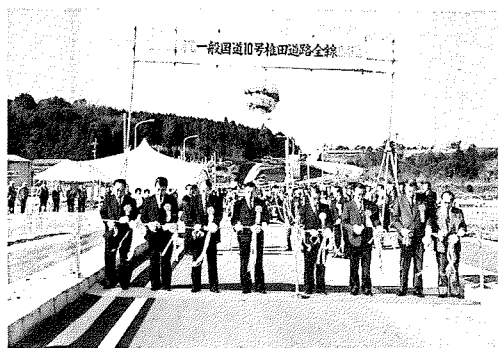
近年、行橋市から豊前市に至る間は、北九州市のベッドタウンとして脚光をあび、人口増加の著しい地域で国道の交通量は増加の一途をたどり、飽和状態に達しています。このため、幹線道路の機能を失いつつあり、沿線住民の日常生活にまで影響をおよぼしています。

こんな中に椎田道路は計画されました。こうした国道の交通混雑を解消し、地域の健全な発展に寄与するため、北大道路の一環として（全延長約16.2km、建設省5.9km、日本道路公団10.3km）計画された。

昭和54年12月22日事業許可申請が建設大臣あてに行われ、昭和55年2月8日に事業許可となる。同年10月21日には、椎田道路及び日本道路公団が施行する椎田バイパスを含めて路線の発表された。

福岡県教育委員会は建設省分の椎田道路について、5工区（行橋市・豊津町）と10工区（豊前市松江）とを現地踏査による分布調査を実施した。道路公団の方が用地買収が先行したため、発掘調査を用地買収が終了した椎田町域を昭和61年5月より開始し、昭和62年度については豊津町分を実施することとなった。建設省についても、行橋バイパスと接合する。5工区を行橋市辻垣地区について、用地が解決したので、踏査を実施した。その結果を受けて、昭和62年度より、本格的な発掘調査を実施することとなった。

これに先行して、昭和61年5月に福岡県教育委員会文化課は発掘調査事務所を、椎田道路の中心に、北に行橋バイパス・南に豊前バイパスと



第1図 椎田バイパス開通式(1992.12.25)

北大道路に関係する発掘調査が進行することとなった。椎田町に県文化課椎田事務所を設置させて、発掘調査の円滑化をはかった。

秋には、椎田道路の第1地点辻垣について、用地買収が終了にともない試掘調査を行い遺跡の確認がなされ、昭和62年度4月当初からの本格的な発掘調査となった。

当該地は大きく二分される。鉄道によって切られ国道10号線よりの部分を辻垣畠田・長通とし、後者を辻垣ヲサマル遺跡として発掘調査を実施した。

辻垣ヲサマル遺跡の発掘調査は昭和62年11月1日～昭和63年1月31日迄を充てた。遺跡は弥生時代から歴史時代（中世期）の生活遺構を中心にするもので古墳時代には西側の一部は河川の氾濫源であった。

平成4年度に整理・報告書を作成する事となった。

現在当該遺跡の上には、椎田道路を中心に、行橋バイパスそして豊前市万田まで約21.5kmが、完全供用されたのが、平成4年12月25日であった。辻垣地区は、現国道10号線と鉄道を立体交差で、またいでいる場所で、非常に難工事であったと聞いている。

## 2. 調査と組織と関係者

昭和62年度辻垣ヲサマル遺跡の発掘調査及び平成4年度整理・報告書作製をするにあたっての組織と関係者は、下記の通りである。

〔建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所〕

所長	北之園 宏(昭和62年度)	竹中 幸夫
副所長	中溝 文之(昭和62年度)	中山 高虎
建設専門官	古賀 秀登(昭和62年度)	田中 睦憲
工務課課長	浜田 誠(昭和62年度)	中川 蔵太
工務係長	諏訪 憲二(昭和62年度)	平田 政生
設計係長	平川 澄雄(昭和62年度)	畑 法善
調査課課長	久良木 裕(昭和62年度)	山田 茂利
調査係長	犬束 昌生(昭和62年度)	柴田 智
建設技官	池田 稔浩(昭和62年度)	沓掛 孝
建設監督官	桃坂 繁(昭和62年度)	田中 敏則

〔福岡県教育委員会〕

総括

教育長	竹井 宏(昭和62年度)	光安 常喜
-----	--------------	-------

教育次長	洲上 雄章(昭和62年度)	月森清三郎
指導 2 部部長	大平 岩男(昭和62年度)	松枝 功
文化課課長	窪田 康徳(昭和62年度)	森山 良一
参事	森本 精造(昭和62年度)	柳田 康雄・松尾 正俊
課長補佐	平 聖峯(昭和62年度)	石川 元彬
技術補佐	宮小路賀宏(昭和62年度)	
参事補佐	柳田 康雄(昭和62年度)	井上 裕弘・浜田 信也 川述 昭人・副島 邦弘 高橋 章・佐々木隆彦

庶務

文化課管理係長	加藤 俊一(昭和62年度)	毛屋 信
事務主査	竹内 洋征(昭和62年度)	富田 浩一

調査(昭和62年度)

文化課参事補佐兼調査班総括	柳田 康雄
文化課 技術主査	副島 邦弘(発掘調査担当)
文化課 主任技師	小池 史哲
文化課 技師	緒方 泉

なお、調査の準備段階に辻垣区(区長)廣門常生氏の協力を受けた。

調査及び整理中には一川淳江・川本義継・宮本工・浜島三司諸氏の指導助言を得た。

発掘作業には、下記の人々から協力を受けた。

則行憲一郎・植村利道・世良雅昭・宮田晃・廣門常生・松本一政・浅富守・國永忠士・森門良則・犬塚カヲル・田原フジ子・田村弘子・鎌田ツル代・森仲美・中村裕子・松下敏子・本島マチエ・溝辺慶子・泉恭子・原田美紀子・山本喜美子・荒上敬子・城戸由恵・五所絹代・奥キミエ・國永美沙枝・則松由美子・則松代志枝・國永敏枝・森脇勢津子・宮岡艶子・城戸数枝・福谷久子・馬場清子・横山康子・中原三重子

整理報告書作成の折の、遺物整理については岩瀬正信が統括し、豊福弥生・原カヨ子・土山真弓美・友永澄子・久富美智子・棚町陽子・秦憲二諸氏の協力を受けた。

記して感謝の意を表す。



表 1 一般国道10号椎田道路関係埋蔵文化財一覧表

H 5.3 作製

箇所名	地点	遺跡名	遺跡の概要	(当初面積) 調査面積・㎡	調査完了 年月
一般国道10号 椎田道路 (5工区)	1	辻垣	散布地	(33,400) 34,500	S 62. S 63
	2	徳永A 居屋敷	窯横穴 跡墓	(980) 1,050	H 1.3
	3	徳永B 鋤先	古土近世墓 墳墓地	5,700	H 2.10
	4	徳永C 川の上	散布地 弥生・古墳	(11,250) 12,500	うち 7,500㎡ H 1.4 済 H 2.10完
椎田道路 (5工区) 合計				(51,330) 53,750	100% 完
一般国道10号 椎田道路 (10工区)	5	山添	推定地	1,000	H 1.11
	6	石丸A	推定地	(3,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
		石丸B		3,500	S 63.12
	7	中村A	散布地	7,700	うち 6,000㎡ S 63.12 済 H 1.6 完
	8-A	中村B	推定地	(3,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	8-B	中村B	推定地	(6,800) 160	試掘結果 遺跡ナシ
	9-A	黒峰屋	古墳群	(14,780) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	9-B	黒峰屋	古墳群	(5,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	10	選仏寺	推定地	(1,050) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	11	東舟入	推定地	(600) 0	試掘結果 遺跡ナシ
	12	広山	推定地	(9,000) 0	試掘結果 遺跡ナシ
椎田道路 (10工区) 合計				(55,430)	100% 完

## Ⅱ. 位置と環境

行橋市を中心とする京都平野は、北から長峽川・今川・祓川の3本の河川によって、つくられた沖積平野である。

当該地区は、祓川下流右岸の平野部に位置する。辻とは道路が十字形に交わる意ともいわれ、古くから交通の要衝だったと思われる。小字名は河原・上川原・中川原・下川原・古川・上古川・古川の上・井手の下などがある。祓川に沿って集落が開け、川が何度か流路をかえている。

近世は辻垣村で、豊前国の仲津郡の内で、小倉藩の元永手永に属する村高は正保国絵図190石、元禄国絵図では200石、天保郷帳で、307石余、旧高旧領で320石余。なお正保絵図には中津街道沿いに一里塚が記されている。

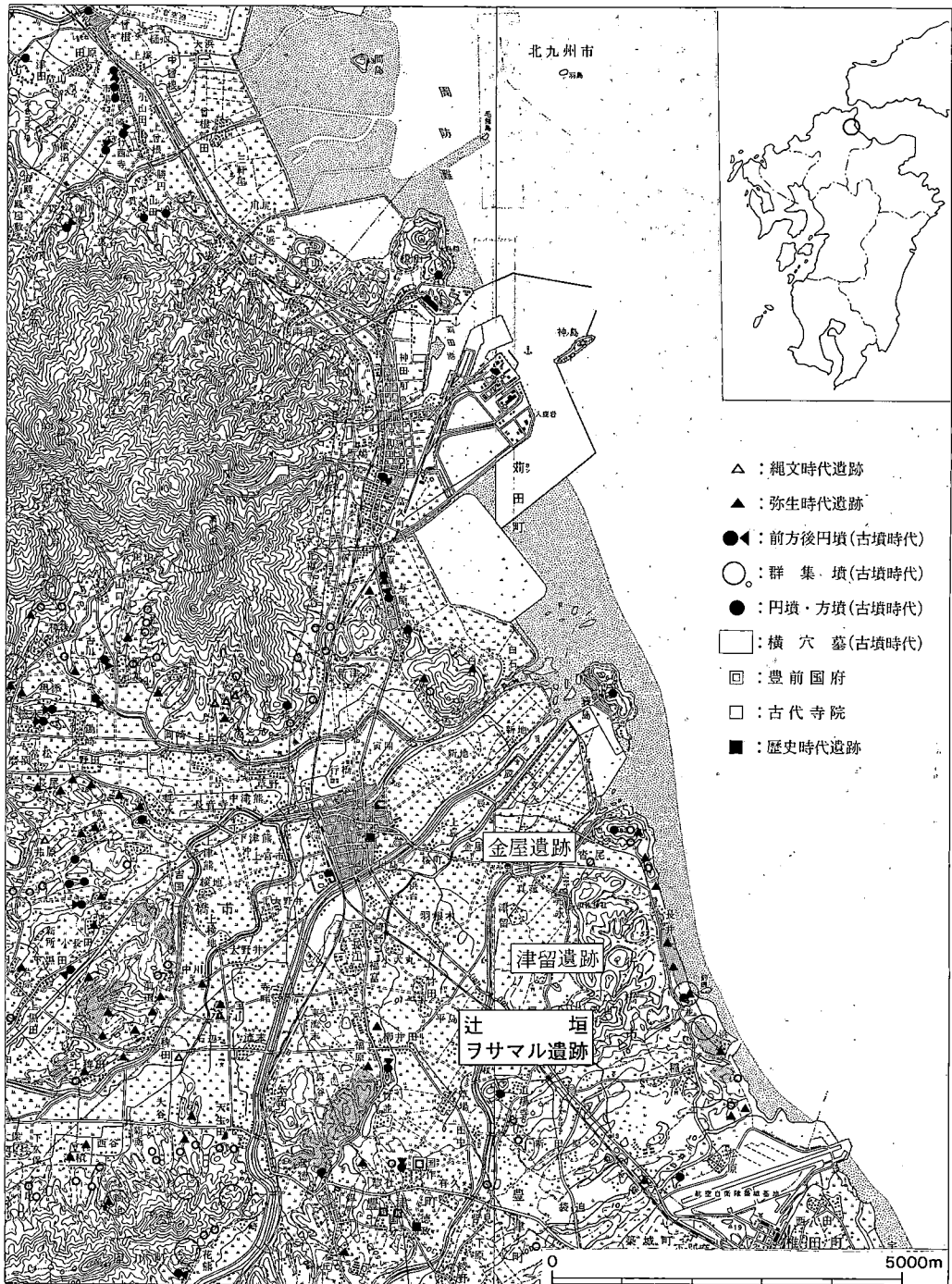
元禄絵図では祓川についての記述では、『伊良原川、歩渡幅八間、深さ菴尺』、元和8年の家数34・人数73(男41・女32)牛6・馬5・坊主(人畜改帳)。享保飢饉の餓死者は43名(開善寺過去帳)。文化8年正月13日伊能忠敬測量日記では、当村を測量し、辻垣川は河原とも幅81間であった。鎮守は、字大セチの勝手神社、寺院は字上屋敷の浄土宗西山派善門山浄林寺。明治3年の戸数29、人口119(男65・女54)。同22年に仲津村の大字となる。昭和29年から行橋市の大字となる。(註1) 周辺の遺跡を見ると、中世の今井は港町として栄え、鋳物師大工の集団が専業に梵鐘を造っていたもので、行橋バイパスの調査(註2)では鋳物師の集落を検出できなかった。祓川を渡った対岸に津留遺跡がある。(註3) 溝の中から方格規矩鏡の破片が検出しているもので弥生終末から古墳時代の生活遺構を検出している。同時期には、辻垣島田・長通・徳永川の上遺跡等が名高い。その周辺部の丘陵には、古墳群や横穴墓群がつくられている。また、最古級の須恵器を焼いた窯跡が居屋敷窯跡で、これも椎田道路建設に伴って発見されている。豊津には豊前国府や国分寺・国分尼寺が造営され、豊前国の中心がこの祓川流域である。河口から5km上流に位置している。その中間点が当該遺跡である辻垣ヲサマル遺跡である。中世以後、当該地区は普通の、農村村落を形成したと考えられる。その流れは現在までいたっているが、椎田道路の建設によって、さまがわりする日もそう遠くはないだろう。

### 註

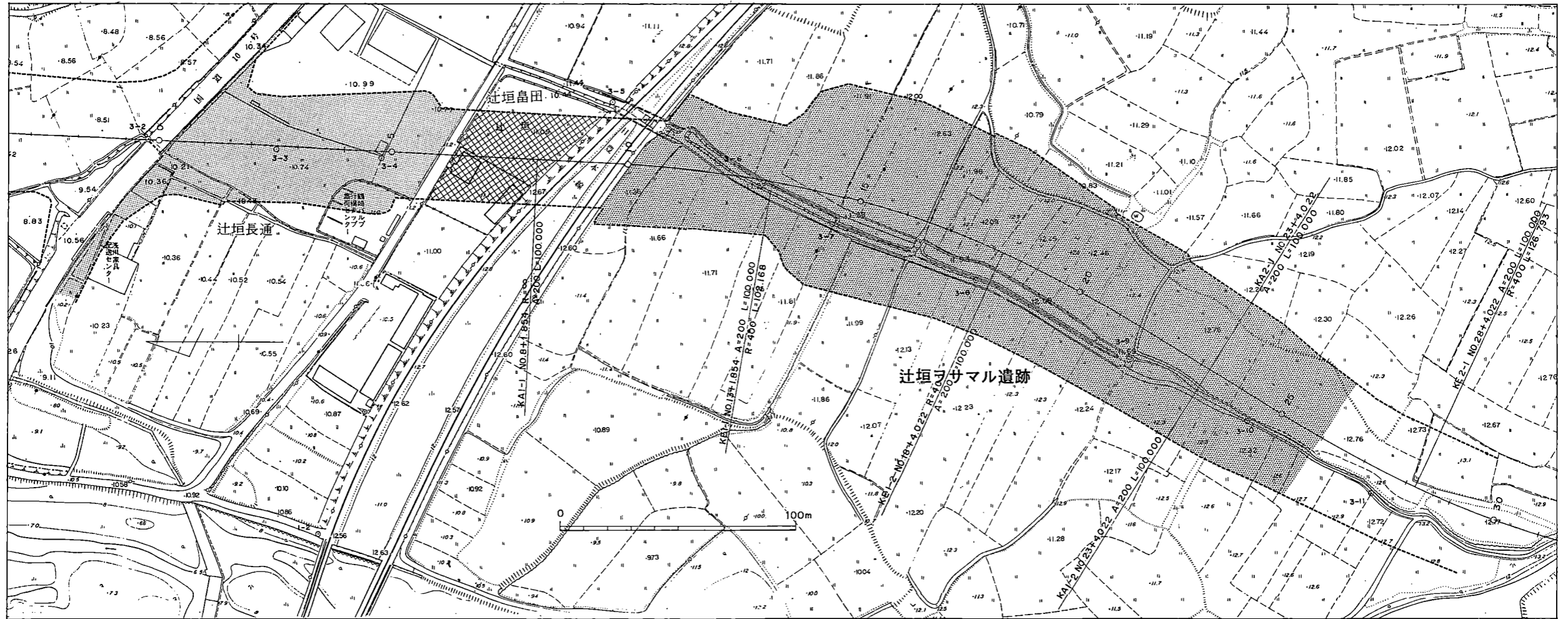
註1. 『角川日本地名大辞典 40 福岡県』 角川書店 1988

註2. 金屋遺跡「行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第2集 福岡県教育委員会 1992

註3. 津留遺跡「行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 福岡県教育委員会 1991



第2図 辻垣遺跡の位置と周辺主要遺跡 (1/50,000)



第3図 辻垣遺跡の周辺地形図 (1/2,000)

### Ⅲ．発掘調査の記録

#### 1．発掘調査の概要（第4図、図版1～3）

当該遺跡は、標高12m前後の水田面で、北側をJR日豊線がはしり、その北側には国道10号線がある。

遺跡の西側には、祓川が流れ、水面は西から東へ向って、周防灘にいたっている。遺跡は、祓川の自然堤防状に立地する。標高は11m 70cmから12m 70cmの間にある。

試掘結果のもとにして、発掘区を設けた。JRの鉄道ぎわを1区とし、西側地区を中心として順次2区～6区を設定した。

地籍は福岡県行橋市大字辻垣字ヲサマルであった。遺跡名は辻垣ヲサマル遺跡と命名した。辻垣ヲサマル遺跡から検出された遺構は、

溝状遺構	12
大溝（流路）	3 + $\alpha$
円形周溝	1
柱穴群	
近世・近代排水溝（水路）	

これらの遺構は、区によって相違する。1区は歴史時代を中心としたもので、2区は弥生終末から古墳時代初頭にかけての時期。4区も同様である。5・6区にかけて検出された円形周溝の中の遺物で、弥生前期の遺物を中心とするものであった。

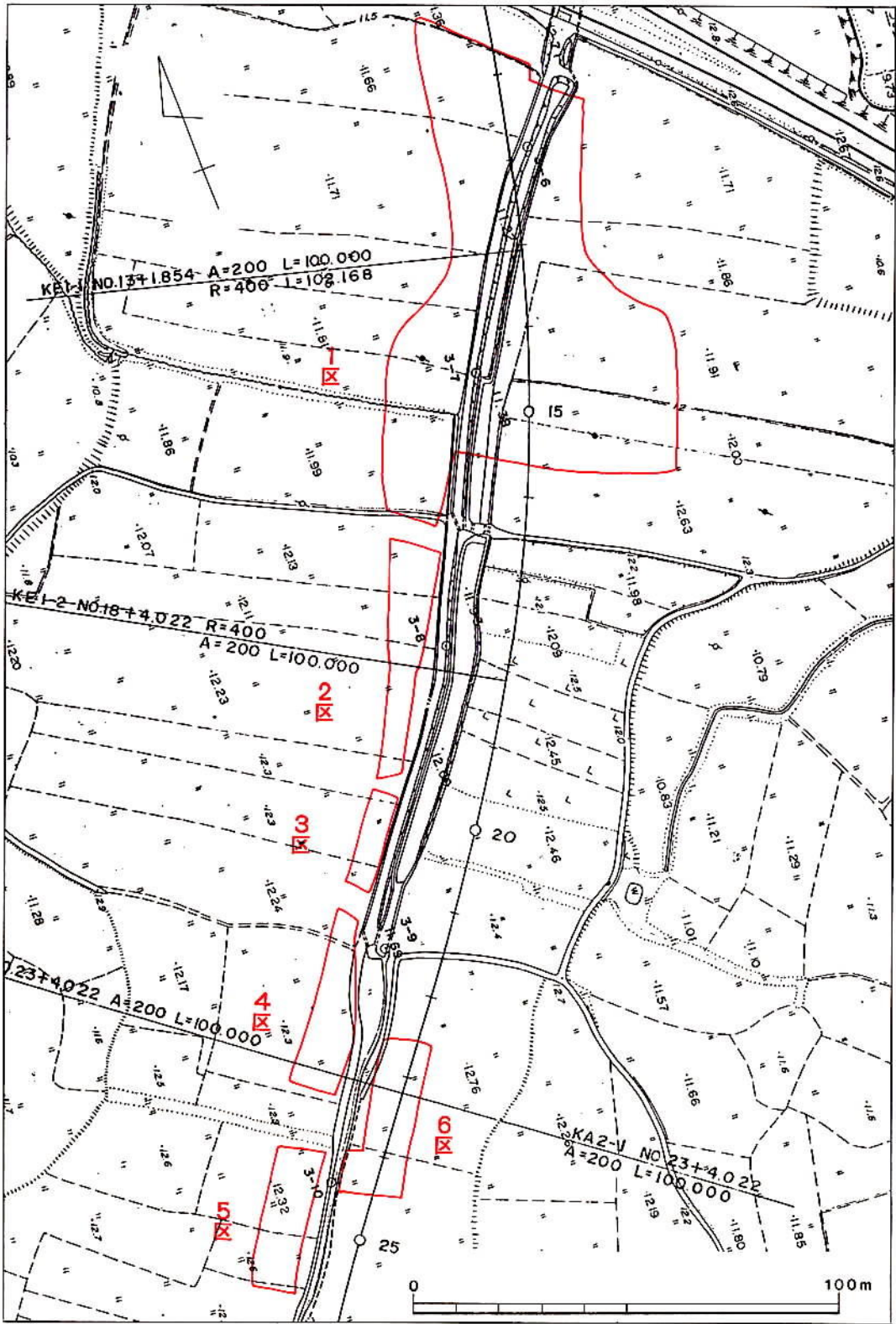
以下、項を改ためて1区から説明を付したい。

#### 2．生活遺構と遺物（第5図～第45図、図版4～48）

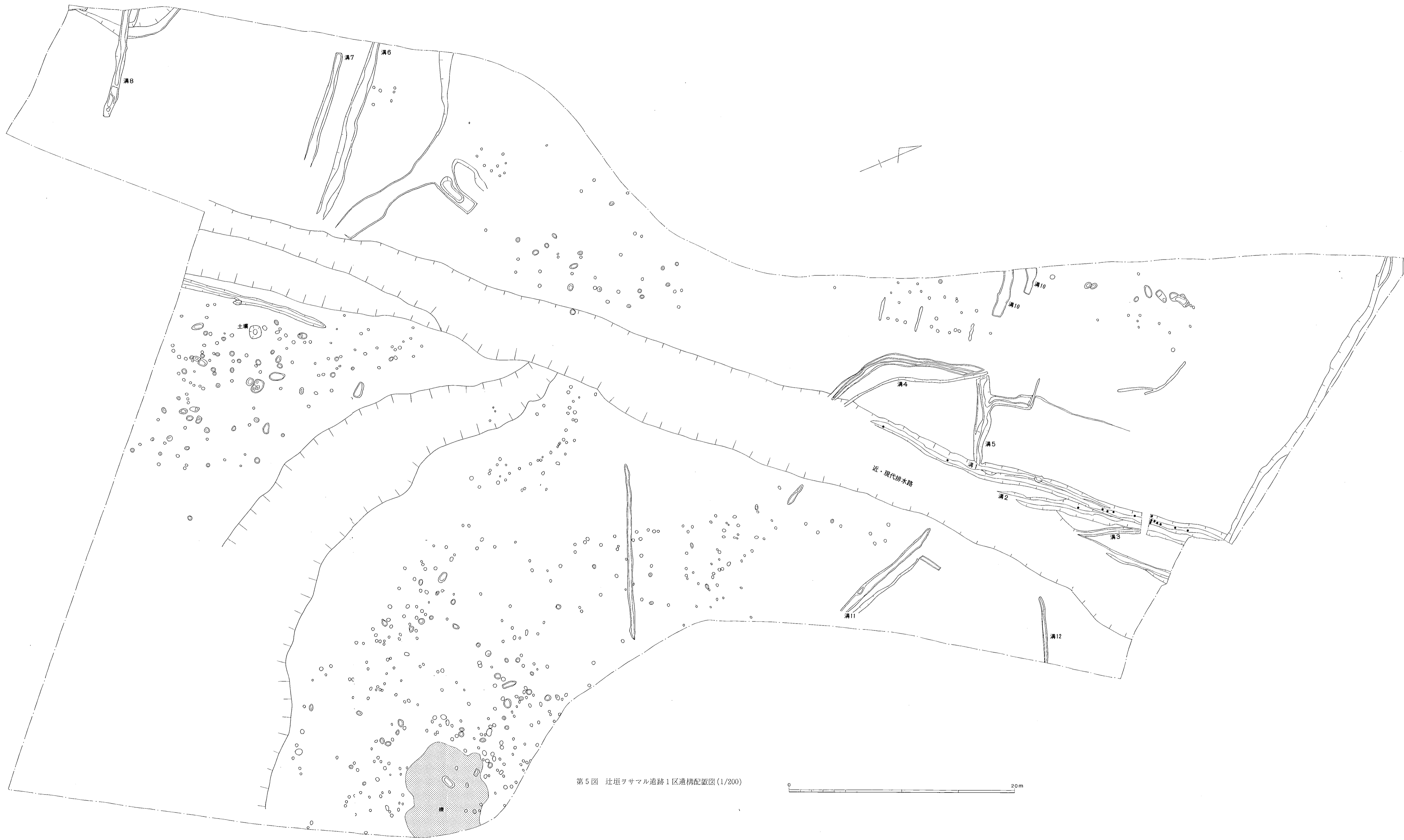
試掘調査については、前年度にトレンチを12本、畦畔ごとに入れられている。これを基本として発掘区を設定している。時期は弥生前期と弥生終末～古墳初頭の2期が上げられていた。

遺構の説明を前段に行って、その後に遺物説明することとする。

この遺跡は祓川の流路域そのもので、その流れの中から出土するものが遺物となっている。それと陸地化された部分に円形周溝が検出された。



第4図 辻垣ヲサマル遺跡遺構配置図 (1/1,500)



第5図 辻垣ヲサマル遺跡1区遺構配置図(1/200)



この遺跡自体が、完全に落ち着いたのは陸地化した中世の時期で、当該地も中世の遺構が検出されている。人間の動き、生活が見られる。それ以後に、近世・近代には水田化されていたものと土層の状態から理解される。

### (1) 1区 (第6～9図、図版5～9)

中央部に近世・近代の排水溝(水路)があつて東側と西側と若干地質の相違が見られる。東側には東→西へ黒色砂質土が見受けられる。この他の土質は1区西南にはジャリ層が見られ、2区の一部にいたっている。水の流れにより、若干の凹地であつて、流土としての黒色土の堆積土層が見られた。またジャリ層は東端部の中央部に円形状に広がっている。基本的には古い時代の祓川の氾濫源であつたことが理解される地層の状況を呈している。

遺構を捕捉した面は歴史時代を中心であつた。时期的には平安末から鎌倉期である。

溝が6本、近代溝2本・土塹、それに柱穴群で、これとってまとまるものはなく、建物とみられるのは北西の一角にみられるが、他にはまとまりがない。流路であつた地区が完全に埋まつた時期からである。その時期は平安末から中世の中頃である。

#### 溝状遺構 (第5・6図、図版5)

排水用の溝と考えられ、大別すると3タイプの溝としてまとめてみた。他の溝については、近・現代の田の側溝と考えられる。

では溝1より順次説明を付加する。

#### 溝1 (第6図)

南北へ伸びていて、近・現代の排水溝で切られたものである。全長31m、幅が1m～2mのもので、深さ40cmを計り、断面がU字形をなしている。

溝底から歴史時代の中世期(平安末～鎌倉)にはいる瓦器の椀や土師器の皿・貿易陶磁器の耳付のもので、福徳省産の白磁等の遺物と縄文時代の石器類が混入して検出された。

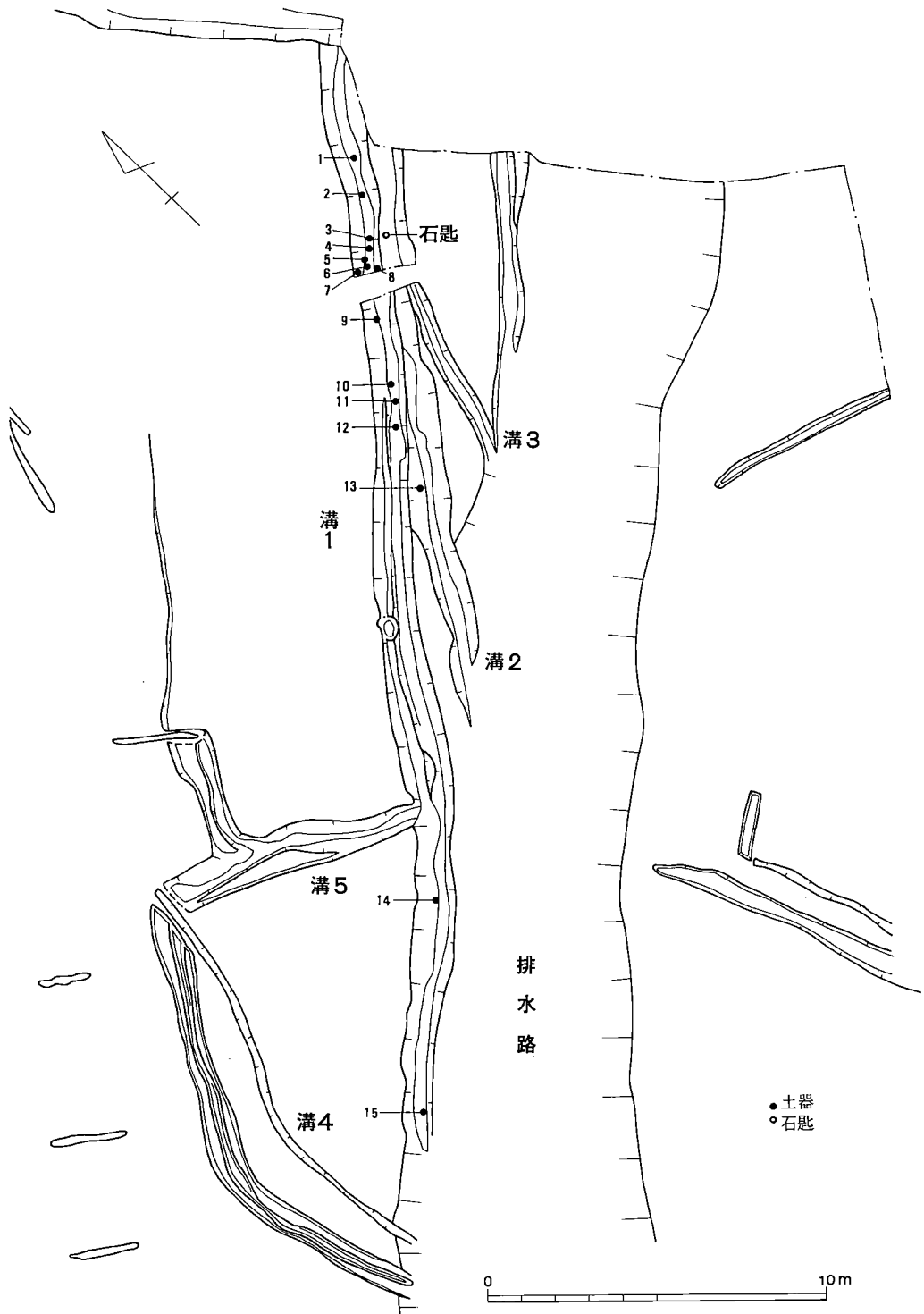
#### 溝2 (第6図)

溝1に沿って、全長4m、幅45～60cmで、底まで30cmでU字形をなしているものである。その先端は近・現代の排水路でカットされている、溝1から分離している。

#### 溝3 (第6図)

溝2に沿っていたもので、全長3m、幅45～60cmで、溝の断面はU字形をなす。溝底は20cm





第6図 辻垣ヲサマル遺跡1区溝1～5遺構実測図 (1/200)

前後を計測する。

#### 溝4 (第6図)

溝5を切っているもので、近・現代の溝に切られている。全長5m、幅20～30cmで、溝底までの深さは15cm前後を計測する。

#### 溝5 (第6図)

略円形をなすもので、近・現代の溝で切られているので、半円形をなしている。溝4から切られている。半径約6mで、幅20～30mである。深さ20cmを計測し、溝の断面幅は20cmである。出土遺物は、石鏃・扁平磨製石斧・砥石の破片が覆土中から検出された。

#### 溝6 (第5図)

全長16m、幅約1m前後で、断面はU字形をなし、深さ20cmを計測する。ほぼ一直線で東西方向へ伸びて、水田の畦畔水路と同一方向で一致する。溝7と同じと思われる。出土遺物なし。

#### 溝7 (第5図)

全長10m、幅0.8m、深さ20cm内外で東西方向に伸びているもので、溝6に平行している浅い側溝である。水田用のもので、現在の水田側溝に一致している。出土遺物は皆無である。

#### 溝8 (第5図)

1区の南端にあって、東西方向に伸びているもので、現在の水田の地割とは相違する。全長5m、幅1.0m、深さ40cmで、断面はU字形をなしている。検出された遺物は見られない。

#### 溝9 (第5図)

旧排水の排水路で近世のものと考えられる。略東西方向に流れているが北側に大きく張り出している。全長約6m、幅20～40m、深さ40cmである。出土遺物はみられない。

#### 溝10 (第5図)

発掘区の北西側端部にあって、2本の溝が平行している。現代に近い地割の溝である。全長5m、幅30cm、深さ40cmで、断面はU字形をなしている。出土遺物なし。

#### 溝11 (第5図)

平行して2本走っている。発掘区に対して斜めにはいつている。溝10の様に地割の溝である。

全長 5 m、幅 20～40 m、深さ 40 cm で、断面は U 字形を呈している。

### 溝 12 (第 5 図)

北東から斜めに走っている溝で、全長 5 m、幅 30 cm、深さ 40 cm で、断面形は U 字形をなしている。近世の地割の溝である。

以上の溝をまとめてみると、

近世の地割溝と現代の水田側溝が中心で、溝 1・溝 2・溝 3・溝 4・溝 5 が中世期の排水に関する溝と考えられる。

溝 6 は排水路と考えられ、中央部を南北に走っている近・現代の排水本路に連結させられる。この本水路は一時代古い時期で、近世江戸期のものと思われる。

### 出土遺物 (7・8 図、図版 31)

溝 1 で出土した遺物を中心にまとめてみた。その他の溝では石器で、石鏃・扁平磨製石斧・砥石の破片が溝 5 から出土している。

#### 土器 (第 7 図、図版 31)

溝 1 から出土したものをまとめてみると、黒色土器・瓦器・土師器・貿易陶磁器の破片等であった。全て溝底から出土している。

#### 土師器 (第 7 図一①、図版 31)

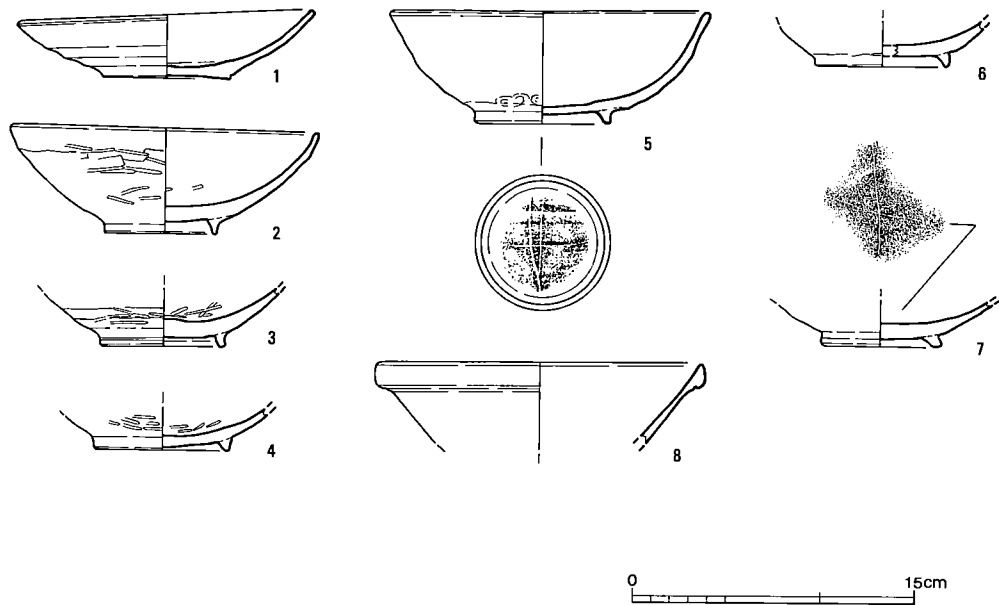
皿 (①) 復原口径は 16 cm で、器高は 3.5 cm である。器壁の厚さは 5 mm 前後で、器面の調整はヘラケズリで、稜がみられる。底部は糸切りである。胎土には精良なる粘土を使用し、色調は黄灰色で、焼成は良好である。見込みも回転ヘラケズリである。出土遺物番号の No. 4 と No. 11 が同一個体となっている。

#### 黒色土器 (第 7 図一③、図版 31)

椀 (③) 底部破片で、高台径は 7 cm、高台高は 0.5 cm で、若干外側にひらき気味である。胎土は精良の粘土を使用し、色調は黒に近い灰色である。器面調整はケズリ後ミガキがかけられていて、内面の見込みもミガキがある。焼成は良好である。

#### 瓦器 (②・④～⑦)

椀 (②・④～⑦) ②は復原径 16.45 cm、器高 5.75 cm で、高台径は 5.75 cm で直立している。口唇直下を内側に入れている。内面には線がはいっている。外面はヘラケズリで、縦位方向にミガキをかけている。器面に凸凹がある。仕上げはヨコナデか、胎土には細粒砂を含み、色調は灰黒色で見込みは灰色を呈している。焼成は良好である。



第7図 辻垣ヲサマル遺跡1区出土遺物実測図(1/4)

④は底部破片で、高台径は7.2cm、高台高さは0.5cmで、若干外側を向ている。胎土には細粒砂を含み、精良なる粘土を使用している。色調は灰褐色を呈している。器面の調整は内外面ミガキをかけている。焼成は良好である。

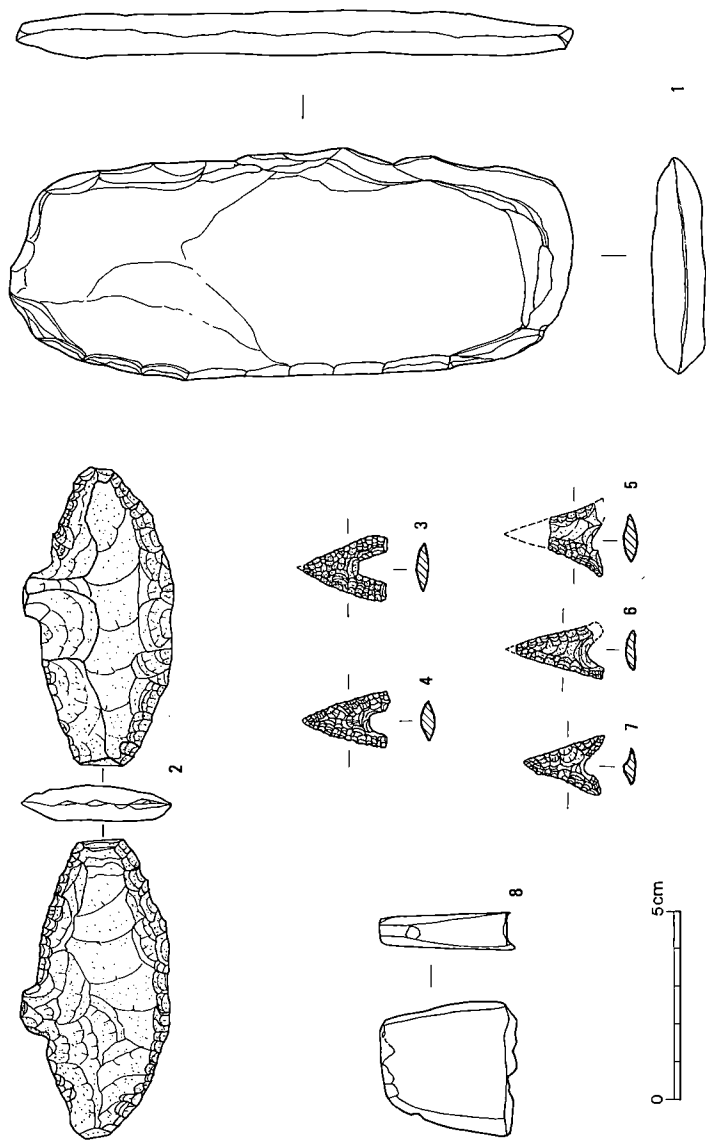
⑤は口径17.2cmで、器高は6.2cm、高台径は7.3cmで、高台は直立する。胎土には精良の粘土を使用し、細粒砂を含んでいる。色調は灰黄色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は内外面ナデ仕上げである。高台内面には板圧痕とヘラ記号がある。

⑥は底部の破片で、高台径は7cm、高台は直立する。胎土には細粒砂・角閃石・赤褐色粒を含んでいる。色調は黄褐色を呈している。器面調整は内外ともナデ仕上げである。

⑦は底部の破片で、高台径は6.4cm、高台は外側に若干外反している。見込みにヘラ記号×を記入されている。胎土には細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈している。焼成は良好である。

#### 貿易陶磁器 (第7図一⑧、図版31)

椀(⑧) 耳付の白磁である。口縁部の破片で、復原口径は17.5cmで、胎土には精良の磁石土を使用し、色調は青味を帯びた灰白色で、釉は透白釉で、露胎釉の溜りがある。



第8図 辻垣ヲサマル遺跡1区溝1・溝6出土遺物実測図(石器) 1/2

### 石器（第8図、図版31）

溝1・溝5から出土したものである。石器の出土は覆土と溝底でローリングを受けている。時期的には合わないもので、流れ込みと見られる。

**打製石斧（①）** 石質は緑泥変岩で、全体は短柵状の石材を両方から敲打し、剝離したもので、刃部の調整はいまいちである。重量170.5g。

**石匙（②）** 縄文時代の所産のもので、溝底に張り付いていた。石質はサヌカイト製で、丁寧につくられている。重量37g。

**石鏃（③～⑦）** ③～⑥は溝1から出土したもので、⑦は溝5の覆土中から出土した。

③は安山岩製のもので腸挟りが深い。

④は黒曜石製で、姫島産のものと考えられる。丁寧な剝離を施しているもので、断面は凸レンズ状を呈している。

⑤は安山岩製で、腸挟りは浅いものである。断面は凸レンズ型である。

⑥は安山岩製で、覆土中から出土したもので、腸挟りが中間程度のものである。

⑦は鉄石英製のもので、作り方が左右が若干相違する、断面は略三角形である。この石材で作られている鏃は珍しい。

**磨製石斧（⑧）** 溝5の覆土から出土したもので、石材は蛇紋岩製で、刃部と基部が欠損している。両側・両面とも磨かれている。いわゆる扁平磨製石斧である。弥生時代のものである。

溝1・溝6から出土した石器類は、弥生時代の所産のもの、縄文時代の所産のものが大半を占めている。

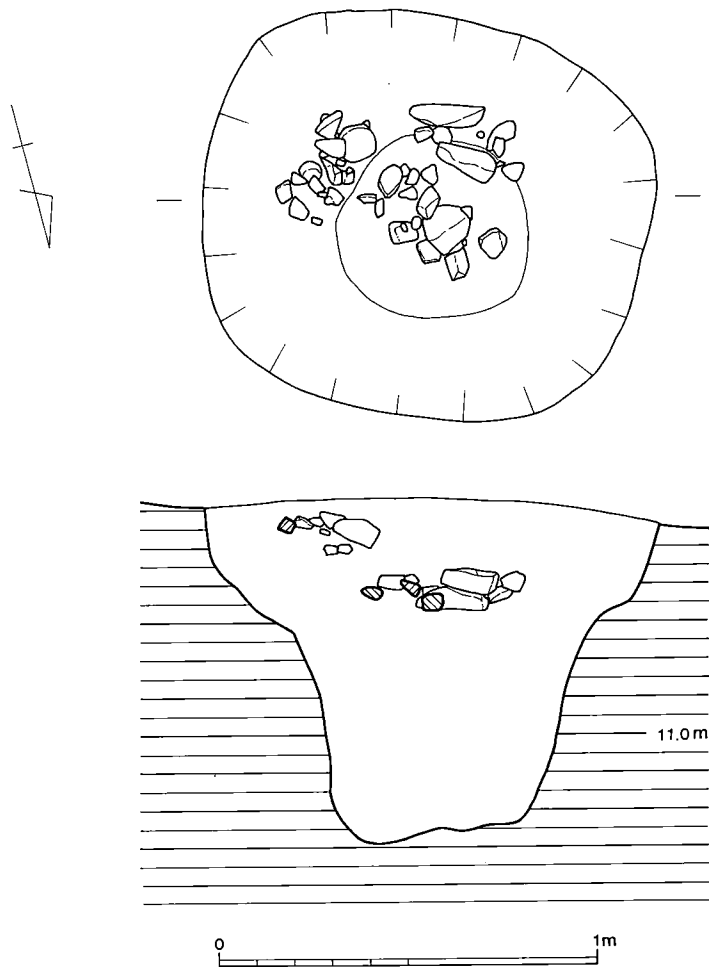
土器は、中世期（平安末・鎌倉）のものである。この溝1は12世紀から13世紀のものに比定される。

### 土壇（第9図、図版7）

1区の発掘区の南側にあつて、平面形は隅丸方形を呈し、底面は略円形をなしている。ほぼ20cm下に一段を有した様に見える。覆土中に配石がみられている。機能としては井戸と考えられる。出土遺物は皆無であつた。

### 柱穴群（第5図）

周辺部には柱穴群があるが、建物になると考えられるものはなかつた。ただ中央部西端にひとつかたまりの柱穴が検出されているが、建物がたつとは考えられなかつた。しかし、何かがあつ



第9図 辻垣ヲサマル遺跡1区土壙実測図(1/20)

たことは推定できる。

1区の全体からは、古い時期に祓川の流路があったもので、その流れは幅広かった。その周辺部にジャリ層が堆積したものと考えられる。

それが陸地化されて、人間が生活されるのが中世の時期と考えられる。遺物から見ると12～13世紀のものであった。

遺跡全体の景観については総括の中で説明する。



第10図 辻垣ラサマル遺跡2区遺構配置図 (1/200)



## (2) 2区 (第10～22図、図版10～12、32～38)

1区の横の畦道をはさんだ南側に、発掘区を設定した。東側には排水路があって、それにはさまれた地区に細長くトレンチを設定した。

遺構は大溝が検出されたが、どうも流路であったと考えられる。出土遺物は、時代的に層序で捕捉することができなかったが、多量の遺物の検出が見られた。その部分が水際であった所である。溝の底からは弥生土器片が、中間層からは古墳時代初頭期のものや、7世紀代の須恵器等も見られ、層序は入りみだれていると判断した。

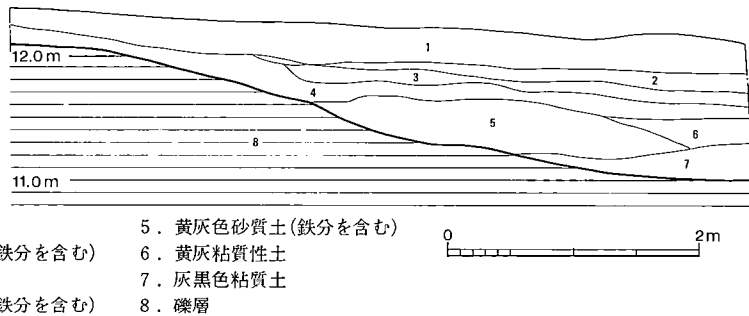
出土遺物は、溝底より弥生式土器や木器・木枝・木の実等が検出された。中間層で古墳時代初頭期の遺物と7～8世紀後頃の須恵器や土師器等が混在した状態で検出されている。

どうも水際祭祀が行なわれている可能性もありそうである。水際には土器や石器類で、木製品は中央部より南に多く発見された。

西側先端部に土層をとるために坪掘を実施した。

### 土層 (第11図)

2区の深層の坪掘りで、1層が黄褐色粘質土で、水際の端部である。4層は鉄分を含んでいる。5層も多量の鉄分を含んでいる。地山は礫層である。鉄分が含まれている部分はよどみと考えられる。

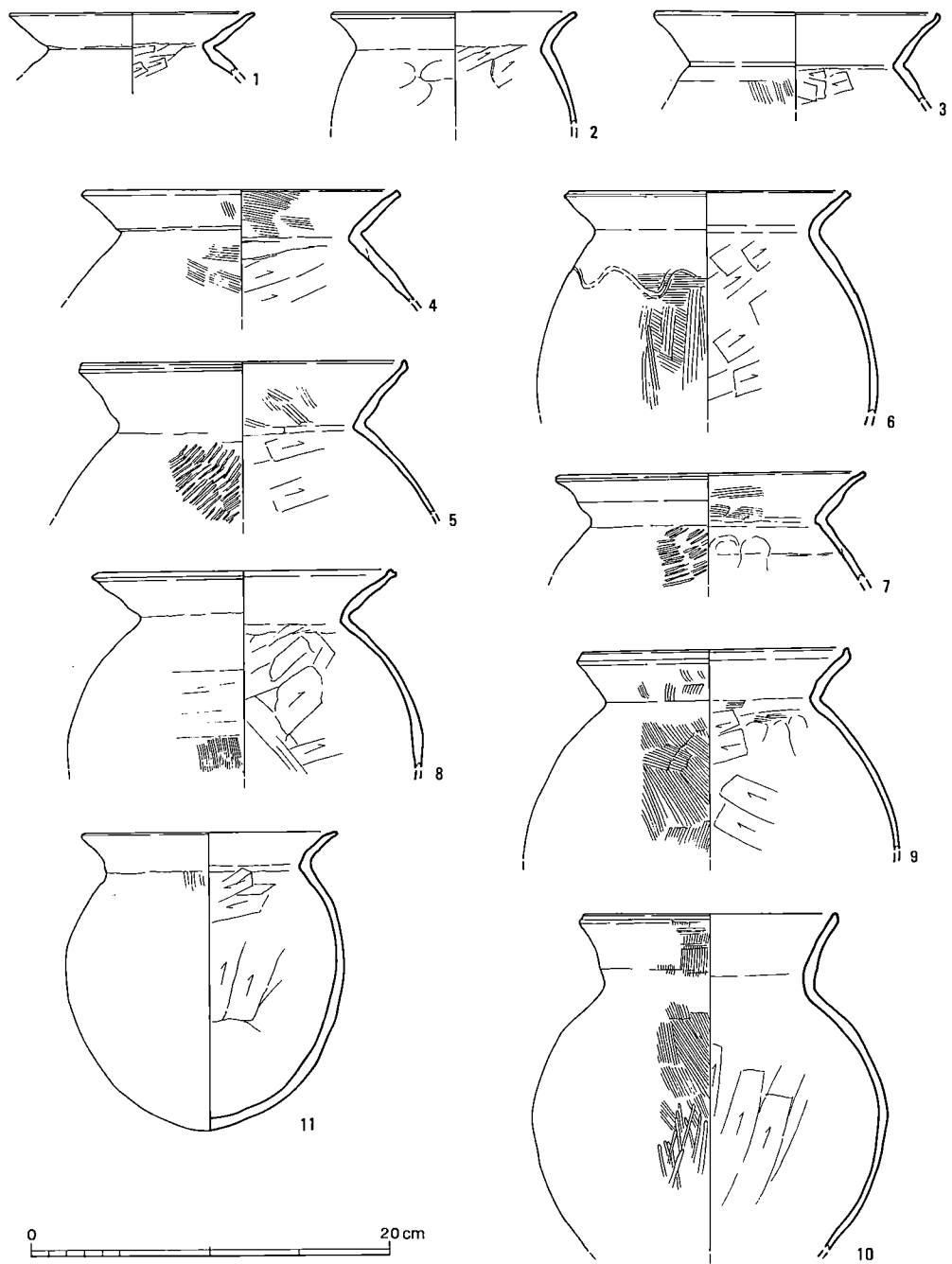


第11図 辻垣ヲサマル遺跡2区大溝土層図 (1/60)

### 出土遺物 (第13～22図、図版32～38・48)

大溝中の遺物出土状況は第10図で全体を表示したが、ここでは出土状況を土器・石器・木製品・木枝等に分類し区別して理解できる様にした。遺物は編年的には混在状態を示めていた。

遺物の中には特殊なものが検出されている。土製模造鏡やガラス小玉等で、水際の祭祀ともみられている。主要な土器は弥生時代終末期から古墳時代初頭期のものが多く検出されている。



第12図 辻垣ヲサマル遺跡 2区出土遺物実測図 ①(土器) (1/4)

## 大溝の内出土遺物 (第12~15図、図版32~34)

甕 (①~⑳) 口縁部「く」の字状を呈しているもので、頸部以下にタタキを有するものと、ハケメで調整されているものにて分類できる、器形的には球体をとるもので、ほぼ丸底をなしている。内面はヘラケズリで器壁を薄く仕上げている。㉓~㉖までは複合口縁の甕である。

口縁部は「く」の字状に外反しているのが特長であるが、口唇部に形態の相違がみられる。①と⑩は先細りながら、端部を丸めている。③・⑤・⑨・⑬・⑯・㉒は口唇部の上端部を、ほぼ垂直につまみ上げ、突起をもつもの。④・⑥・⑰・㉑・㉔は口唇部を持つが、角が丸味を帯びたものである。②・⑦・⑩・⑰・⑱・㉓は端部を丸くおさめたもの。⑮・㉕・㉖は端部が肥厚し、水平に仕上げられているもの、⑧・⑫・⑭は内側に肥厚し、端部面が内側を向くものである。

①は胎土は細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、口唇部の外面は黒色である。径は13.8cmで器面の調整はナデ仕上げで、頸部内面は横位方向のヘラケズリである。焼成は良好。

②は復原口径14.0cmで、胎土に細粒砂を含み色調は黄褐色で、器面の調整はナデ仕上げで、内面はヘラケズリである。指圧痕が残って、器面に凸凹がある。焼成は良好。

③は復原径が16.2cm、胎土には細砂を多く含み、色調は暗灰色から黒味を帯びている。器面の調整はハケメを使用し、内面は頸部以下ヘラケズリである。他はヨコナデ仕上げで、焼成は良好。

④は胎土に細砂を多く含み、色調は黒味をおびた黄褐色で、器面の調整はハケメを施して、口縁内面もハケメで、頸部以下はヘラケズリである。焼成は良好。

⑤は胎土に細砂を含み、色調は暗橙色を呈し、復原口径は18.4cm、器面の調整は頸部直下タタキを全体に施し、その上面はヨコナデ仕上げで、内面はハケメが若干残るがヨコナデを施している。頸部下半はヘラケズリで、器面は薄く仕上げている。焼成は良好である。

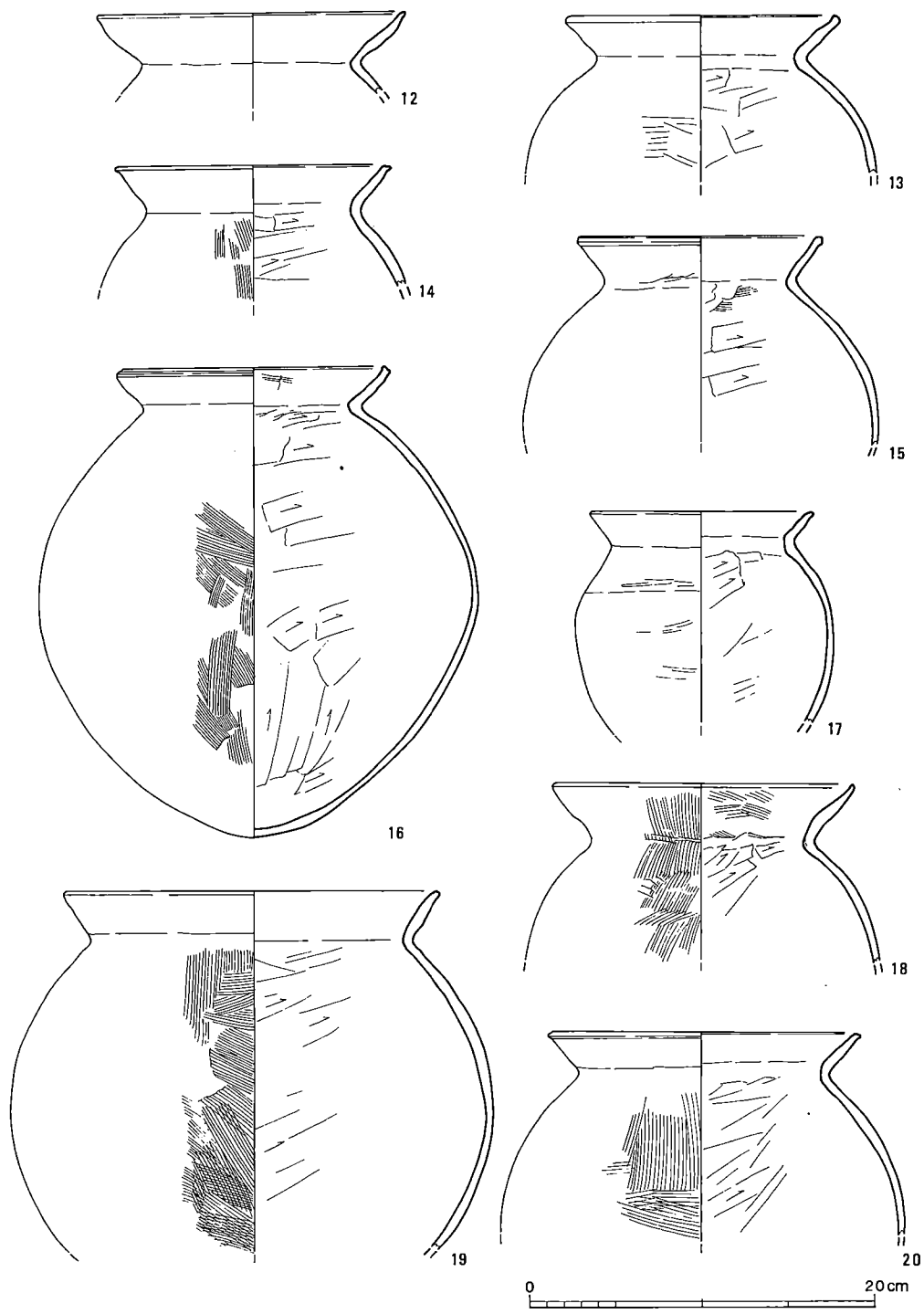
⑥は胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色を呈し、器面の調整はハケメを主体に使用している。頸部直下に波状の沈線文を施している。以下に斜めのハケメを消すように、縦位のハケメが見られている。頸部から口縁部にかけて、ヨコナデ仕上げで、ハケメを消している。内面は頸部以下ヘラケズリである。

⑦は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黒褐色を呈し、器面の調整はタタキを頸部以下に施している。内面はナデ仕上げで、口縁付近にハケメが残っている。焼成は良好である。

⑧は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄灰色で、器面の調整は器面全体がマメツ気味で、胴部下半にハケメが残っている。焼成は良好である。復原口径17.0cmである。

⑨は胎土に細粒砂を含み、色調は黄橙色で内外面ススが付着している。器面の調整は全体がハケメで、口縁部付近はナデ消している。内面の頸部以下にはヘラケズリである。復原口径15.2cmである。

⑩は胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色を呈している。二次火勢を受けてススの付着がみら



第13図 辻垣ヲサマル遺跡 2区出土遺物実測図 ②(土器) (1/4)

れる。器面の調整はハケメで、内面はヘラケズリである。口径14.4cm、胴部径20cmで、焼成は良好である。

⑪は全体の器形がわかるもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、口縁部と胴部から底部にかけてススが付着している。口径14.4cm、胴径15.6cm、器高17cmである。器面の調整は頸部付近にハケメが残っているが、工具の小口を使用してミガキを入れている。内面はヘラケズリで、底部は工具によってナデている。口縁部の付近も両面ともヨコナデである。焼成は良好。

⑫は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、復原口径は18cmである。器面の調整はヨコナデで、内面の頸部以下はケズリである。焼成は良好。

⑬は胎土に細粒を含み、色調は黄褐色で黒味を帯びている。器面の調整はハケメと内面はケズリである。焼成は良で、全体的にマメツしている。復原口径は18.0cmである。

⑭は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色に黒味をおびている。器面の調整はハケメを施している。内面はヘラケズリである。焼成良好。復原口径は15cmである。

⑮も胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、二次火勢を受けているためススの付着がみられている。器面の調整はナデ仕上げで、内面はハケメが残っている部分もある。頸部以下はヘラケズリである。口径14.4cmで焼成は良好。

⑯は完形のもので、口径15.9cm、最大胴径25.5cm、器高27.6cmで、外面にススの付着があり、かなり二次火勢を受けている。胎土には細粒を若干含み、色調は黄褐色で、黒味をおびている。器面の調整は外面にはハケメを施し、口縁部付近はヨコナデで、内面の頸部以下はヘラケズリで、器壁を薄くしている。底部は丸底である。典型的な甕である。

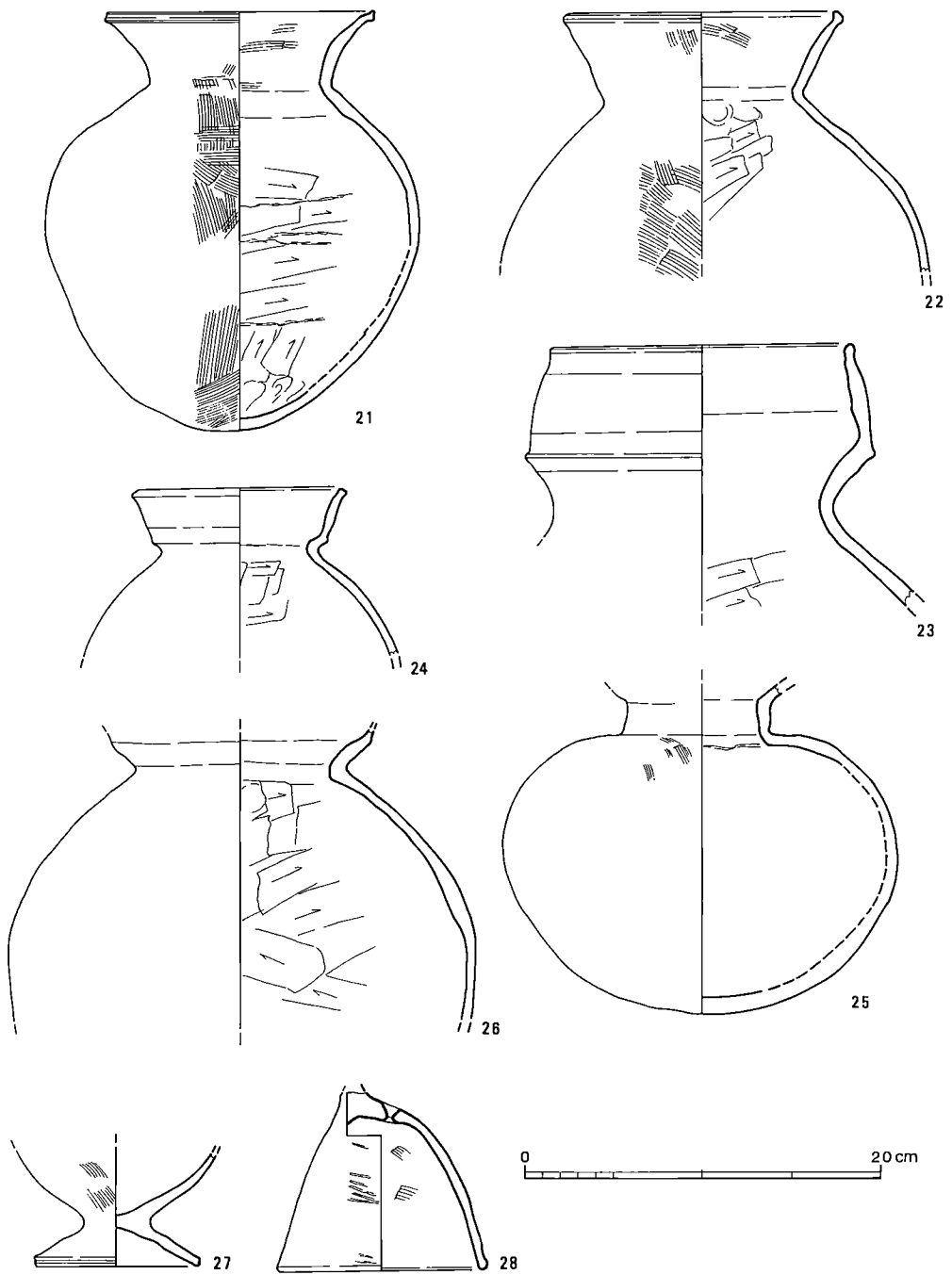
⑰は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で黒味をおびている。器面の調整は、外面はミガキを入れて丁寧仕上げているもので、頸部以下はケズリである。部分的に指圧痕が残っている。口径13.0cmで、焼成は良好である。

⑱は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色に黒味を帯びている。二次的な火勢を受けているためススの付着がみられる。器面の調整はハケメが全体に施され、内面はハケメと頸部以下ケズリである。焼成は良好で、口径17.5cm。

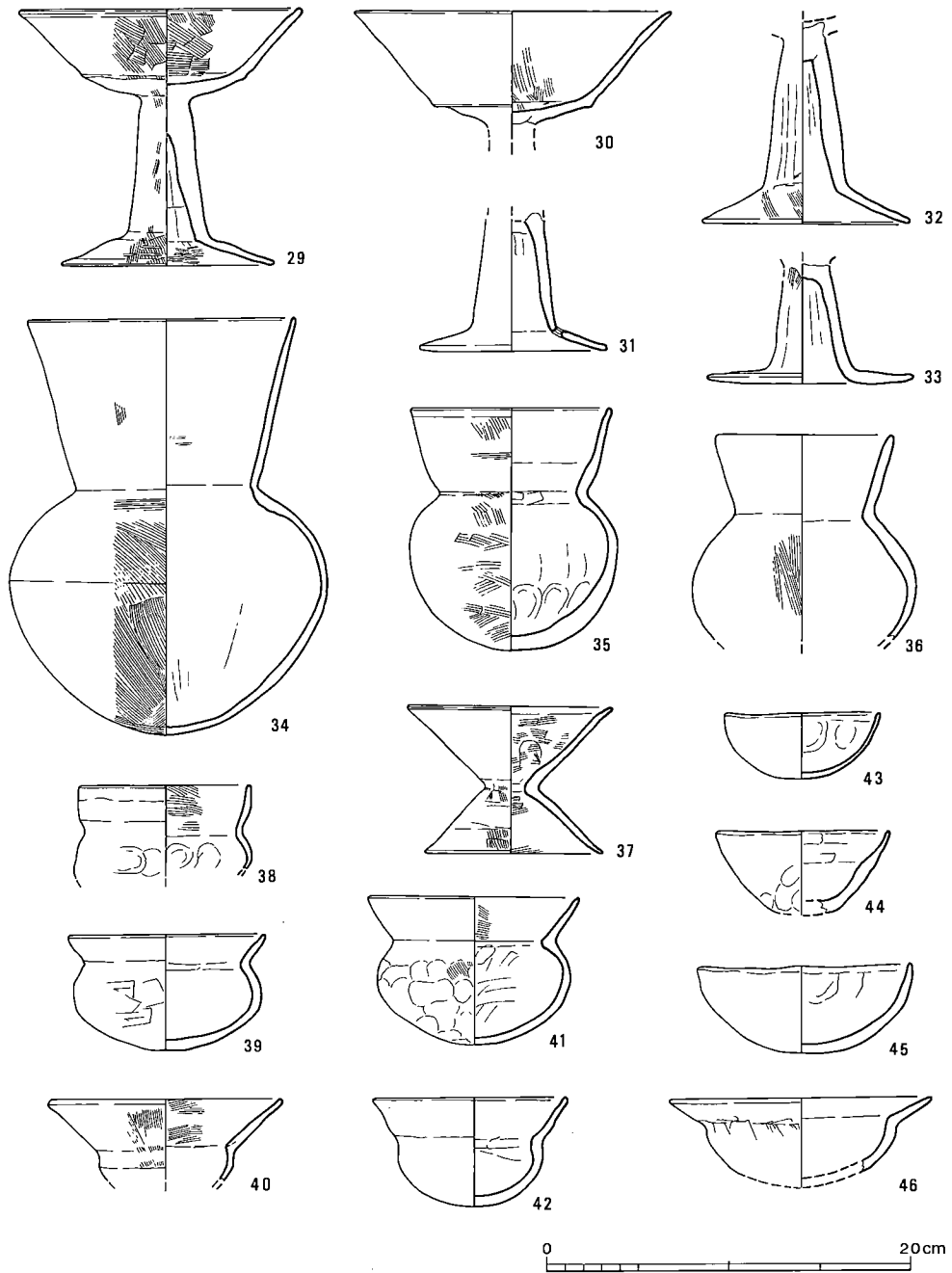
⑲も胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色に、黒味をおびている。復原口径は22.2cmで焼成は良好である。二次的な火勢を受けているため、頸部を除きススの付着がみられている。器面の調整はハケメと内面はヘラケズリを使用している。

⑳は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で黒味をおびている。器面の調整は肩部以下にハケメが施されている。内面も頸部以下にヘラケズリである。焼成は良好。

㉑は胎土に細粒砂を多く含んでいる。色調は黄褐色で、黒味をおびている。二次的な火勢を受けてススが付着している。ススは胴部以下と口縁部周辺である。器面の調整は外面は細いハ



第14図 辻垣ヲサマル遺跡 2区出土遺物実測図 ③(土器) (1/4)



第15図 辻垣ヲサマル遺跡 2区出土遺物実測図 ④(土器) (1/4)

ケメである。内面はヘラケズリが中心で、仕上げにヨコナデである。口縁部の一部にハケメが残っている。口径15.2cm、胴部最大径21cm、器高23.6cmで、焼成は良好である。

②は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で若干灰色ぽい。口径16cm、胴部最大径は30cmを計ると思われる。器面の調整はハケメを全体的に施している。内面は口縁部周辺にハケメが残り、以下ヘラケズリである。接合部分には指圧痕が残っている。焼成は良好である。

③は胎土に細砂を多く含み、色調は白灰色から暗灰色を呈している。口縁部にススが付着している。口径17.1cm。器面の調整はヨコナデで内面にはケズリが施されている。口縁は内傾気味である。

④は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色を呈し、一部黒変している部分あり、器面の調整はヨコナデで、内面はヘラケズリである。復原口径は約12cmである。口縁部は外傾している。

⑤は胴部破片で、球体状となり、丸底を呈する。口縁部は欠損している。胎土に細砂を多く含み、色調は黄褐色に灰橙色で、一部に黒斑あり、器面の調整はハケメが一部に残り他はケズリで、内面はヨコナデか、焼成は良好である。

⑥は胴部破片で、長胴になるもので、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で、若干黒味を帯びている。器面の調整は、外面は器面のマメツがあるためナデであることは確認できた。内面はケズリである。焼成は良好である。

**台付甕 (27)** 台の部分周辺部の破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色で、外底部は黒灰色を呈し、焼成は良好である。器面の調整はハケメと台部はナデである。

**支脚 (28)** 胎土に砂粒を含んで、色調は暗灰色を呈し、天井部に穿孔が1個あって、全体に二次火勢を受けている。器面の調整はナデ仕上げで、一部にハケメが残っている。

**高杯 (第15図29~33)** ②9は完品で、③0は杯部破片、③1~③3は脚部の破片である。

②9は杯部の口径15.8cmで、脚部底径11.5cm、器高14.2cmを測る。胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好で、外側に一部黒斑あり、器面の調整は杯部の両面ともハケメである。脚部は段を有しながら大きく屈曲する、そして裾広くなる。両面とも細いハケメである。

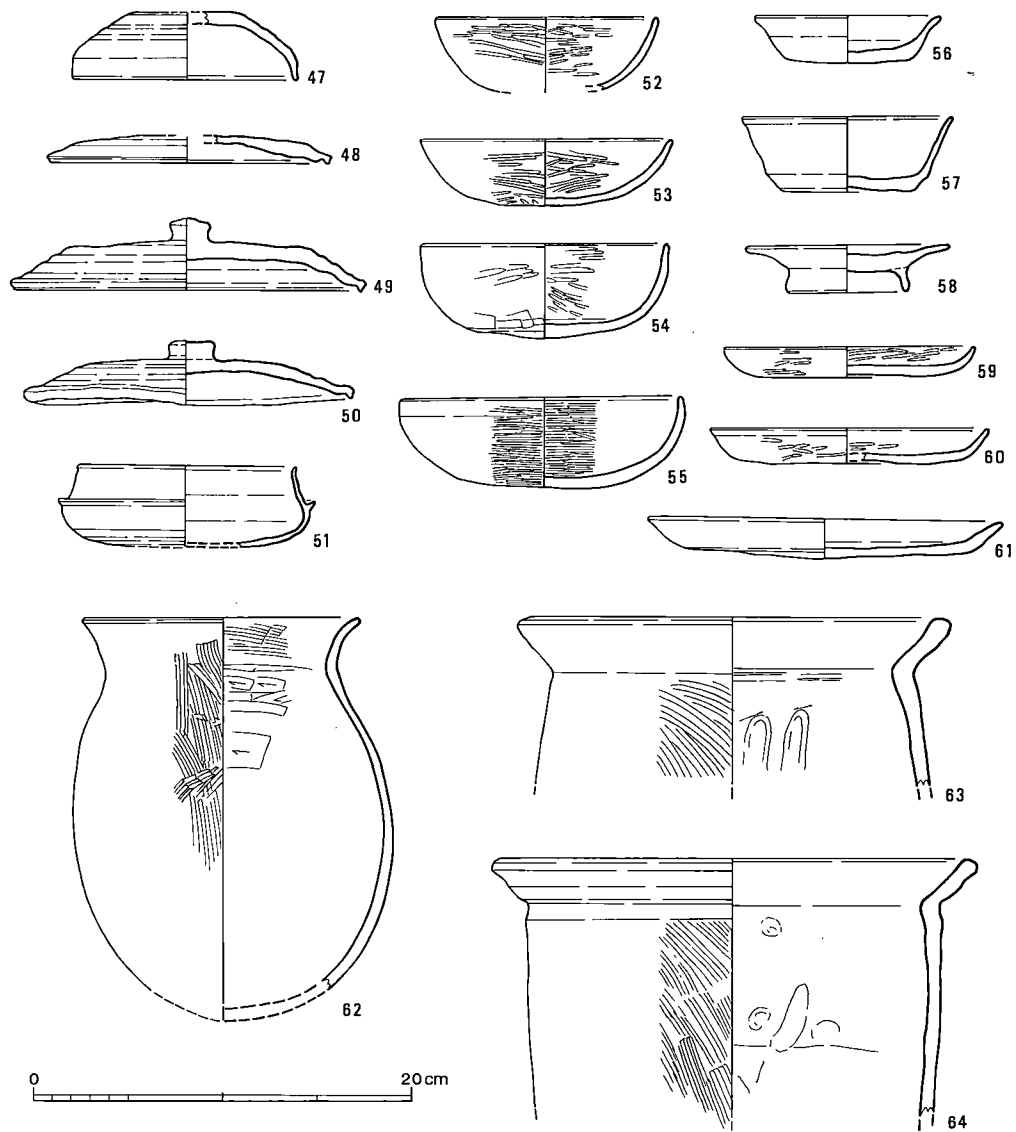
③0は杯部で、胎土に細粒砂を含み、色調は赤橙色で、焼成は良好である。口径17.6cmで、器面の調整は外面は磨滅しているがナデである。内面はハケメである。焼成は良好である。

③1はエンタシス状の柱状部である。裾部径は11cmで、穿孔を有している。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈している。焼成は良好である。器面の調整は内面ナデにて、外面は磨滅してみえない。

③2は柱状部である。裾部径は11.4cmを計る。胎土は砂粒を含まない精良な粘土を使用している。色調は褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は柱状部はナデで、裾部にはハケメを使用している。内面はヨコナデか。

③3は小型のもの柱状部で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、裾部の径は11.5cmで、屈





第16図 辻垣ヲサマル遺跡 2区出土遺物実測図 ⑤(土器) (1/4)

曲が著しく、土に付く面は大きい。器面の調整はナデで一部にハケメが残る。これからみるとハケメの後にナデ仕上げとなっている。黒変している部分も裾部内底面にある。

壺 (③4~③6) ③4は大型のもの、③5・③6は小型のものである。

③4は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、口径15cmで、器高23cmで、丸底である。焼成は良好で、器面の調整は球形部にはハケメが施され、口縁部は広い部分はナデでハケメが残っている。いわゆるハケメをナデ消している。内面についても、口縁部はハケメをナデ消している。球体部はナデで工具痕跡が見える。

③5は小型丸底のもので、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で一部に黒斑あり、焼成は良である。口径11.2cm、器高は13.4cm、器面の調整はハケメ後にナデ仕上げのため、ハケメが残っている。内面もナデである。

③6は胎土に砂粒を多く含み、色調は内外とも黄褐色を呈している。器面の調整はヨコナデで一部にハケメが残っている。底部が欠損している。

鼓型器台 (③7) 特種な遺物である。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で、口径11.5cm、底径10cm、器高8.30cmで、焼成は良好である。器面の調整はハケメの後ナデ仕上げである。内面も同様である。ハケメの残っている部分あり。山陰系の土器である。

鉢 (③8~④6) ③8については口縁部は、ほぼ直立している。球体部も若干くずれたものであったので、一応鉢とした。胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色で、口縁部の一部にはススが付着している。焼成は良好で、器面の調整はナデ仕上げで、内面にハケメが残っている。球体部には指圧痕がみられる。

③9は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、口径11cmで、器高6.5cm、焼成は良好である。器面の調整は、外面ヨコナデ、胴部はヘラケズリである。内面はヨコナデである。

④0は胎土に細粒砂を含み、器面の調整は内面がハケメで胴部にはヘラケズリで、外面はハケメである。焼成は良好、器高は低いものとみられる。色調は黄褐色である。

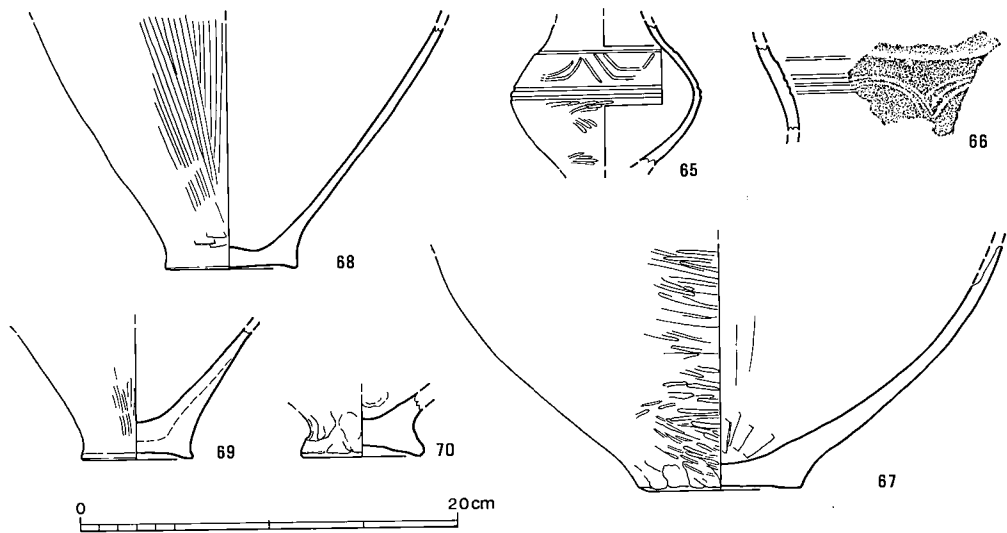
④1は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈している。焼成は良好で、器面の調整はハケメの後にヨコナデで、球体内面はケズリを施している。焼成は良好である。一部に黒斑がある。

④2は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で明るさがある。焼成は良好で、器面の調整はヨコナデ、内面はナデである。口径10.3cm、器高6cmである。

④3は胎土に細粒砂を多く含み、口径8.6cm、器高3.6cm、色調は黄褐色を呈し、器面の調整はヨコナデで口縁部一部にススが付着している。焼成は良好である。

④4は胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰褐色を呈し、器面の調整はヨコナデである。焼成は良好である。

④5は胎土に細粒砂を多く含み、色調は暗灰色を呈し、外面にスス付着がみられる。口径12cm、器高5cmである。器面の調整はヨコナデである。焼成は良好。



第17図 辻垣ヲサマル遺跡 2区出土遺物実測図 ⑥(土器) (1/4)

④⑥は胎土に細粒砂を多く含み、色調は暗灰色で、内外面に一部分ススの付着がみられる。焼成は良好である。器面の調整はナデ仕上げである。口径14.6cm、器高4.9cmである。

### 大溝の上層出土遺物 (第16・17図、図版35)

奈良時代の須恵器のツمام付蓋・中型の皿と土師器皿・杯・盤・甕等がみられている。⑤①の様な古手の須恵器が混在していた。

杯 (④⑦~⑤⑦) ④⑦は蓋の破片で、復原口径が約12cmで、器高3.6cmである。色調は灰褐色を呈して、胎土は細粒砂を多く含み、焼成は軟質である。

④⑧ツمام付の蓋の破片で、ツمامの部分が欠損している。口径15cmで、色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。胎土に細粒砂を含んでいる。

④⑨ツمام付の蓋で完形品である。口径18cmで、器高3.8cm、典型的なものである。胎土に細粒砂を含み、色調は青灰色で、焼成は良好であった。裏面には鉄分の付着がみられる。

④⑩もツمام付の蓋で、口径18.6cm、器高3.4cmである。胎土に細粒砂を含み、色調は青灰色で、焼成は良好であるが若干軟質である。

④⑪は杯の身の破片で、古手の須恵器である。体部に浅さめで、口唇部は外側にナデ上げられている。胎土は精良な粘土を使用し、色調は黒味を帯びた青灰色で、焼成は良好である。

④⑫~④⑰まで土師器のもので、各タイプの杯である。口径は10cm~15.2cmまでを計測するが、

⑤②～⑤⑤は平底に近い丸底で、器高も2.5cmから4.8cmまで各種ある。⑤⑥・⑤⑦は平底を呈するものである。色調は黄灰色から褐色までみられる。

その中で完形品である⑤⑤は、胎土に細粒砂を含み、色調は褐色で、器面調整はヘラミガキで、内面はナデ仕上げである。底部の大半は黒変している。指圧痕が残っている。焼成は良好である。ヘラの痕跡は明瞭にわかる。

**高台付杯 (⑤⑧)** 杯身に高台を付けたもので、高台までいれた器高は2.6cmで、高台は外反している。胎土に細粒砂を含み、色調は黄灰色を呈し、焼成は軟質である。

**皿 (⑤⑨・⑥⑩)** 両者とも土師器で、胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色を呈し、調整は内外面ともヘラミガキである。焼成は良好で、ヘラの痕跡が暗文風に残っている。

**盤 (⑥⑪)** 須恵器で、口径19cmで、器高2cmである。胎土には精良なる粘土を使用し、色調は灰色を呈し、焼成は良好であるが若干軟質である。器面の調整はナデ仕上げである。

**甕 (⑥⑫～⑥⑭)** 煮沸に使用するもので、胴の長いもので、底は丸底を呈する。⑥⑫は口径15cmで、胴の径は17cmである。胎土に細砂を含み、色調は灰褐色で、焼成は良好、2次的な火勢を受けている。そのためススの付着がみられる。器面の調整は縦位ハケメで、内面はヘラケズリによって整えている。⑥⑬・⑥⑭は口縁部破片で、口縁部は「く」字状を呈し、胴長のものである。胎土・色調・器面の調整は⑥⑫に同様である。

## 大溝の溝底出土遺物 (第17図)

**壺 (⑥⑮・⑥⑯・⑥⑰)** 弥生前期の土器片で、⑥⑮は小型の壺の胴部破片である。胴径10cmで頸部直下に沈線が一条めぐり、その下に4区画に弧文がめぐって、沈線が2条めぐっている。胎土に細砂を多く含み、色調は褐色から黒色を呈し、焼成は良好である。

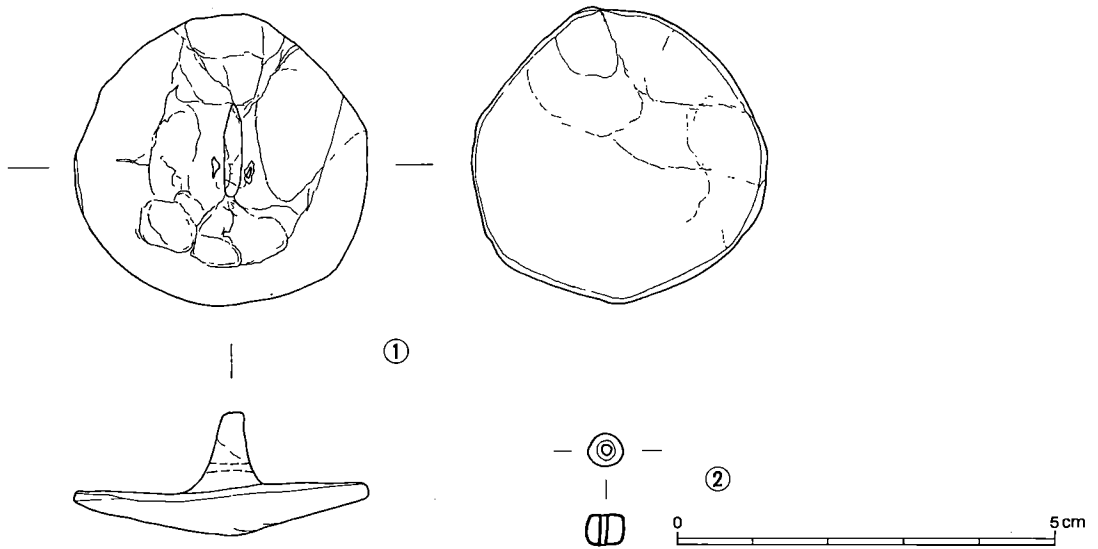
⑥⑯は頸部破片で、頸部直下に一条の沈線がめぐり、弧線文を配置されている。胎土に細粒砂を含んでいる。色調は黄褐色を呈する。焼成は良好である。

⑥⑰は胴部下半から底部に破片で、底径8.9cm、胎土に砂粒を多く含み、色調は外面では黄褐色で、内面は黒褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は表面は横位方向にヘラでミガキ、内面はナデで、部分的に工具痕残る。底部はナデで部分的に指圧痕が残っている。

**甕 (⑥⑱・⑥⑲・⑥⑳)** 3点とも底部破片である。

⑥⑱は胎土に細粒砂を含み、色調は黄味を帯びた黒色を呈している。焼成は良好である。底径7.0cmである。器面の調整は縦位のハケメで、内面はナデで磨滅気味である。一部には黒変がみられる。

⑥⑲の底部は6cmで若干上げ底である。胎土は細粒砂を多く含み、色調は2次的加熱のため赤橙色で、内面は橙褐色から黒味を帯びている。焼成は良好である。器面調整は磨滅気味のハケ



第18図 辻垣ヲサマル遺跡2区出土遺物実測図 ⑦(特殊遺物) (1/1)

メがみられ、内面はナデである。

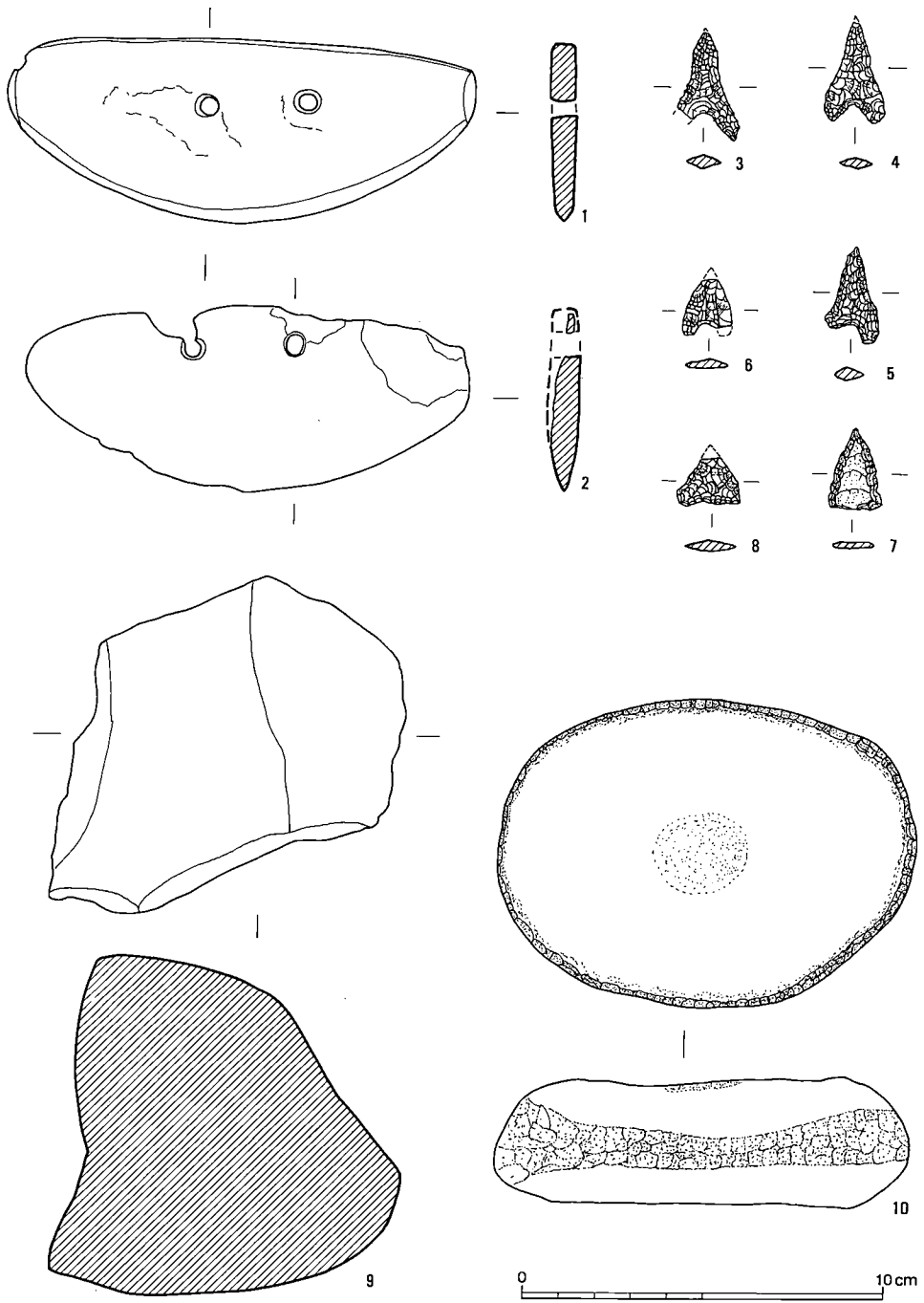
⑦の底径は6.6 cmで若干上げ底である。胎土に細粒砂を多く含みと雲母がみられる。色調は赤褐色で2次加熱を受けている。器面の調整は内外面とも指圧痕が残っている。

### 特殊遺物 (第18図、図版48)

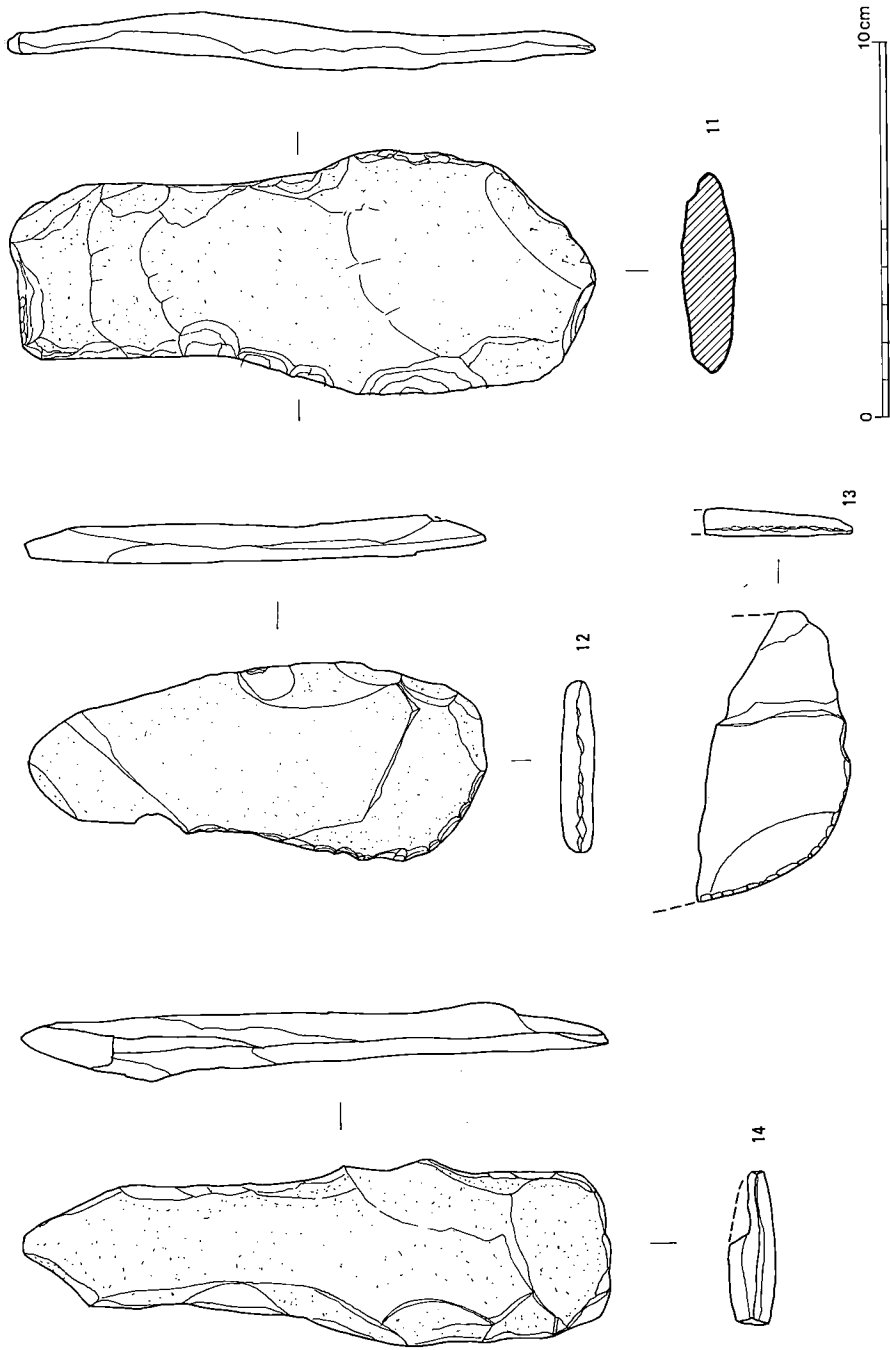
大溝の中より出土もので、土製の模造鏡・ガラス小玉の2点が検出された。興味深い遺物である。

**土製模造鏡 ①** 手捏で作られているもので、粘土の塊を掌の中で押し広げ、土盤状とした後で、その中央部にツマミ(鈕)をつくり出している。ツマミの作り方は、右手の親指と人差指を粘土盤の中央に当てがい、力を入れて押し窪めるとともに両指の間で粘土をつまみ上げて撮みとしているもので、親指・人差し指の爪が粘土に食込んで、爪痕がみられる。窪みの大きさからすれば、指はそれなりに大きさが必要とするので、男が作ったものとも考えられる。鏡面になる部分についても、指圧痕が残っている。鈕の穿孔については、左→右へ竹串で孔があげられている。胎土に細粒砂を含み、色調は鈕の部分から鏡背にかけて黄褐色を呈し、鏡面の大半は灰黒色をなしている。焼成は良好である。

**ガラス小玉 ②** 色調はライトブルーで、気泡が上下に、引っぱった様にはいている。引き伸ばしながら、切ってまるめて作ったもので、直径は5 mmで、孔径2.5 mmである。厚さは4 mm。大溝の第6層黒灰色粘土層より検出されている。



第19図 辻垣ヲサマル遺跡2区出土遺物実測図 ⑧(石器) (1/2)



第20図 辻垣ヲサマル遺跡2区出土遺物実測図⑨(石器)(1/2)

石器 (第19・20・21図、図版37・38)

大溝の中から出土したもので、石庖丁・石斧・磨石・砥石・石鏃等であった。

石庖丁 (①・②) ①は石材は凝灰岩製で完品である。穿孔は両側からで、紐づれがみられる。刃部には擦痕が走っている。重量は74.9gで、よく使用されている。

②は凝灰岩製で、紐通し等が欠損している。穿孔は両側のもので、刃部の稜線は見られないほど磨れている。重量は46.0gである。

石鏃 (③～⑧) 6点とも溝底から出土しているものである。

③は姫島産の黒曜石製で、片方の脚部が欠損している。抉りの深いタイプの物で、加工は押圧剥離で作られている。重量は0.8gである。

④は③と同じ姫島産の黒曜石製で、抉りが浅いタイプの鏃である。押圧剥離で作られている。重量は1.0gである。

⑤は腰岳産の黒曜石で、片方の脚部の一部が欠損している。押圧剥離で作られている。

⑥は姫島産の黒曜石を使用しているもので、型は逆ハートで、加工は押圧剥離で裏面の方が細い。

⑦は安山岩製の三角鏃と思われるもので、一部に欠損がみられる。

⑧は姫島産の黒曜石を使用した三角鏃で、断面は凸レンズ形を呈している。加工は押圧剥離で、丁寧に仕上げている。先端部に欠損がみられる。

砥石 (⑨) 石質は硬質砂岩製のもので、両面及び側面も使用されている。欠損品で、河原石を転用したものと思われる。重量は495gである。

磨石 (⑩) 安山岩製のもので、中央部が若干凹んでいるもので、周縁部を使用した。河原石を転用したものと思われる。

石斧 (⑪～⑲) 9点の大半は大溝の底から出土したもので、打製石斧であった。

⑪は揆状の打製石斧で、安山岩製である。重量は50gである。

⑫は小型の打製石斧で、安山岩製で、刃部と側面に剥離がある。重量は88.6gである。

⑬は、刃部のみ欠損品である。石材は粘板岩製と思われる。

⑭は短柵形の打製石斧で、安山岩製である。刃部には細かい剥離を施している。重量は143.6g。

⑮は小型の打製石斧の破片で、刃部には細かい剥離が残っている。粘板岩製のもの。

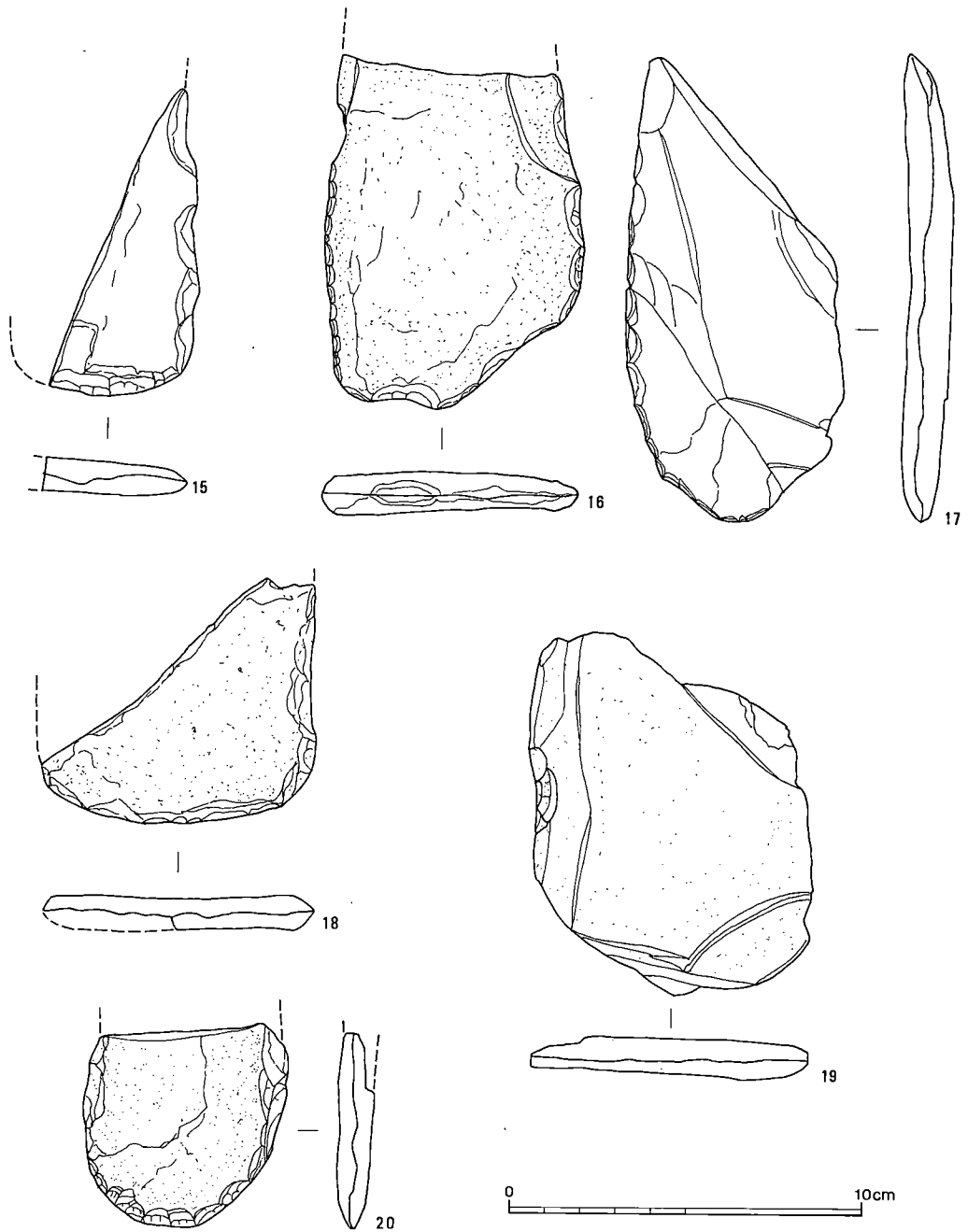
⑯は半欠品で、刃部には剥離がみられる。石材は粘板岩製である。

⑰は安山岩製で一部欠損しているものである。刃部には細い剥離がみられる。

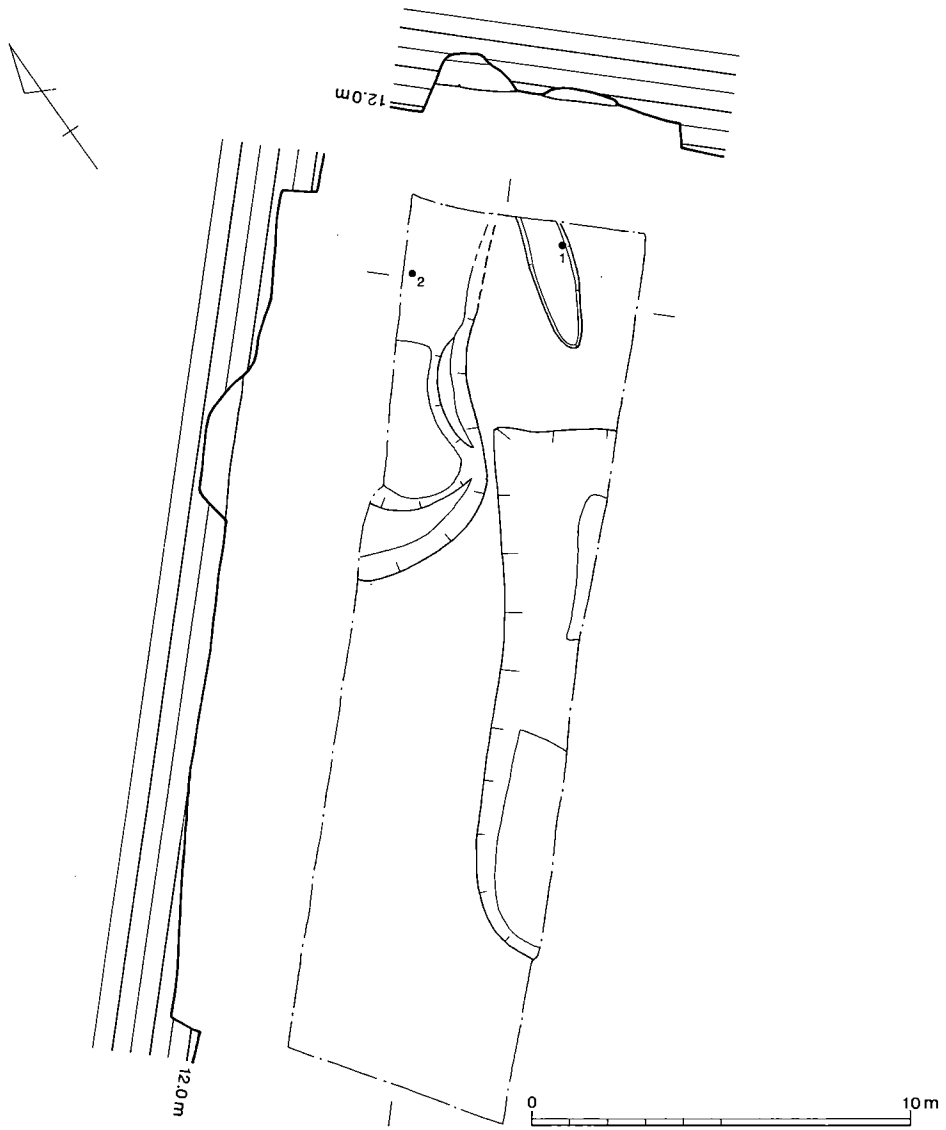
⑱は安山岩製で、刃部に近い部分の破片である。刃は細い剥離で、交互の剥離で表・裏から交互に剥離を施している。

⑲も安山岩製で、基部から欠損している。刃部は交互剥離によって作られている。溝底より出土している。





第21図 辻垣ヲサマル遺跡2区出土遺物実測図⑩(1/2)



第22図 辻垣ヲサマル遺跡 3区遺構実測図 (1/200)

### 土製円盤（第30図）

土器の破片を転用して、作られているもので、その側縁部を使用して磨き上げている。①と②とも溝の底より出土している。

①は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良好なもので、側縁部の一部のみ使用されている。大きさからは投げやすいものである。遊びの道具なのか？

②は胎土に砂を多く含むもので、色調は灰黒色、焼成は良好である。これも大きさからは投げやすいものである。側縁部がみがかれている。

③は胎土に砂を若干多く含むもので、色調灰黄色、焼成は良好である。側縁部は磨かれているものである。

### その他の出土遺物（第31図）

木製品の3又鍬の先の部分(図版17—(2))で、取り上げに失敗したもので、実測不可能であった。この他に木枝・流木・木の実類(第31図)である。木製品の製品は少なく、流木類が多く検出された。

このことは、水辺は澱となっていた。

### (3) 3区（第22図、図版13・14）

2区の南側に6m×25mで、150㎡のトレンチを設定した。

その結果、流路の中にトレンチが完全にはいっていた。しかしながら遺物等は若干みられた。

### 出土遺物（第24図、図版39）

3区から出土した遺物は少量であったが、2点上げることができる。

甕（第24図3—①・②） 3—①は口径18cm、器高28.9cm(復原)、胎土に細粒砂を含み、色調は橙褐色から茶褐色を呈し、胴部に黒斑あり、器面の調整は、表面はナデで、若干ハケメが残っている。内面はヘラケズリで、胴部以下はナデである。底部には指圧痕が残っている。焼成は良好である。

3—②は復原口径17.0cm、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は、内面はケズリで、頸部以下ヨコナデである。

時期的には古墳時代初頭のものである。



第23図 辻垣ヲサマル遺跡 4区遺構配置図(1/200)

#### (4) 4区 (第23~31図、図版15~17)

3区の南側に、11m×43mのトレンチを設定した、北側には、現在の水路があったため、5mほどの、控えをとっているため、全体の調査面積は360㎡であった。

当該区から、検出された遺構は次のとおりである。

流路の大溝と陸化された面での小溝である。この小溝は、5区、6区の円形周溝のものとは若干相違するものとみられる。

#### 出土遺物 (第24~28図、図版39~41)

①~⑧までは、甕の口縁部破片である。口唇部に刻み目を有するもの(①~⑥)と、ないもの(⑦~⑧)に大別できる。

甕(第24図①~⑧) 溝の中より出土したもので、①は胎土に細粒を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は、口縁の周辺はヨコナデで、工具痕跡がみられ、以下ミガキがかけられている。焼成は良好である。口唇部の下端に刻まれている。

②は胎土に砂粒を含み、色調は暗褐色を呈し、器面の調整は内外面ナデ仕上げで、焼成は良好で、刻み目は口唇全面である。

③は胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、復原口径は21.1cm前後である。器面の調整はナデで、口縁部付近にはススの付着がみられている。工具の痕跡は頸部付近の内外面に見られている。焼成は良好である。口唇部下端に刻み目がある。

④は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色を呈し、二次的な加熱を受けている。復原口径は24cmで、器面の調整はマメツ気味で不明である。口唇部下端に刻み目を施している。

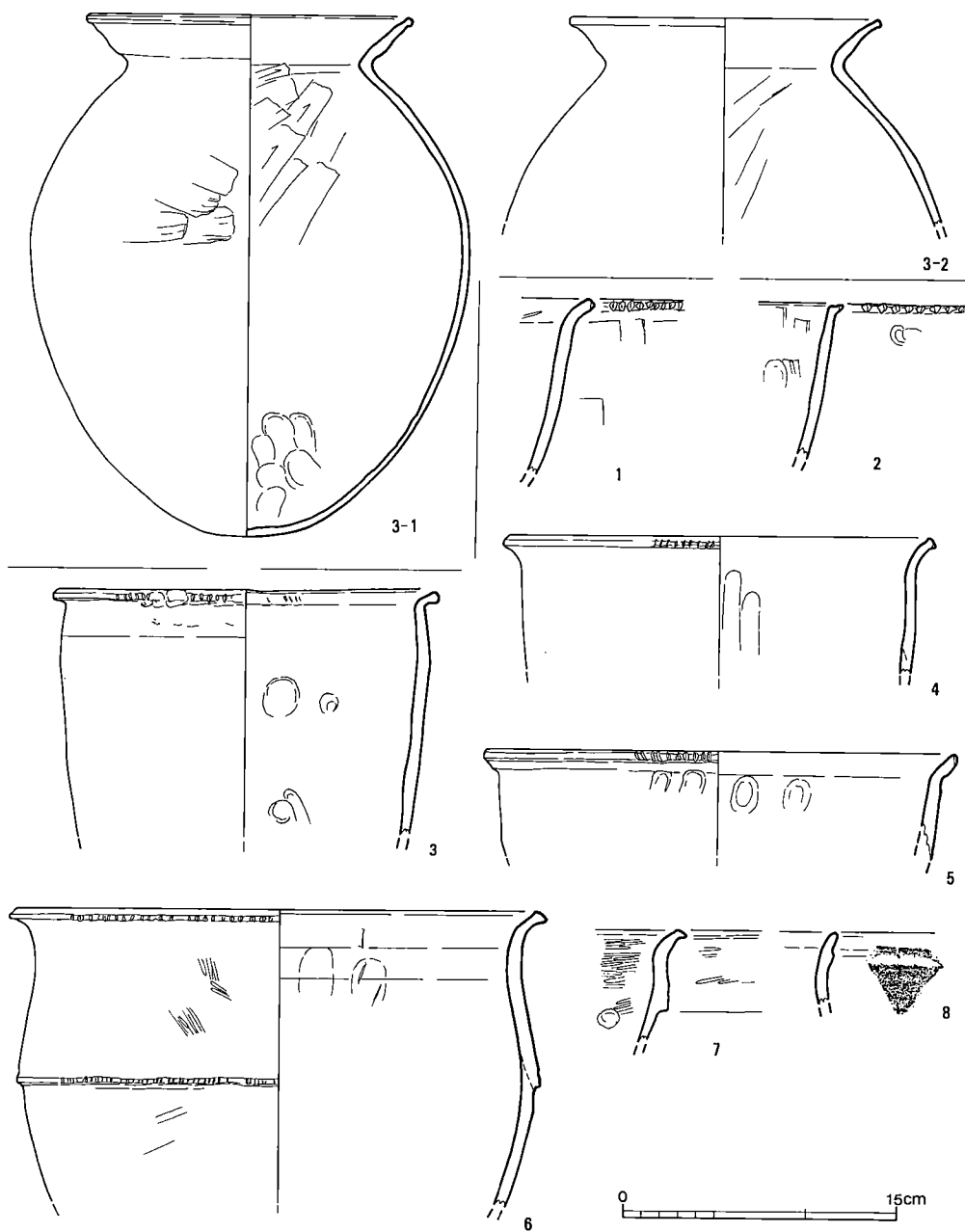
⑤は胎土に砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈し、復原口径26.0cmで、器面の調整はナデ仕上げのもので、口唇部に刻み目を施している。焼成は良好である。

⑥は胎土に砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈し、復原口径は30.0cmで、器面の調整は工具によるヨコナデで、外面はミガキが残っている。口唇下端部に刻み目を有し、内面には工具痕が残っている。刻み目は頸部下半に一条巡らせている。

⑦は胎土に砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈し、2次的に火勢を受けている。焼成は良好である。器面の調整はミガキがかけられている。

⑧は胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰褐色で、焼成は良好である。器面の調整はマメツしているが、一部にヨコナデの痕跡を有している。

⑨~⑰は甕の口縁部破片であるが、第24図に図示されているものとは相異なる。すなわち三角凸帯を有し、それに刻み目を入れているもので、ほぼズン胴型(筒型)を呈する器形である。頸部以下に一条の凸帯を有するものもあり、中九州の下城式の特徴を有している。⑱~⑳はこの



第24図 辻垣ヲサマル遺跡3・4区出土遺物実測図①(1/4)

れの底部破片を集めてみた。第26・27図は壺を中心に組んでみた。第28図は、古式土師器でまとめてみたが、出土した場所は溝の上層部のものであった。

⑨は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色を呈し、復原口径は22cmで、直立する口縁部に三角凸帯が一条巡っている。凸帯部に刻み目を入れている。器面の調整は両面とも工具によるナデである。

⑩は内傾する口縁部を有し、その直下に三角凸帯を有している。その上部に刻み目を施している。胎土に砂粒を多く含み、色調は黒褐色を呈し、器面の調整はナデで一部に黒斑がみられる。凸帯下部にはススの付着がみられている。

⑪は若干外傾する直口で、直下に三角凸帯を有し、その頂点に刻み目を有している。胎土に砂粒を含み、色調は黒味を帯びた黄褐色を呈し、器面の調整はヨコナデである。一部に指痕が残っている。焼成は良好である。

⑫は口縁部破片で、前述のものとは若干異なっている。若干外反する口縁で、その直下に三角凸帯を有している。その下にもう一条の三角凸帯を有し、その頂点部に刻み目を有している。胎土に砂粒を多く含み、色調は黒褐色を呈し、復原口径は29.8cm、焼成は良好である。器面の調整はナデで一部に指圧痕が残り、外面にススの付着がみられる。

⑬は口縁部破片で、直口口縁の直下に三角凸帯を有しているもので、胎土に細粒砂と雲母を含み、色調は黄褐色で、器面の調整はナデで三角凸帯の頂点には刻み目を有している。焼成は良である。

⑭は前者と同じ器形で、胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整はナデで、凸帯の頂点に刻み目を有している。

⑮は外反する口縁部直下に三角凸帯を有するもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄白色を呈し、焼成は良で、器面の調整はナデである。

⑯は内傾する口縁直下に三角凸帯をもつもので、胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整はヨコナデである。焼成は良好であるが軟質である。

⑰は口唇部に刻み目を有し、その直下に三角凸帯を一条巡らしている。その頂点部に刻み目を入れている。原体は同一のものと推定される。胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整はナデ仕上げである。

⑱は平底のもので、外面には二次的な火勢を受けている。胎土に細粒砂を含み、色調は赤味を帯びた黄褐色で、底径は7.4cm、器面の調整はナデである。

⑲も胎土・色調・器面調整は⑱に同様である。前者より若干黒味を帯びている。

⑳は甑で、内外面ともススが付着している。底径10cmの平底で、穿孔は両面より二次的に穿けている。一部に剝落がみられている。火勢を受けて赤味を帯びている。胎土に細粒砂を多く含み、色調は赤味を帯びた黒色を呈し、器面の調整はナデ仕上げ、焼成は良好である。

⑫は底径8cmで、内外ともススの付着がみられ、胎土に細粒砂を含み、色調は黒褐色である。焼成は良好で、器面の調整は両面ともナデである。

⑬は底径8.5cmの平底のもので、胎土に細砂を多く含み、色調は灰褐色を呈し、一部にススの付着がみられ、器面の調整は全体にマメツしているが、ナデである。焼成は良好である。

⑭は底径10.8cmで平底で、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黒味を帯びた黄褐色を呈し、外面にススの付着がみられる。器面の調整はナデである。

⑮は胎土に細粒砂を含み、色調は赤味を帯びた黄褐色を呈し、2次的に加熱されている。器面の調整はナデで、外底面は圧痕がみられる。焼成は良である。

壺（第26・27図） 溝から出土したもので、大形・中形・小形に大別される。

⑯は小形壺の口縁部破片で、胎土に細粒砂や雲母を含み、色調は赤味を帯びた黄褐色で、器面の調整は横方向にミガキが施されている。復原口径は11.0cmで2次火勢を受けている。焼成は良好である。口縁部は外反している。

⑰は大形のもので、胎土に細粒砂を含み、色調は茶褐色で、器面の調整は横方向のミガキが頸部から胴部にかけて、内面も同様である。胴部付近では工具痕が放射状に残っている。復原口径20.0cmで、焼成は良好である。

⑱は中形の壺で、復原要径10.4cm、胎土に雲母、角閃石を多量に含み、色調は黄褐色を呈している。焼成は良好。器面の調整は頸部に三条の沈線が巡ぐり、胴部上半に同様な三条の沈線がある。ナデ仕上げである。

⑲は大形の壺である。復原口径30.0cmで胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は両面にミガキをかけている。焼成は良好である。頸部下に工具痕跡がある。大溝砂礫層出土。

⑳は中形の壺で、胎土に細砂粒を含み、色調は灰褐色を呈し、内外面の調整はミガキがかかっている。口縁下に一条の沈線を有している。復原口径は18.0cmで、焼成は良好である。

㉑は大形の壺の口縁部破片で、復原口径は34.0cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整はヨコ方向にミガキである。

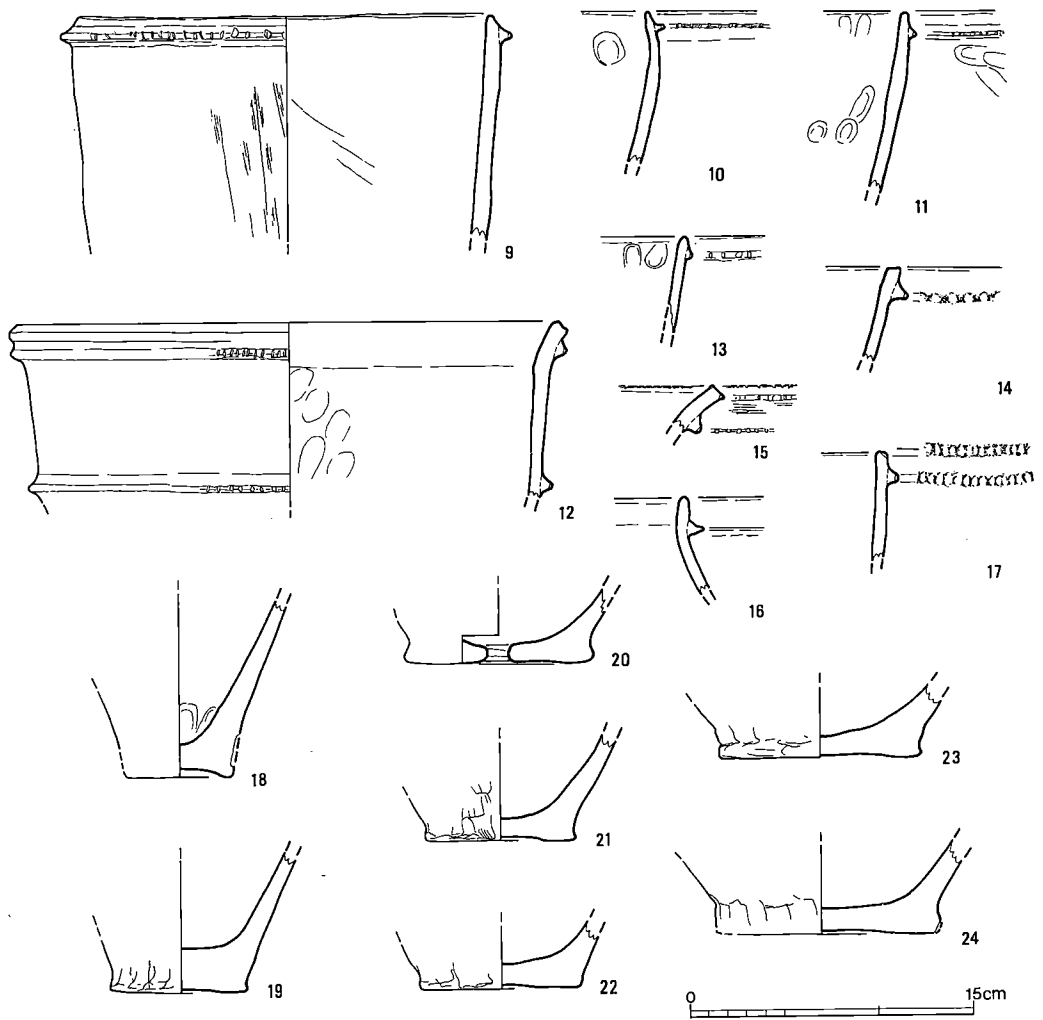
㉒は中形の壺で、復原口径は20.0cmである。胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰褐色を呈している。器面の調整は内外面に部分的にミガキが見られる。内面頸部下部はナデ仕上げと指圧痕がみられる。焼成は良好である。

㉓は大形の壺で、復原口径は口径は22.8cmで最大径は42cmである。胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色を呈し、器面の調整は胴部上面に2条の沈線がめぐり、外面はミガキを施している。内面はナデである。焼成は良好である。

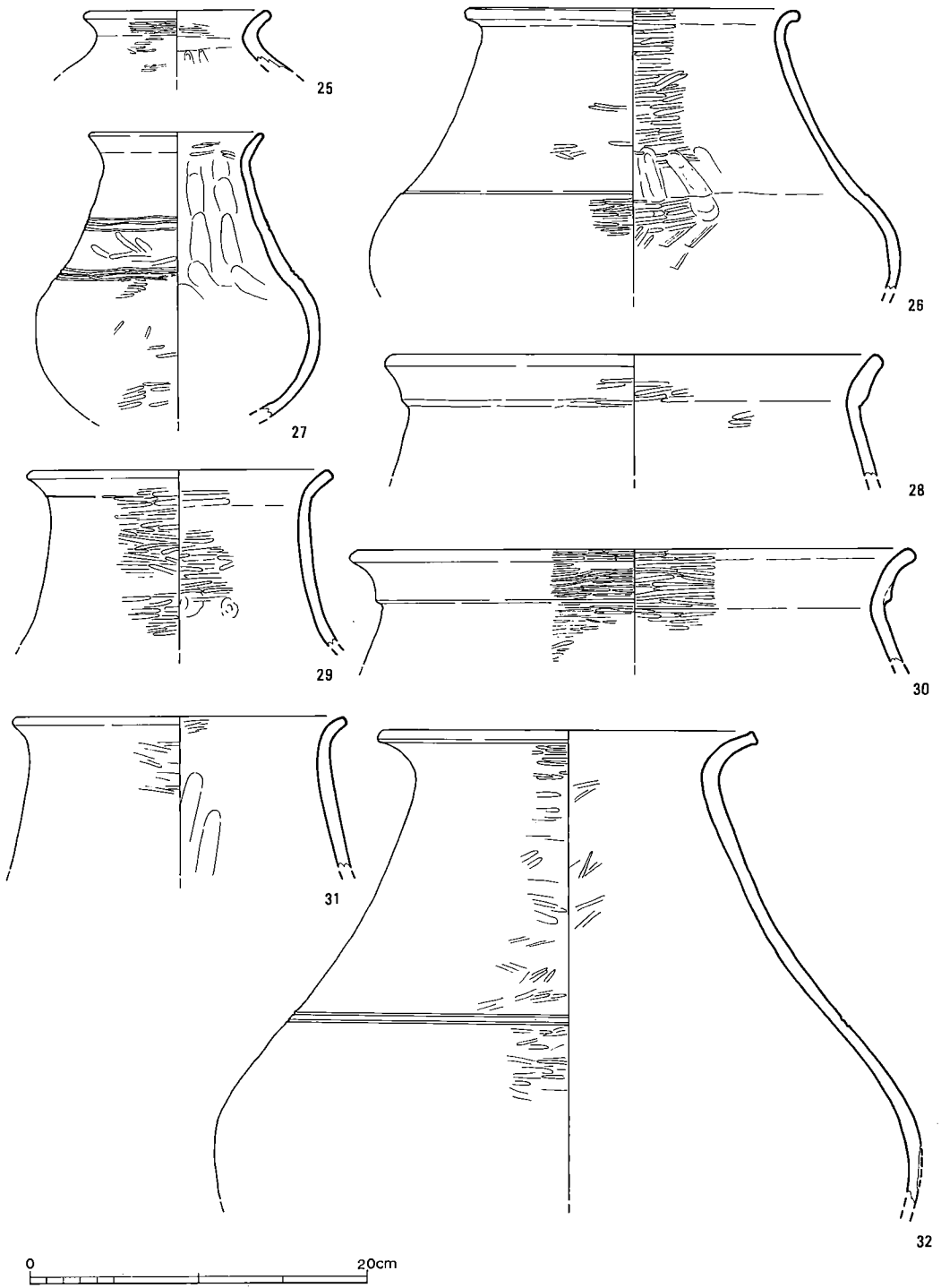
壺の胴部破片と底部をまとめてみたものが第27図である。

㉔は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良好である。胴部は沈線が3本巡ぐり、





第25図 辻垣ヲサマル遺跡4区出土遺物実測図② (1/4)



第26図 辻垣ヲサマル遺跡4区出土遺物実測図③(1/4)

その下に重孤文がみられる。器面調整はナデである。

③④は胴部文様に三条の重孤文が描れている。口縁部下部に二条の細い沈線を巡らしている。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈している。器面の調整は内外にミガキかけ、胴部下半にナデで、その上に文様を施している。

③⑤は胴部文様に2条の沈線とその下に3条の沈線による重孤文を配置し、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成良好で、器面の調整は内外ナデ仕上げである。

③⑥も胴部破片で、文様は前者より変化している。稜杉文の下に孤文を配置している。胎土に細粒砂を含み、色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成は良好で、器面の調整はナデ仕上げである。

③⑦は大形の壺の胴部破片で、3条の沈線を施し、その下部に7重の孤文を配置している。胎土には細粒砂や雲母を含み、色調は灰褐色を呈している。焼成は良好で、器面の調整は外面はミガキ、内面は上部でハケメで、下はナデ仕上げである。

③⑧は3条の沈線を有し、6重の孤文を有し、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良好である。器面の調整はナデである。内面に指圧痕が残っている。

③⑨の文様の工具は2枚具によって、文様を作っている。一条の縦の沈線で稜杉状の施している。胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色を呈している。焼成は良好である。器面の調整は内外面ミガキである。

④⑩は大形の壺の破片で、胴部の文様帯に2連の稜杉文を有している。胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色を呈している。焼成は良好である。器面の調整はミガキが中心である。胴径は31.2cmである。2次加熱を受けている。

④⑪～④⑰までは各種の底部である。

④⑪は小形のもので、若干上がり底気味の底部で、胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色を呈し、器面の調整は、外面ミガキ、底辺上面に2条の沈線を施している。底径6.0cm、焼成は良好である。

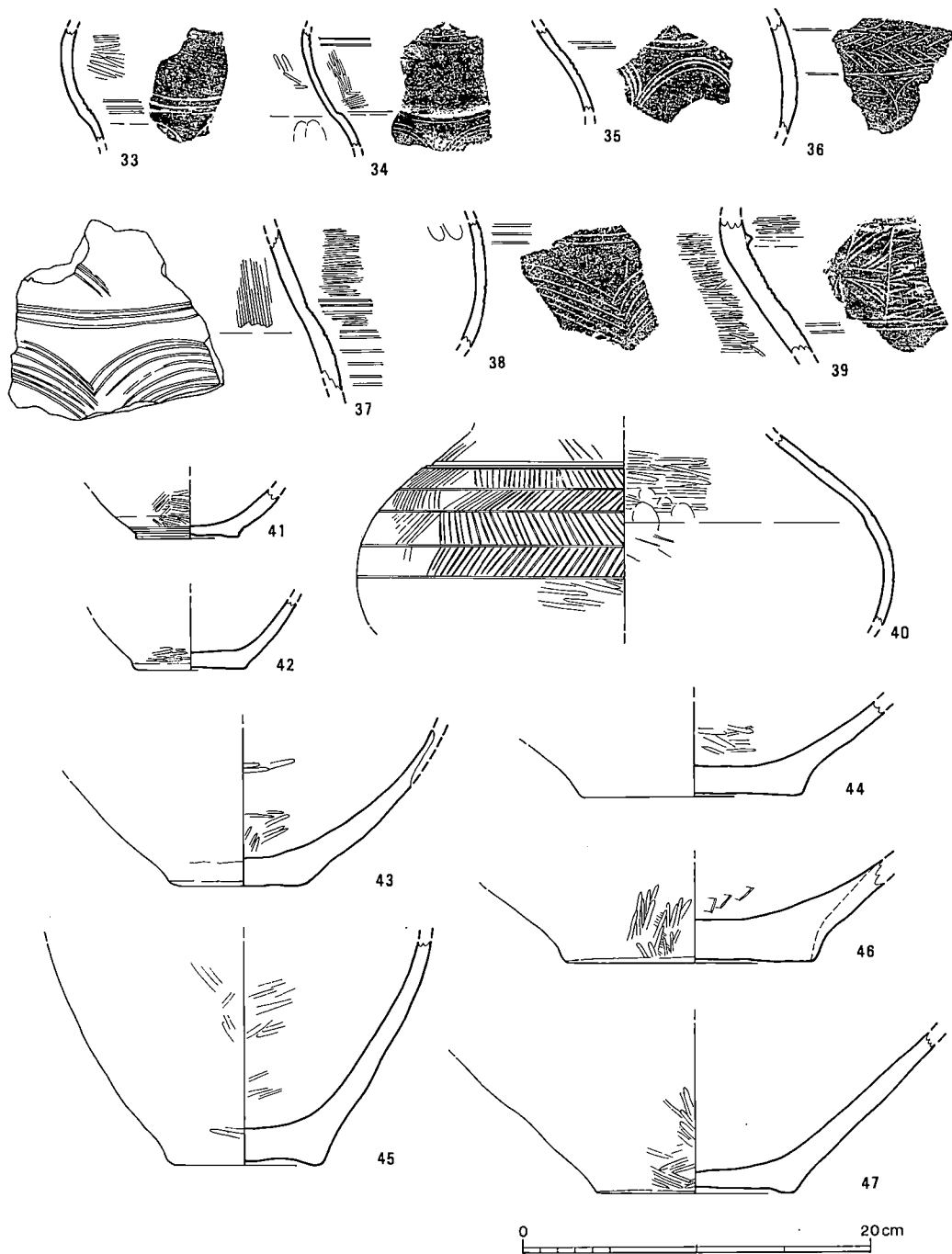
④⑫は前者と同じ様に小形なものである。胎土は細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。底径は6.8cmである。一部に黒斑あり、器面の調整はミガキと内面ナデである。

④⑬は中形の壺の底部である。胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整はナデ仕上げである。底径は8.2cmで、内外面にススが付着している。

④⑭は前者と同じ、中形のものである。胎土に細粒砂を多く含み、色調は灰褐色を呈し、2次的に火勢を受けている。部分的に黒斑を有している。底径は12.8cmである。焼成は良好である。器面の調整はミガキを施している。

④⑮は中形のもので、底径は9.0cm、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色を呈している。焼成は良好である。器面の調整は部分的にミガキが残っている。

④⑯は大形のもので、底径15cmで、胎土に細砂を多く含み、雲母片・角閃石をも若干含んでい



第27図 辻垣ヲサマル遺跡 4区出土遺物実測図④ (1/4)

る。器面の調整はハケメ後ミガキで、内底はナデにて工具痕跡あり、焼成は良好である。外面にススが付着している。

④7は前者と同じ、大形のもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、2次的な火勢を受けている。器面の調整は部分的にミガキが残っている。全体的にはマメツしている。

### 上層から出土した遺物（第28図、図版40）

④8～④4までの範囲について、大溝の上層から出土したもので、高杯・甕・壺等の種類が検出されている。

④8は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色に若干赤味を帯びている。高杯の破片である。いわゆる杯部と脚部との接点である。焼成は良好で、器面の調整は外面にはミガキが残っている。内面についてはナデである。

④9は小形の壺の口縁部で、丹塗りである。胎土に細粒砂を含み、雲母・角閃石等をもみられ、色調は灰褐色を呈している。器面の調整はミガキを施し、頸部の口2個の穿孔がみられる。2次加熱を受けている。焼成は良好である。

④0は大形壺の頸部破片である。頸部下に一条の三角突帯を有している。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は内面ナデである。焼成は良好である。

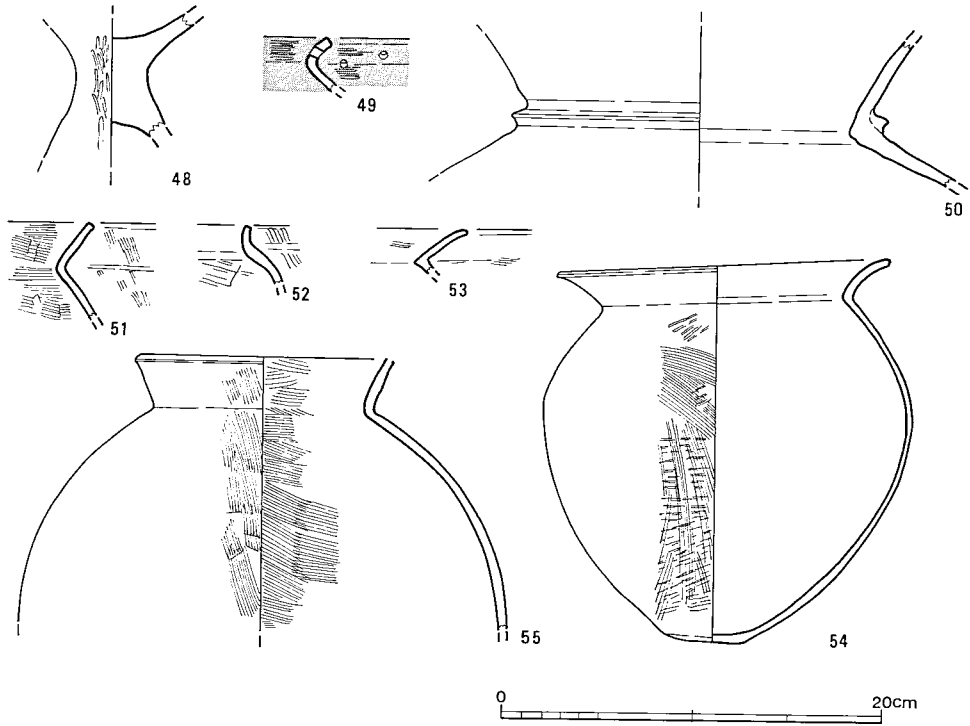
④1は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整はハケの後にヨコナデを内外面に施している。焼成は良好。

④2は口縁部砂片で、胎土に砂粒を含み、雲母粒と若干スコリアを含んでいる。色調は黄褐色で、器面の調整はハケメが残り、内面の頸部下半はケズリである。焼成は良好。

④3は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は内外面に若干ハケメが残り、「く」の字状の口縁部をなしている。焼成は良好である。古式土師器の口縁部である。

④4は完形の古式土師器の甕で、口径17.8cm、器高19.9cm、凸レンズ状の底で、底径は4.4cmを計測する。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、外面にはススの付着がみられ、黒色を呈している部分もある。器面の調整は外面はタタキの後にハケメで口縁部はヨコナデである。内面はナデである。焼成は良好で、一部に2次的加熱を受けている。ススの付着については頸部下半から胴部そして底部までいたっている。口縁部の上半と、同所の内面そして内底にススが完全にこびりついている。料理方法の内、炊きかたがわかるもので興味を引く土器である。布留式土器である。

④5は直口の壺である。胎土の細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、外面の頸部には黒斑を有している。復原口径14.0cmで、器面の調整は、ハケメを中心に内外面に施している。焼成は良好である。



第28図 辻垣ヲサマル遺跡3・4区出土遺物実測図⑤



## 石器（第29図、図版41）

大溝の中から出土したものを中心に図示してみた。器種は打製石斧・石庖丁・石鏃であった。

**打製石斧（①～⑤）** 大溝中から出土したもの。

①は安山岩製で、刃部には小さな剥離をもって刃となし、剥離は側縁部まで、丁寧に剥離を施している。重量80.2g。

②は粘板岩製で、刃部は局部磨製で、他は側縁部まで、剥離を施している。重量119.1g。一部欠損している。

③は粘板岩製で、刃部は局部的に磨かれて、側縁部まで剥離がみられる。重量110.7gである。

④は雲母片岩で、刃部は狭い部分を使用している。基本的には製作途中の未加工品に近いものである。重量164.7gである。

⑤は安山岩製で、形はととのったもので、刃部は局部的に磨かれているものである。両側縁も剥離を施して全体を整えている。重量73.8gである。

**石庖丁（⑥・⑦）** 溝の底から出土したものである。

⑥は基部の破片、粘板岩製で、刃部の一部と紐透の一部が残っている。石庖丁として中型のもので古手に位置するものである。

⑦は凝灰岩製で、刃部の一部しか残っていなかった。

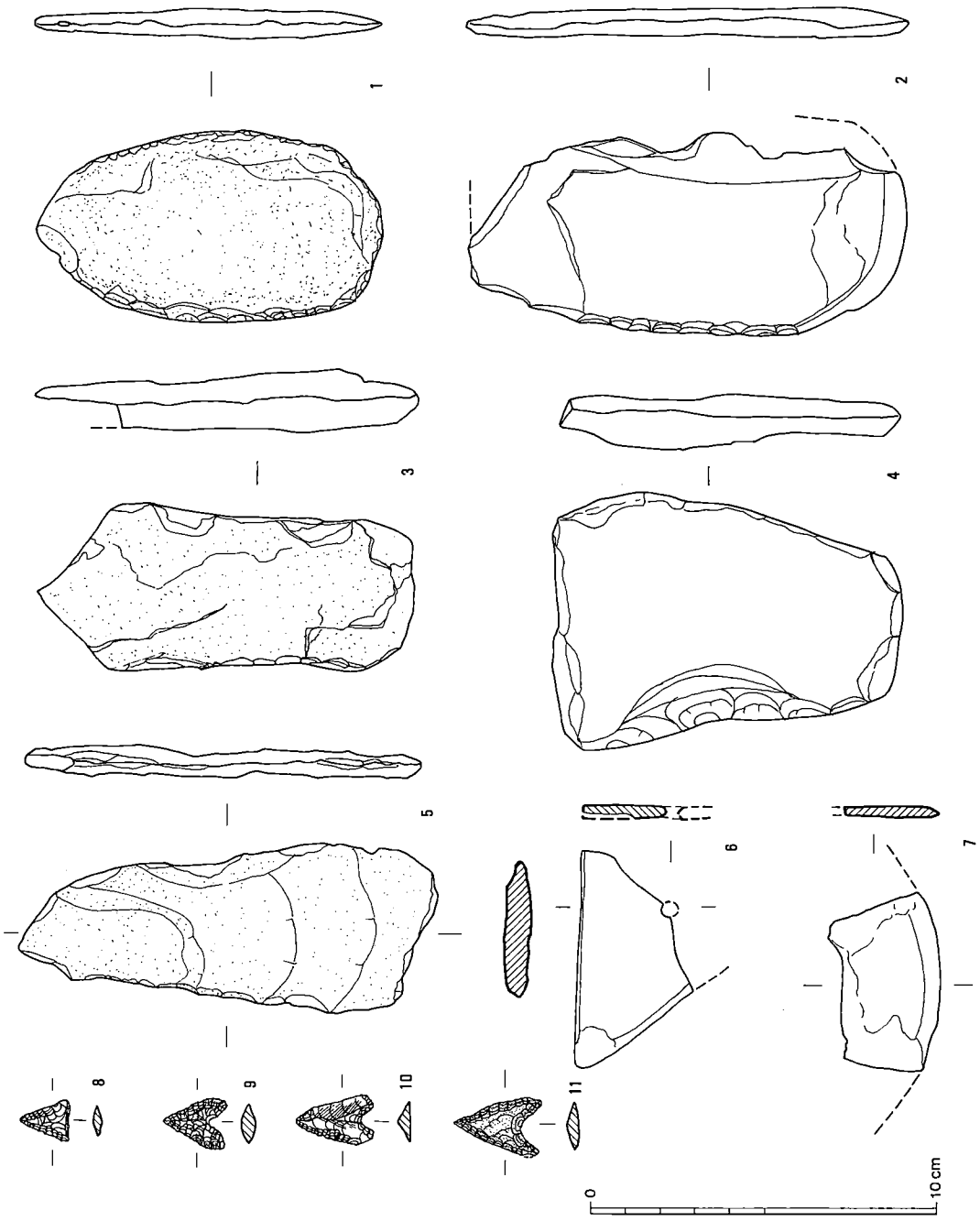
**石鏃（⑧～⑪）** 大溝の底より出土したもの。

⑧は黒曜石製で、丁寧な剥離を施している。断面は凸レンズ状を呈している。重量0.3gである。

⑨は腰岳産の黒曜石で、漆黒色をなしている。逆ハート型をしたもので、丁寧に剥離を施しているもので、押圧剥離で加工している。重量0.7gである。断面は凸レンズ状を呈する。

⑩は剥離鏃で、黒曜石製のもので、腰岳産のものであろう。基部を丁寧に加工し、片側縁部も細い剥離を施している。右側は剥離面をそのままにしている。断面は三角形を呈している。重量0.8g。縄文期の石鏃である。

⑪は安山岩製の打製石鏃で、剥離は全体に施されている。逆ハート型のもので基部の抉りは深い。断面は凸レンズ状を呈するものである。重量1.0gで、押圧加工で製作されている。縄文期のものと考えられる。



第29図 辻垣ヲサマル遺跡3・4区出土遺物実測図⑥(1/2)



## 植物種子 (第31図)

イチイ櫨・どんぐり・しい・くるみ・かしの実等の種子がみられる。落葉樹系統のものが主であった。これに木の根等の流木や風倒木等が大溝の中から検出されている。粘土層の中には落葉も含んでいた。

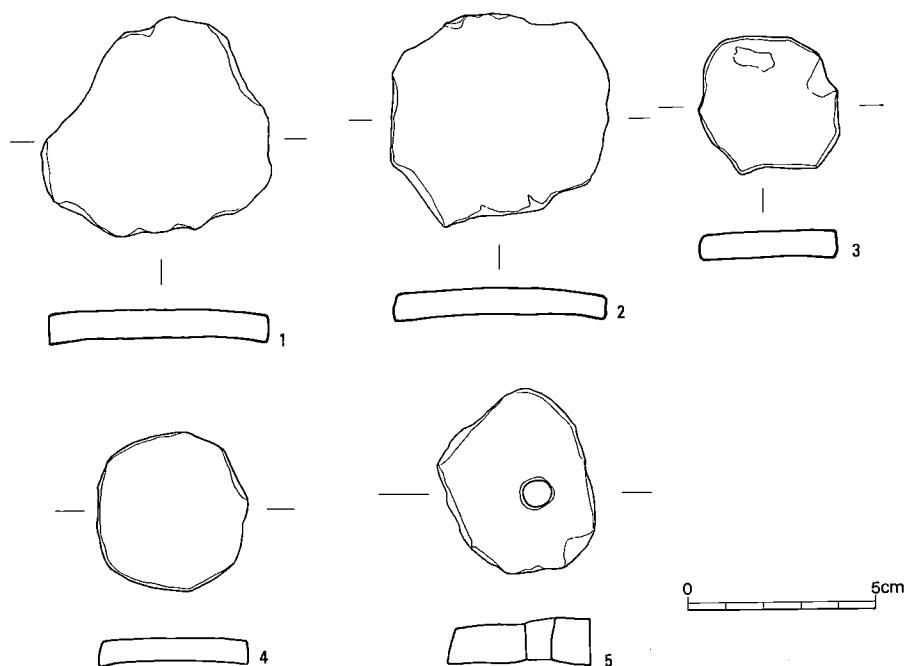
出土状態は第23図の4区配置図の中に区別して、マッピングしている。

## 土製円盤 (第30図)

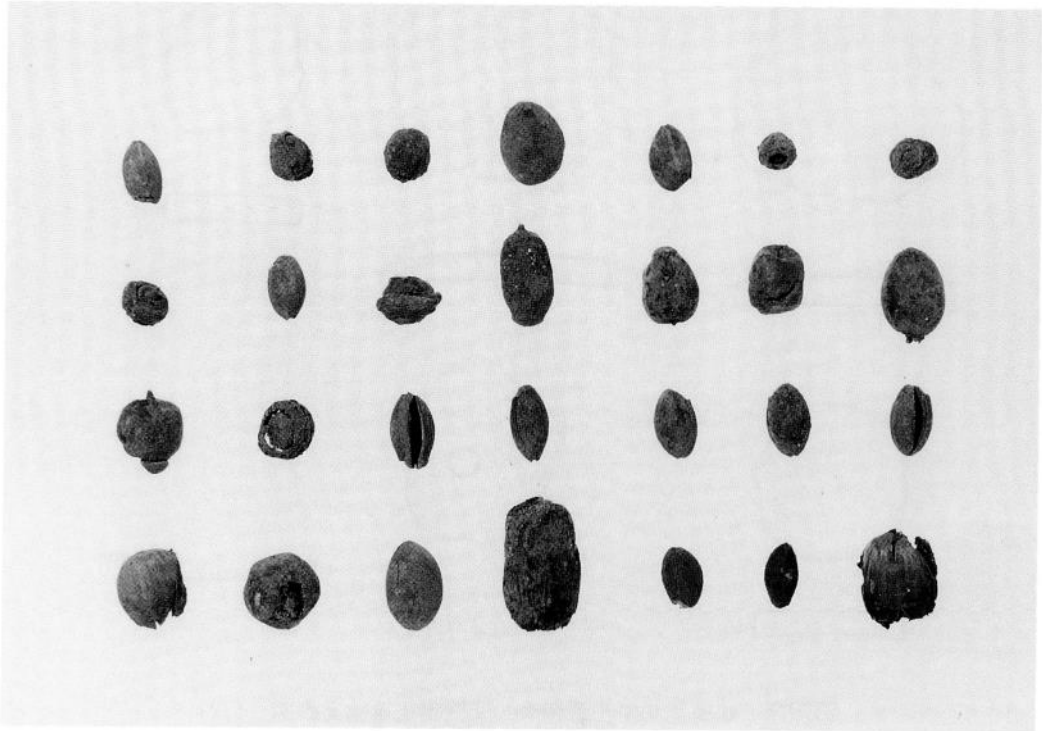
両縁部を磨き上げて、丸く土器の破片を使用したもので、土器を焼く時や仕上げのおりに使用したものである。

④は胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色で重量は16.8gである。

⑤も胎土に細砂を多く含み、色調は黒褐色を呈しているもので、補修孔をもつものである。重量は27.6gである。孔は一方より穿孔されている。



第30図 辻垣ヲサマル遺跡2・4区出土遺物実測図 (1/2)



第31図 出土遺物植物種子

## (5) 5区 (第32図、図版18～21)

4区の南側に10m×35mで、面積350㎡のトレンチを設定した。

西端は急に落ちて、河川となっていた。他の大半は陸地化しているために、若干の遺跡が検出された。6区から広がって円形周溝がつながる結果となった。円形周溝の中央部を横切る様に現代の水路が南北方向に切っていた。この水路によってカットされていた。

しかしながら、遺物は円形周溝の中から出土しているものばかりであった。時期的には弥生前期後半の土器が多く検出された。

### 出土遺物 (第33図、図版42)

5区の円形周溝から出土したものを集めてみた。甕・壺・鉢等がみられる。

甕 (①～⑥) ①は口縁部が直口し、若干内側に傾斜しているもので、直下に凸帯を有し、凸帯には刻み目を持っている。胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。復原口径は22.5cm前後を計測している。器面の調整はナデ仕上げと思われる。この手の甕は、いわゆる下城式の範疇にはいるものと考えられる。

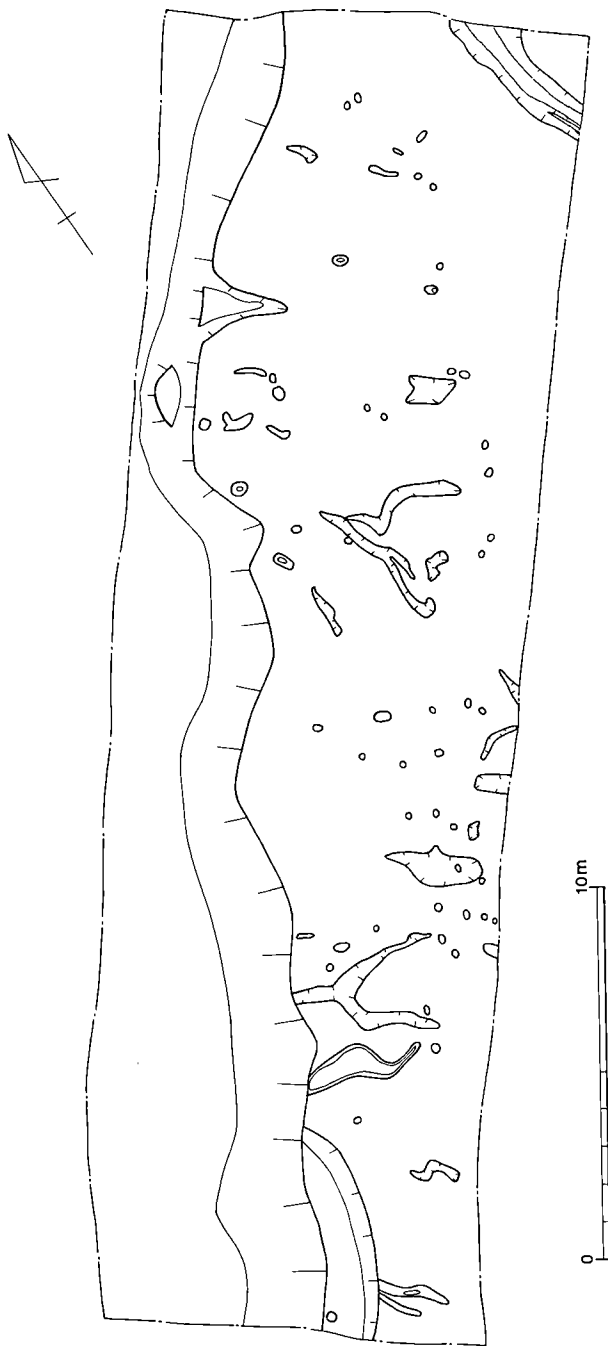
②は口縁部の破片で、胎土に砂粒砂を含み、色調はにぶい黄褐色を呈し、焼成は良好で、器面の調整は、外面に若干ミガキがみられる。内面には指痕が見える。口唇部には刻み目が施文されている。口径は22cm前後を計測する。

③は口縁部のつくりの特長を有する甕形土器である。口縁直下に三角凸帯を一条有し、それに刻み目を施している。胴部にかけて2条の沈線を施し、底部は平底をなしている。口径は25.1cm、器高は26.3cm、胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色で、内側上面にススの付着がみられている。焼成は不良で、器面の調整はマメツしているために不明な点が多い、口唇部付近はヨコナデである。

④は底部を穿孔したもので、甑として使用されたものである。口唇部に刻目を有し、胴部に三角凸帯が一条巡っている。その頂点部に刻み目を施している。口径22.3cm、器高22.1cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色を呈している。焼成は良で、器面の調整はナデ仕上げである。底部の穿孔は内底面からとっている。

⑤は胎土に細粒砂を多く含み、底径5.5～6.3cmで平底をなしている。焼成は良好であるが、2次的に火を受けている。色調は黄褐色であるが黒味を帯びている。器面の調整は不明瞭である。胴部に2次の細い沈線を持ち、胴部下半に細い沈線がみられる。内面には一段段を有している。器形的には歪っている。おもしろい土器の一つである。

⑥は底部破片で、底径は5.9cmで、平底をなしている。胎土に砂粒を含み、色調は黒灰色を呈し、焼成は良好で、器面の調整はナデである。一部にハケメが残っている。内面もナデで指



第32図 辻垣ヲサマル遺跡 5区遺構実測図 (1/200)

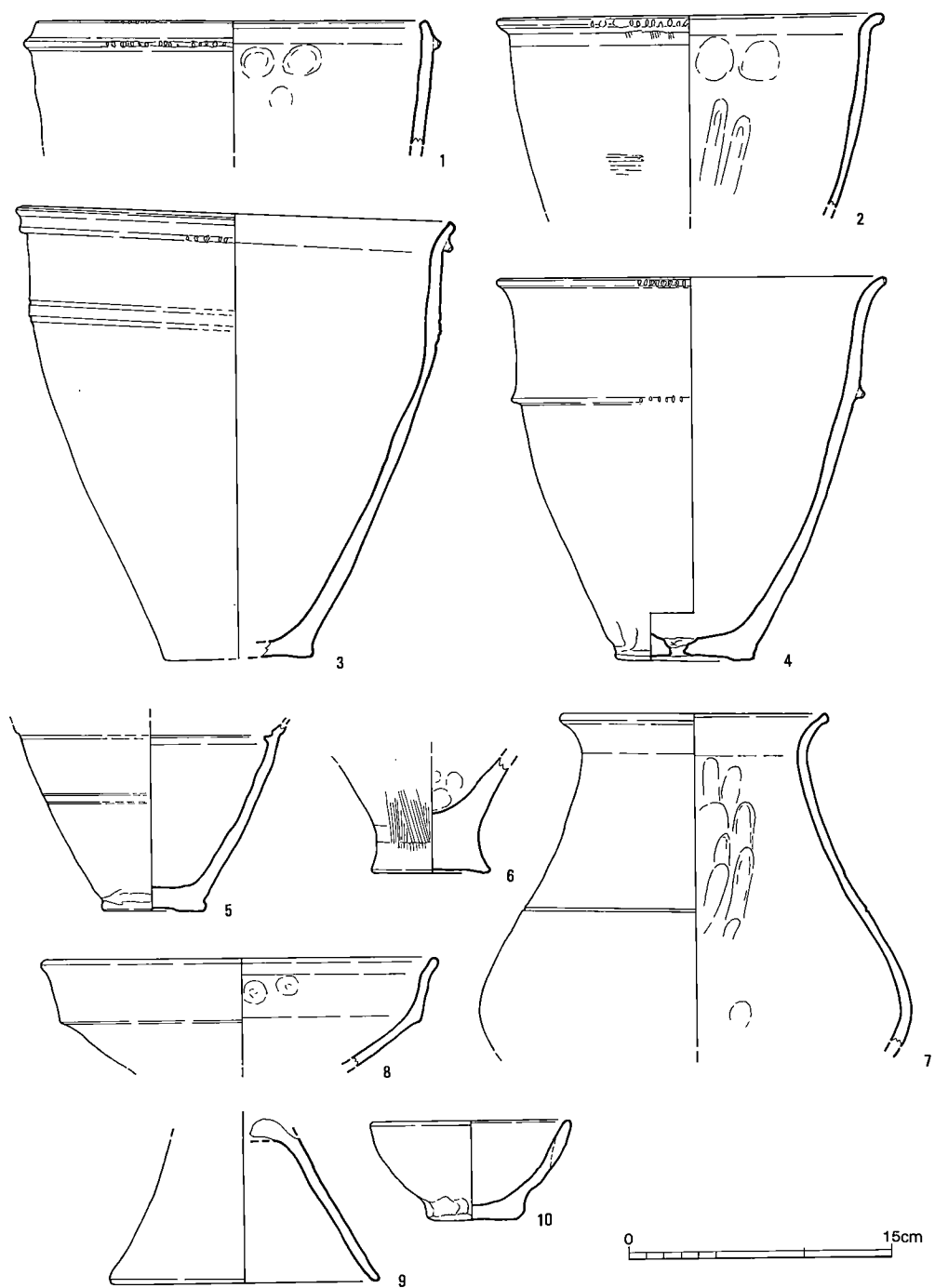
痕がみられる。

壺 (⑦) ⑦は、口径15.7cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色である。最大径は胴部にある。器形は口縁部は外反し、頸部に一条の沈線を有し、器面の調整は外面はミガキが見られ、内面はナデで、指痕が残っている。

鉢 (⑧・⑨・⑩)

⑧は口縁部破片で、口径23cmである。胎土には細粒砂を含み、色調は黒褐色を呈している。器面の調整はナデ仕上げである。内面に指圧痕が残る。口縁部は若干外反している。焼成は良である。

⑨は台付の部分か。胎土に砂粒砂を含み、色調は2次的な火熱を受けているため赤褐色である。口径は15.4cmで、器面の調整は不明である。黒斑がみられる。



第33図 辻垣ヲサマル遺跡5区出土遺物実測図 (1/4)

⑩は小形の鉢である。口径は11.7cmで、器高5.6cm、焼成は良好で、色調は灰褐色で、外面に黒斑あり、胎土に細粒砂を多く含み、器面の調整はナデで、口縁部の一部に粘土のつき目がみられ、手捏で作られたものである。

## (6) 6区 (第34～42図、図版22～30、43～47)

5区の東側に、円形周溝を求めるため35m×15mの発掘区を設定した。遺構の中心は第36図の示めす様に、円形周溝の溝状遺構で、びっしりと遺物が周溝中に残存していた。時期的には弥生前後後半のものが主流を占めていた。これと一緒に、石剣が出土しているのに興味を引いた。この周溝から出土した遺物は一括土器として、良好な資料となる。

### 円形周溝 (第34～36図、図版24～27)

6区の発掘区の中心にあつて、北側は一段下がり、木溝(流路)先端部の肩を呈している。周溝の平面形はほぼ円形をなし、直径約30mで、溝幅約50cm、深さ30cm前後を計る。断面はU字形を呈している。

溝底には、弥生前期後半の土器(甕・壺・鉢等)、石器では、石庖丁・石剣・石鏃等が検出されている。

中央部は、近世～現代の排水路によって、削平されているため、墓地としての主体部があつたかどうか、不明である。一応ここでは、溝状遺構として上げておくことにする。

### 土層 (第34図)

6区の土層図をとってみると、次様な地層の状態を示めていた。

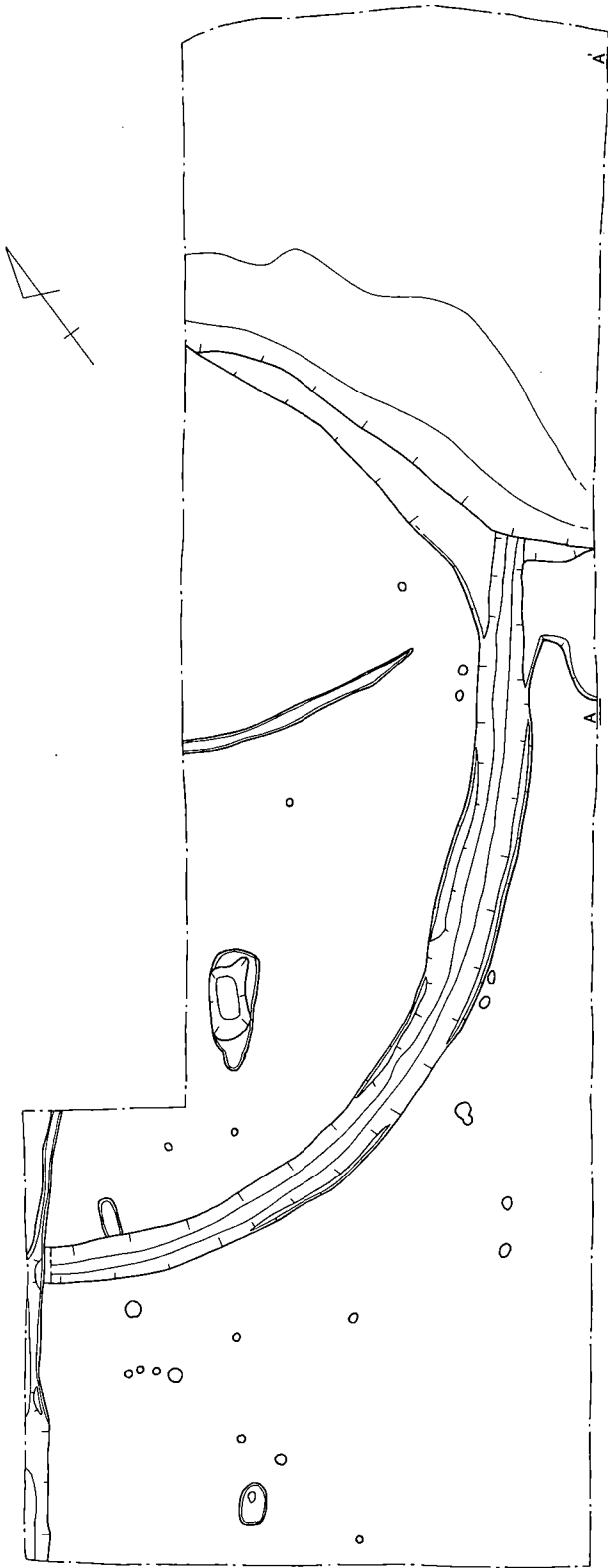
土層は表土があつて、その下に黒色があつて、床土である、水田耕作の床面が3枚みられている。陸地化された時期を推定するのにも、弥生前期以前ということが理解され、一応縄文晩期には陸地となつていたと思われる。遺物の中に縄文土器片がはいっていた。

### 出土遺物 (第37～42図、図版43～47)

周溝の中より出土したものを中心に上げてみた。甕・壺・鉢・高杯・石器節が検出されている。

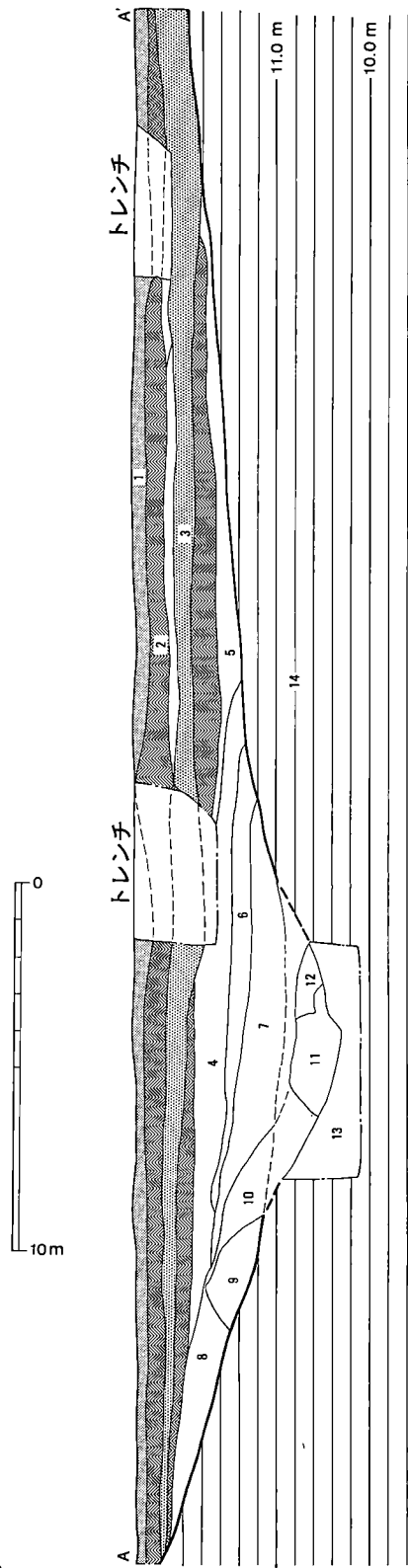
甕(第38・39図) 凸帯文を有するものと(①～⑥)、そうでないもの(⑦～⑮)である。では順を追って説明を付加してみよう。

①は口唇直下に三角凸帯を有し、胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色を呈し、2次の火勢を受けて、口径21.4cm、焼成は良で、2次の火勢を受けているため、器面の調整は不明な点が



第35図 辻垣ヲサマル遺跡6区円形周溝遺構実測図 (1/200)

— 55 —



- | 土層名 | 5. | 6. | 7.   | 8.    | 9.     | 10.    | 11.    | 12.   | 13.   | 14.  |
|-----|----|----|------|-------|--------|--------|--------|-------|-------|------|
| 土層名 | 表土 | 床土 | 旧耕作土 | 茶褐色砂層 | 灰茶褐色砂層 | 灰黑色砂質土 | 灰黑色粘質土 | 灰黑色砂層 | 灰青色砂層 | 黑色粘土 |
|     |    |    |      | 茶褐色粘土 | 黑色粘土   | 灰青色砂層  | 灰青色粘質土 | 灰青色砂層 | 灰青色砂層 | 礫層   |

第34図 辻垣ヲサマル遺跡6区土層 (1/80)



多い。三角凸帯には頂部に刻み目を有している。

②は口唇直下に三角凸帯を有している。口縁部は直口し、胎土には細粒砂を含み、色調は黄褐色であるが、2次的な火勢を受けて黒味を帯びている。口径21.4cmを計測し、器面の調整は口縁部付近はミガキで、凸帯の頂点には刻み目を有し、内面はナデ仕上げである。ススの付着がみられている。焼成は良好である。

③は胎土には砂粒を含み、色調は黒褐色で、外面は赤褐色に近い黄褐色である。口径21.2cm、底径8.9cmで、中央部を両方より穿孔している。器面の調整はナデ仕上げと思われるが、2次的な火勢のためマメツがひどい。口唇直下に三角凸帯がたれ下がる様につけられている頂点には刻目が施されている。焼成は良好である。甑として使用されている。

④は口唇直下に三角凸帯を施して、凸帯の頂点部は刻み目を有し、胎土には細粒砂を多く含んでいる。色調は暗赤褐色を呈し、内面は黄褐色をなしている。口径26.0cmで、器面の調整はナデ仕上げである。2次的な火勢を受けているためススが付着している。

⑤は口縁部は内傾しているもので、口縁直下に三角凸帯を有している。口径22.8cm、底は平底で、中央部は若干上がっている。径は9.2cm、器高は26.1cmで、なでつける様に底部付近に指圧痕がみられる。胎土に細粒砂を含み、色調は外側は黄褐色であるが2次的な火勢で、赤味を帯びている。器面の調整はマメツ気味で不明瞭である。

⑥は口唇直下に三角凸帯を有し、胴部付近に一条の三角凸帯を有している。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、胴部付近にはススの付着がみられる。両凸帯とも頂部に刻み目を有している。口径24.5cmで、器高30cmである。底部は平底をなすもので、焼成は良好である。器面の調整はナデ仕上げである。

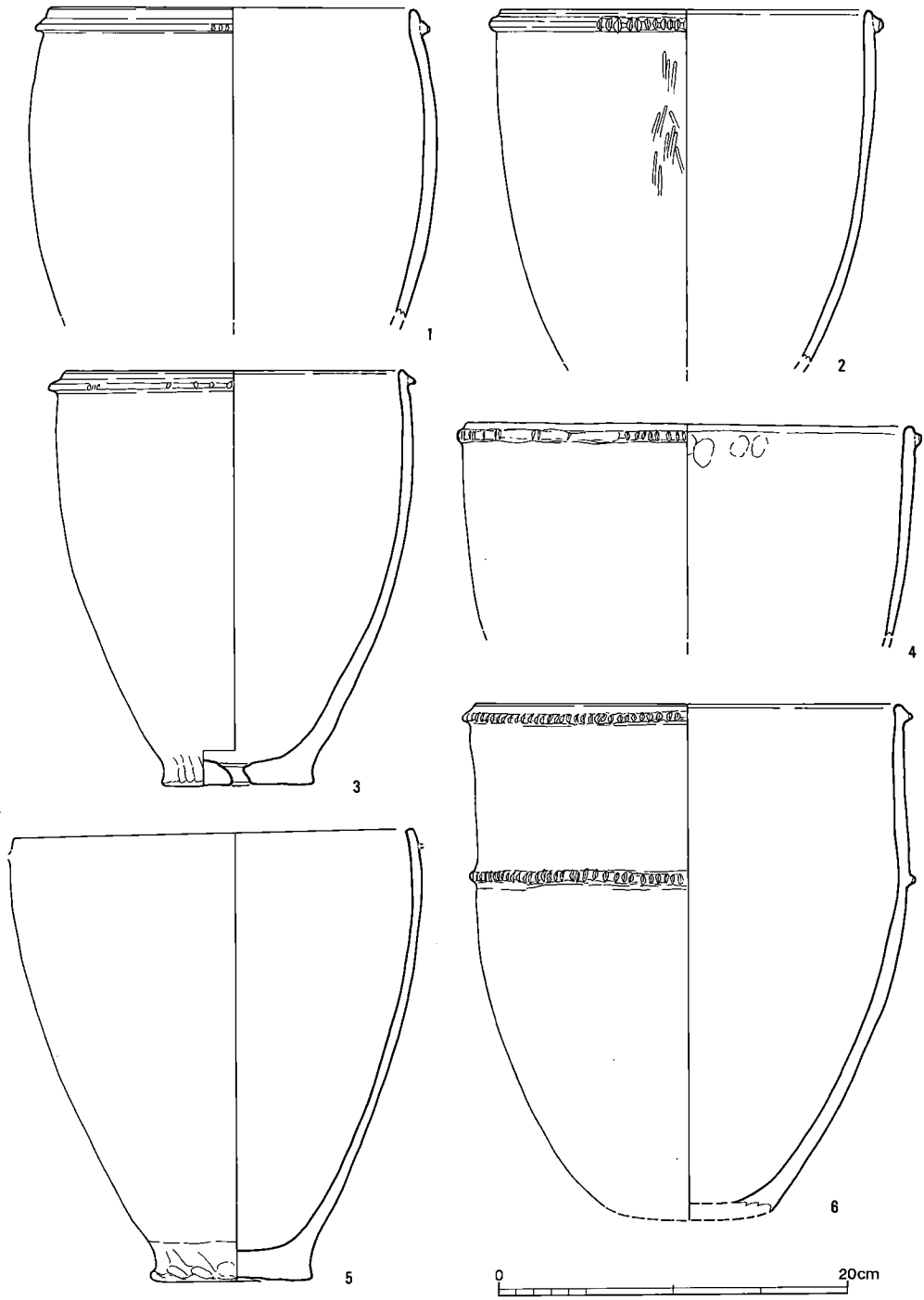
⑦は如意手のもので、口唇部に刻目を有している。胎土に細粒砂を多く含み、色調は褐色を呈し、外面は黒味をおびた暗茶褐色である。焼成は良好である。器面の調整は外面にハケメが残り他はヨコナデで、口縁直下には工具痕がみられる。

⑧は口唇部に刻み目を有している。胎土には細粒砂を含み、色調は黄褐色で、焼成は良好である。口径は23.1cmで、器面の調整はハケメの痕跡が残り、内面はマメツのため不明瞭である。胴部には大きく黒斑あり。

⑨は口唇部に刻み目を有して、口径24.5cmで底径9.6cmである。器高は25.2cmで、平底をなしている。底部の中央に穿孔がみられ、両面から孔を穿ている。胎土に細粒砂を含み、色調は暗赤褐色で、内面は黄褐色を呈し、2次的な火勢を受けているため全体に赤味を帯びている。焼成は良で、器面の調整は加熱のため不明。

⑩は口唇下半に刻み目を有し、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色に黒味を帯びている。口径26.1cm、焼成は良で、器面の調整はナデ仕上げで、内面には工具による工具痕がみられる。外面には胴部以下に黒斑がみられる。





第36図 辻垣ヲサマル遺跡 6区出土遺物① (1/4)

⑪は口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は灰褐色で、口径は25cm、器面の調整はナデ仕上げである。焼成は良好である。

⑫は口縁部破片で、口唇部は凹状をなしている。胎土には細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、外面にはススの付着がみられるもので、口径31cm、器面の調整は外面には頸部直下はハケメで、内面はミガキで以下ナデである。焼成は良好である。

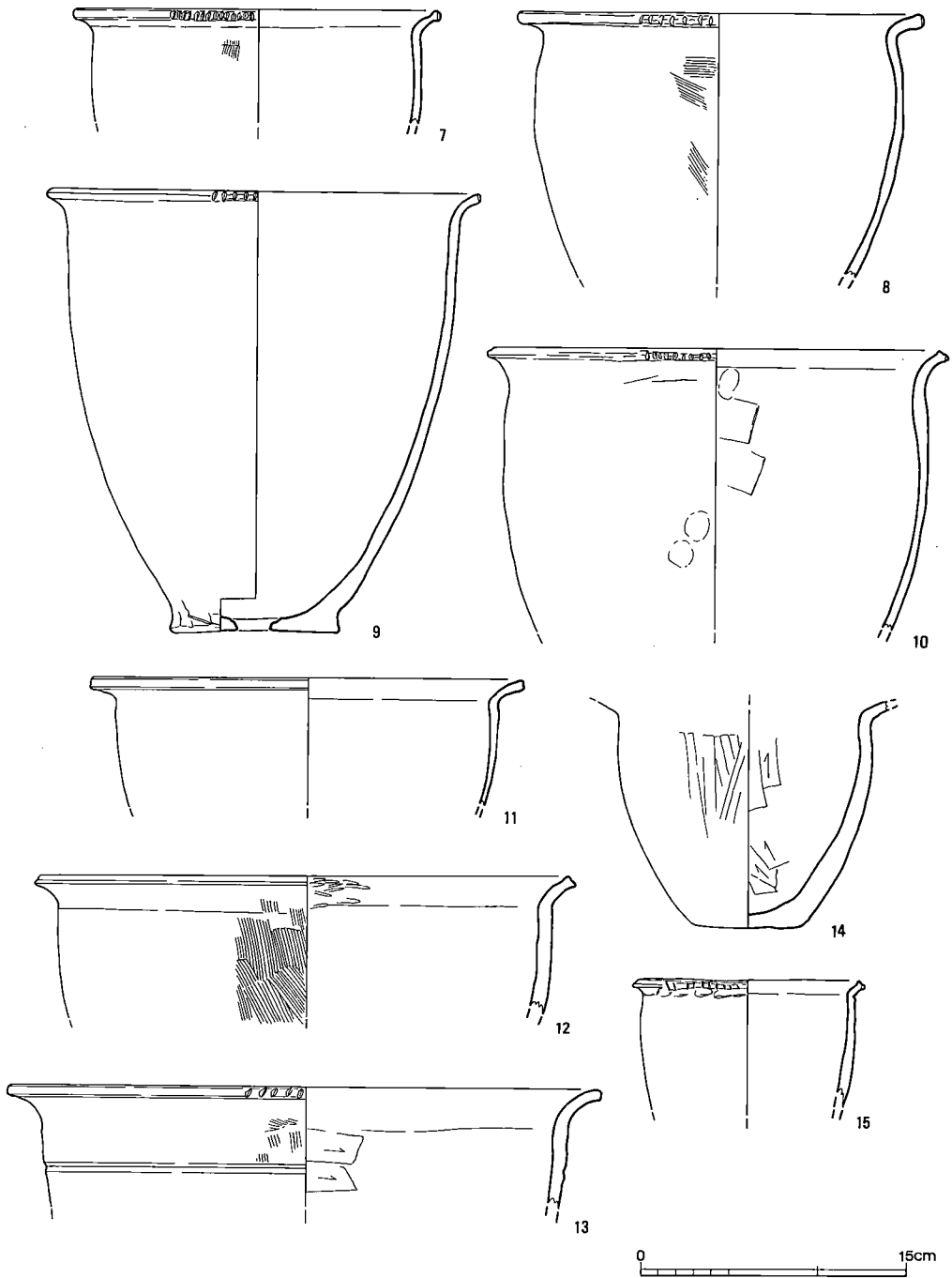
⑬は口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、口径は34cmで中形のものである。口唇部に刻目を有し、頸部直下に一条の沈線を施している。器面の調整は頸部はナデで以下ハケメの痕跡が残り、内面はヨコナデで、ケズリが頸部以下に施されている。焼成は良好である。

⑭は胎土に細粒砂を含み、色調は、内面は黒色で、外面は赤褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、全体的にマメツ気味で、内面がケズリの後にナデ仕上げである。底径は6cmで平底である。出土した地点が大溝の中で、時期的には新しい。

⑮は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、2次的な火勢を受けているためか、内面は黒味をおびている。口唇下端に刻目を有している。その直下に工具の痕跡がある、マメツ気味ではあるが理解された。口径が13cmである。



第37図 発掘風景（5区の調査）



第38図 辻垣ヲサマル遺跡 6区出土遺物実測図② (1/4)

壺（第39・40図、図版44） 大形の壺と小形の壺とに分類できる。第37図は前者を中心に、第38図は後者を中心に図示した。

①⑥は胎土に細粒砂を含み、色調は黒褐色を呈し、口径10.5cmで、器高29.3cmで、最大胴径は27.1cmで、焼成は良好で、器面の調整はナデ仕上げ、底部は平底で、径は9.0cmである。

①⑦は口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、口唇部に刻目を有し、頸部に三角凸帯を有している。凸帯部に刻目を持つている。器面の調整はナデ仕上げである。口径は33.7cmである。器形は甕形土器に近いものである。

①⑧は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で若干赤味を帯びている。外面の胴部には、黒色の平行線が全体に施されている。口絵カラーの3の右側のものである。口径は21cmで、最大径は胴部にある。器面の調整はナデにて内面には粘土の継目がみられる。口縁部は厚く作られている。頸部に黒斑が所々にある。

①⑨は胴部付近の破片で、胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色を呈し、黒味をおびている。器面の調整は部分的にミガキがみられ、胴部についてはハケメが残り、以下にミガキがみられる。内面はハケメの後ナデ仕上げである。胴部には指圧痕が残っている。焼成は良好で2次の火勢を受けて、胴部下半にはススが附着している。

①⑩は複合口縁の壺の頸部以下の破片である。頸部下端部に三角凸帯を有し、頂点に刻目をいれている。底部は丸底である。胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色を呈し、胴部下部に黒斑あり、器面の調整はハケメで、内面はハケメの後にナデ仕上げで、部分的にハケメが残っている。焼成は良好である。

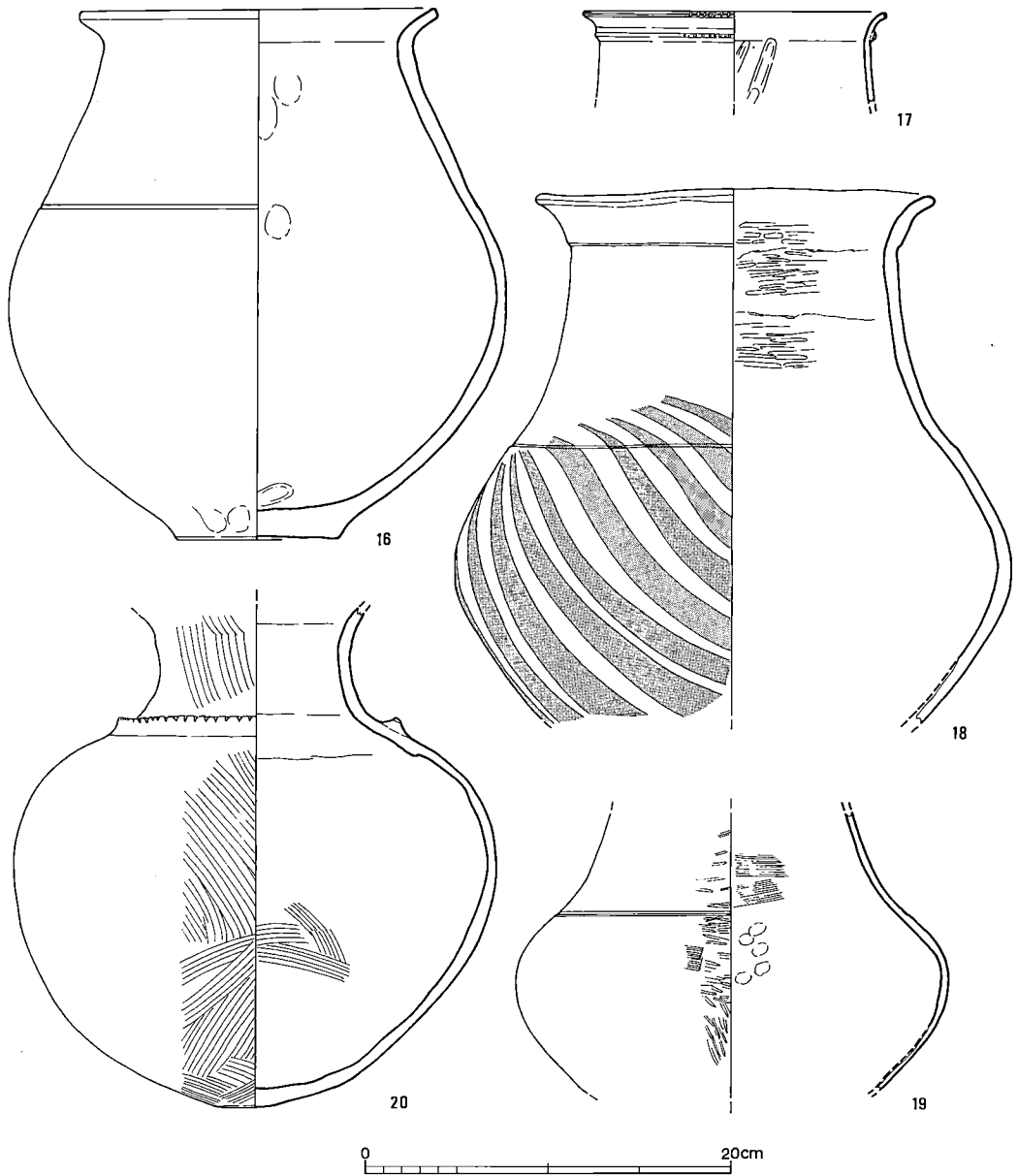
①⑪は小形壺で、口径10.6cm、胴部径16.8cm、庭径は8.3cm、器高17.9cmで、胎土に細粒砂をく含み、色調は黄褐色で黒味を帯びている。器面の調整はナデ仕上げで、丁寧につくられている。頸部に5条の沈線を施し、最大胴径の部分には重孤文が文様帯として施され、それ以下に3条の沈線がはいっている。底部は平底である。焼成は良好である。一部に黒斑がみられる。

①⑫は頸部以下に4条の沈線と胴部に重孤文の文様帯をもつものの胴部破片である。胎土に細砂を多く含み、色調は黄褐色で黒味を帯びている。器面の調整は器壁が剝離しているため観察不明確である。焼成は不良である。

①⑬は胴部破片である。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整は剝離が進んでいるため、不明瞭であるが、文様帯はほぼ理解できる。5条の沈線と重孤文である。

①⑭は中形の胴部破片で、胴部文様帯が綾杉状をなすもので、その上に2条の沈線をもっている。胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良である。

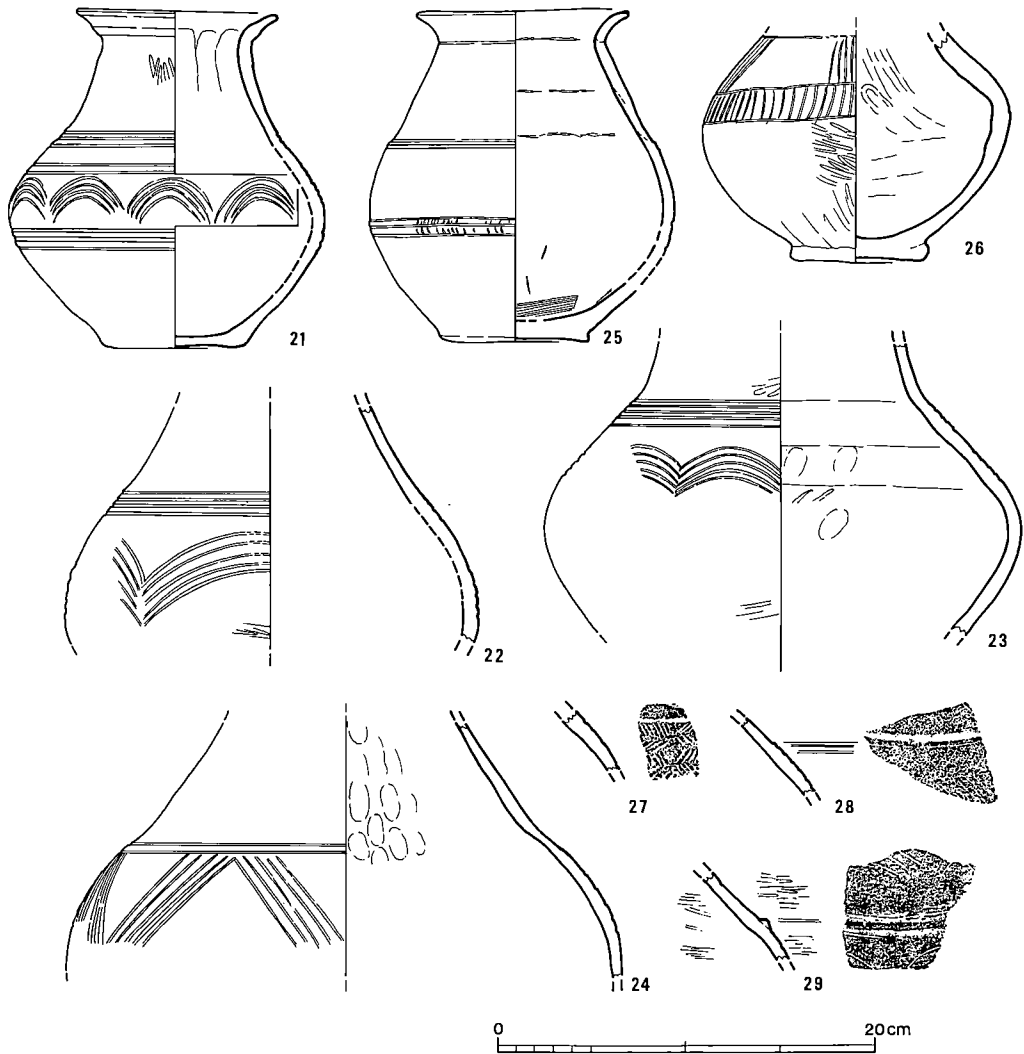
①⑮は小形の壺でほぼ全体の姿が、理解できるものである。口径11.3cm、器高17.9cmで、底径8.0cmである。底部は貼付円盤状を呈している。胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。頸部に2条の沈線を有し、胴部下半に3条の沈線を基にして、綾杉状を呈



第39図 辻垣ヲサマル遺跡6区出土遺物実測図③(1/4)

する様な文様帯を施している。

⑳は胴部以下の破片で、底部にその特長を有しているものである。いわゆる貼付円盤をもったもので、底径は7.3cmを計測する。胎土に砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈し、黒味を帯びているものである。文様帯を頸部と胴部上半に入れている。沈線文を中心に平行文でアレン



第40図 辻垣ヲサマル遺跡出土遺物実測図④ (1/4)

ジされている。内面はナデで指圧痕が残っている。外面はミガキが中心であると思われ、胴部下半に黒斑がある。焼成は良で、軟質の感じがみられる。

②⑦は胴部破片の文様帯のみ図示した。胎土に細粒砂を多く含み、色調は赤褐色を呈し、2次的に火勢を受ける。

②⑧も胴部の文様帯の破片で、胎土には砂を多く含み、色調は黒褐色を呈している。文様帯は綾杉状を呈する沈線文である。

②⑨も胴部破片で、三角凸帯を有するもので、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色である。

鉢（第42図） ③⑩～③⑥までは鉢として分類を行なった。

③⑩は大形の鉢で、胎土に細粒砂を含み、色調は赤味を帯びた暗褐色を呈している。口唇部に刻み目を入れて、その下に三角凸帯を入れて、刻み目を有している。その一段下に2条の三角凸帯を有し、その頂点に刻み目を有しているもので、口径30cm、底径9.7cmで平底をなしている。全体に2次的な火勢を受けているものである。器面の調整はミガキを施している。小口原体によるものである。

③⑪は胎土に細粒砂を含み、色調は赤褐色で、黒味を帯びている。器面の調整はハケメである。外面にススが付着している。口径17cmである。

③⑫は胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色であるが、赤味を帯びている。口径20.1cm、器高14.3～15.5cmで、底径7.8cmである。2次的に火勢を受けている。器面には黒斑がみられる。

③⑬は胎土に砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、2次的な火勢を受けて、ススの付着している部分がある。口径は33.6cmで、底径は8.7cmである。頸部に三角凸帯を有している。器面の調整はナデ仕上げと思われる。火勢を受けたため、不明瞭なものである。

③⑭は胎土に細粒砂を多く含み、色調は黄褐色で赤味を帯びている。また2次的に火勢を受けてススの付着がみられる。口径17.5cm、底径8.5cmで、口縁部は楕円形をなしている。

③⑮は口縁部破片で、胎土に細粒砂を含み、色調は黒味を帯びた灰色を呈し、口径15cmである。器面の調整は、内外面ともハケメが残っている。器面には黒斑あり。

③⑯は後世では馬上杯と称するもので、胎土には細粒砂を多く含み、色調は黄褐色を呈し、器面の調整はミガキとナデ仕上げで、上げ底となっている。底径は4.2cmである。

甕（第42図③⑰） ③⑰は甕で、時期的に新しく弥生終末のものである。「く」の字状の口縁部で、胎土に細粒砂を含み、色調は暗黄褐色で、器面の調整は内外面ともハケメである。口径17cmである。焼成は良である。流れ込みとみられる。大溝とのカタの出土である。

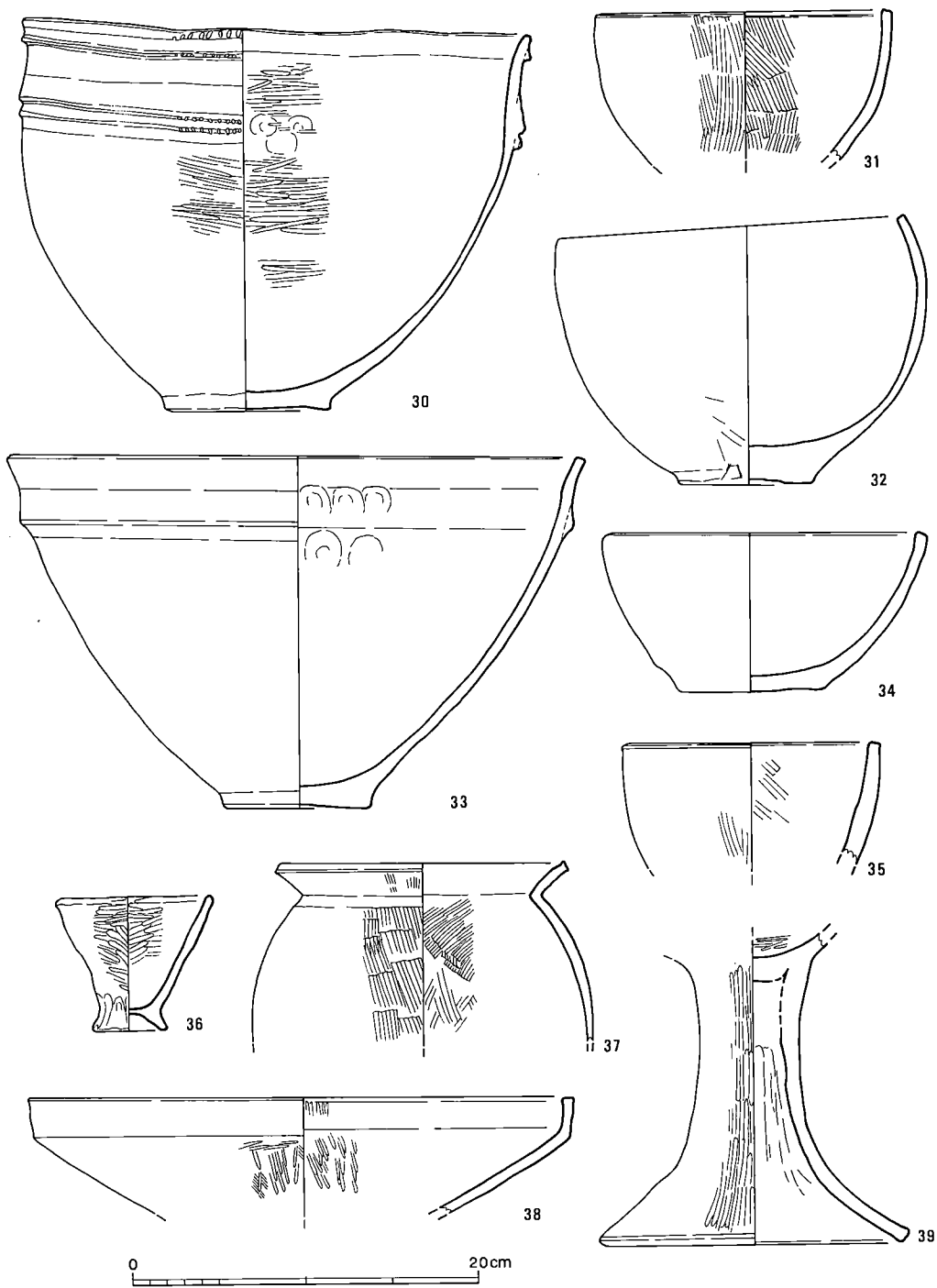
高杯（第42図③⑱・③⑲） ③⑱は直口しているが杯部の破片で、器形は高杯をなすものである。口径32cmで、胎土に細粒砂を含み、色調は黄褐色で、ススの付着がみられる。器面の調整はミガキである。2次的に火勢を受けて、ススの付着が一部にみられる。前者と同じで大溝のカタから出土している。

③⑲は脚部の破片で、③⑱の杯部がつくものであろうと器形的には考えられる。胎土に砂粒を多く含み、色調は黄灰色を呈している。裾径は15.7cmで、柱状部の最小径は5.6cmで、大形の高杯である。器面の調整は外面がミガキで内面はナデである。

#### 石器（第43図、図版47）

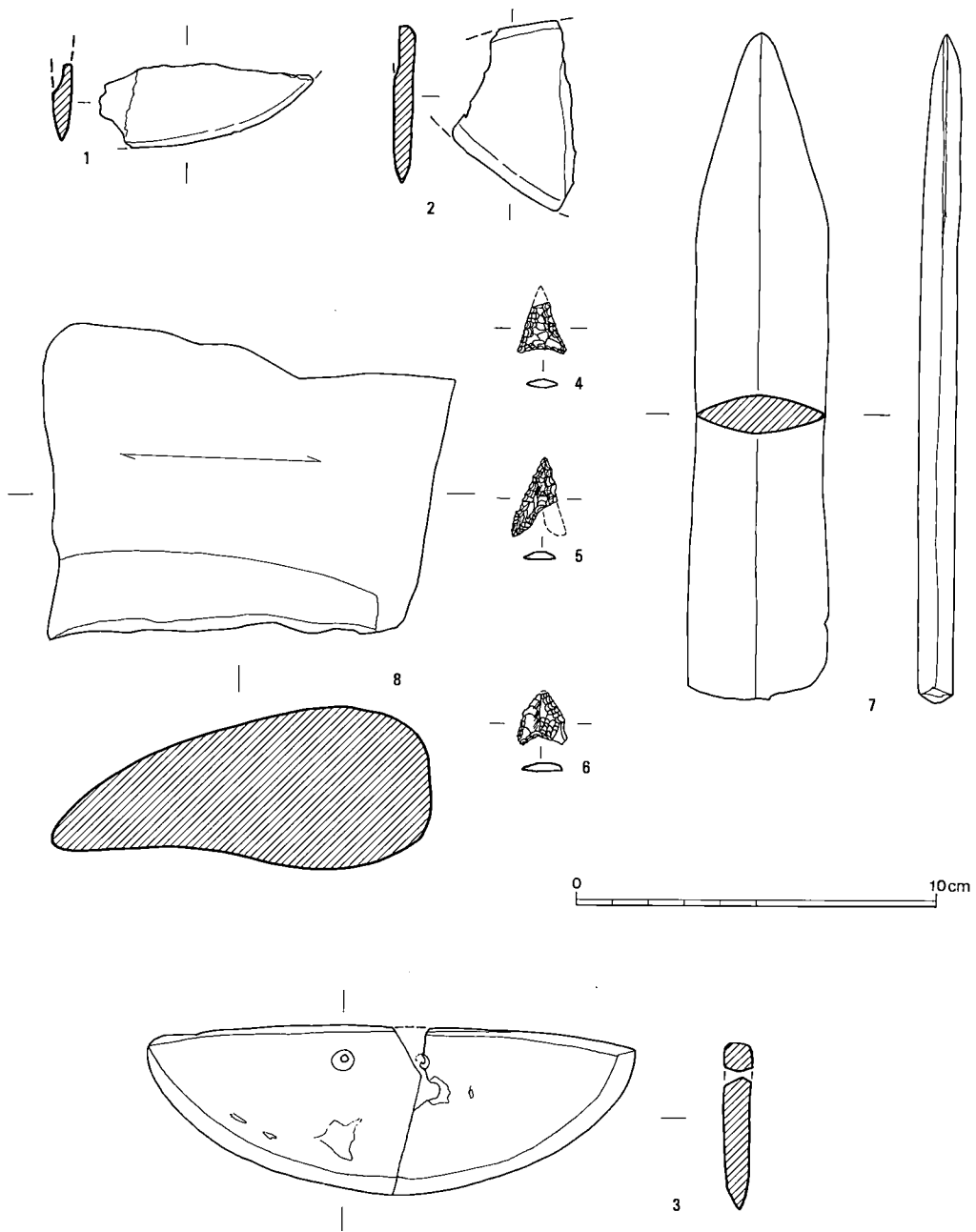
円形周溝から出土したものを中心にまとめてみた。出土した遺物は石庖丁・石鎌・石剣・砥石等が検出している。

石庖丁（①・②・③） ①は大溝の中から出土したもので、②・③は大溝のカタの部分から



第41図 辻垣ヲサマル遺跡6区出土遺物実測図⑤(1/4)





第42図 辻垣ヲサマル遺跡 6区出土遺物実測図⑥ (1/2)

出土しているものである。①は立岩製の輝緑凝灰岩である。その刃部の破片で、重量7.8gである。

②は安山岩製のもので、基部を含めた破片である。重量は10.2gである。

③は立岩製の輝緑凝灰岩で、ほぼ完形品である。孔は両面穿孔で刃部は丁寧に仕上げられ、とがっている感じである。重量は55.3gである。

**石鏃** (④・⑤・⑥) 三点とも黒曜石製である。④・⑥は姫島産で、⑤は腰岳産のものと考えられる。

④は先端部が欠損している部分である。ほぼ三角鏃を呈している。剥離は丁寧に、押圧剥離である。重量は0.4gで、周溝の中より出土している。

⑤は基部の挟りの深い鏃である。裏面の剥離は扁平で、断面はほぼ三角を呈している。剥離は押圧技法で製作されたもので、重量は0.3gである。大溝中より出土している。縄文期のものか？

⑥は剥離鏃である。大溝の中より出土したもので、典型的な縄文期のものである。重量は0.4gである。

**石剣** (⑦) 周溝中より出土したもので、緑泥片岩製と考えられるもので、刃部破片である。基部の茎の部分は欠損している。重量は105gである。刃部は先端部と両側縁部は鈍く、鏃も同様に鈍いものである。断面は凸レンズ状を呈している。石戈になる可能性もある。ここでは一応石剣として記録しておく。

**砥石** (⑧) 石質は安山岩製で、河原石を利用したもので、砥石として使用されたものである。重量は640gで、比較的手頃な石器である。大溝の中より出土している。

### その他の遺物 (第43図)

ここでは、特に興味を引いた縄文土器を取り上げて若干の説明を付したい。

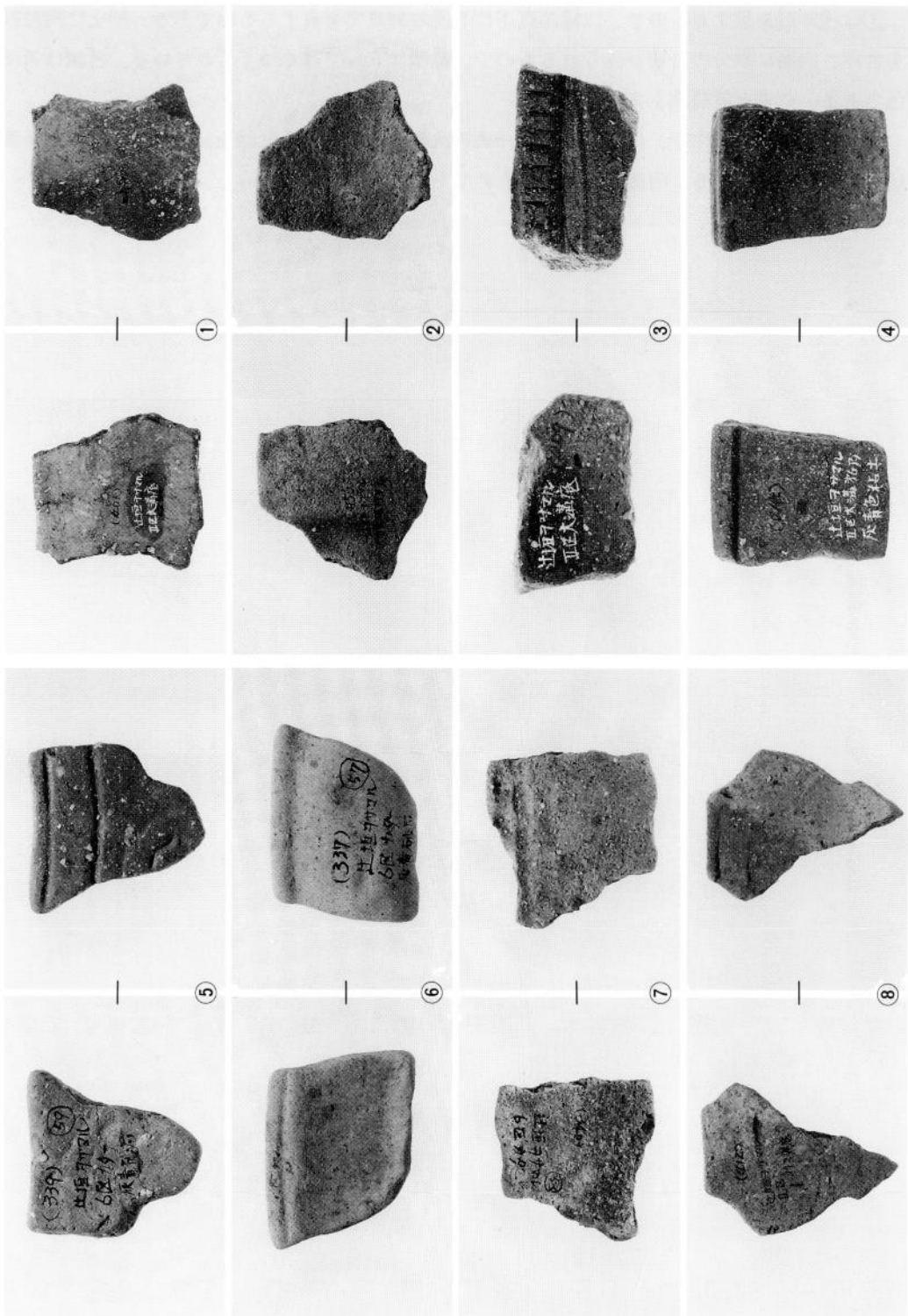
ヲサマル遺跡の中で、最古の時期は縄文後期のものが2区・6区大溝の中より検出されている。それを図示したのが第43図である。

2区から出土したものは、無文土器の口縁部大半で、浅鉢を中心とするもので、一点は深鉢になるものがみられる。粗製土器である。

⑤は文様帯が竹管文になっている浅鉢の口縁直下の破片がみられた。時期的には縄文後期の所産である。

6区の大溝のカタから出土した縄文土器の口縁部の破片でローリングを受けて、磨滅している。

⑥は波状口縁を呈する浅鉢のものである。文様帯から見て、縄文後期の所産のものである。胎土には雲母片と砂を多く含んでいる。色調は灰黒色を呈している。



第43図 出土遺物縄文土器片 (①~④: 2区、⑤~⑧: 4区)

⑦は浅鉢形を呈するもので、口縁部直下に2段の列点文を有するものである。胎土に細粒砂を含み、内面に鉄分の付着がみられるもので、器壁は5mmで薄くつくられている。色調は黄灰色である。前者と同時期をあてたい。

⑧は波状口縁の破片で、口縁部直下に一条の沈線を有している。胎土に細粒砂を含み、色調は灰黄色を呈している。磨滅がはげしいものである。

## IV. お わ り に

前章までが、辻垣ヲサマル遺跡の発掘調査の記録である。

多くの新しい、また確実な事実が明らかになった。その中には、いままでの考えられていた事柄と異なった事実や将来さらに検討を必要とする問題を提起することとなった。

前章までのことを踏まえながら若干の考えを述べて、まとめとした。

### 1. 辻垣ヲサマル遺跡の景観

当該遺跡の歴史的な景観を考えてみたい。自然地理学的には祓川の下流域に含まれる。標高11～12m前後に位置し、沖積地の台状地をなす位置である。

辻垣ヲサマル遺跡と同時期の弥生終末から古墳時代初頭期の遺跡は2km下流の津留遺跡(註1)がこれにあたり、また祓川が大きく蛇行した河岸段丘状にある徳永川の上遺跡(註2)とつづく、当該地より3km上流にあたる。

このことから、京都平野の弥生終末から古墳時代初頭期の遺跡を捕捉してみると興味深い結果が出てくると考えられる。長狭川・今川・祓川の周辺部では弥生時代の遺跡については、中流域を中心にしてマッピングされている。(第2図参照)

祓川においては、それよりも下流域まで、その実態が理解されただけで、標高9m前後の津留遺跡が求められるわけである。

この遺跡は祓川にそって、バイパスが建設されることによって、判明したわけである。

ここでは祓川流域を基本に考えたい。

酒井龍一氏の『拠点集落と弥生社会—拠点集落を基本要素とする社会構成の復元—』(註3)という論文の中で、集落については、求心型・分散型に分類できるとしている。この中では北部九州では求心型が多く、近畿地方では分散型が多いとされている。

しかしながら、この論文は支持できるものと疑問点をもつものとの二面性をもっている。

どうも時代が新しくなると求心型よりも分散型に変化するものと考えた方が、より妥当性をもっている。

それは、論文中の広域社会の構成としての項目の中で、北部九州と北九州社会と明確に区分されるとしている。すなわち、文化的・社会的様相をもって考えられている。この底辺には立岩型石庖丁と大形甕棺墓の存在有無から導き出したわけである。このことについては支持できる。しかしながら大形甕棺墓は周防灘沿岸には見られないもので、遠賀川中流域の立岩遺跡を境界とされている。これはマクロ的な捕え方である。

これをミクロ的に辻垣ヲサマル遺跡にあてはめてみると、あるいは、祓川流域にあててみると興味深い資料となり、一つの考えとなってくる。

食料狩猟と食料採集者たちに代って、新たな稲作農耕者たちの出現で、縄文社会は弥生社会へと大きく展開したわけで、その主な舞台は西日本各地で、現在、初期農耕村落の実態や社会構成の考古学的究明が急ピッチで進展している場所である。これは裏返せば開発が進展している場所でもある。このことは両刃の剣ともいえよう。

酒井氏が述べた時期よりも新しく、弥生終末から古墳時代初頭期を祓川流域の3遺跡（津留・辻垣ヲサマル・徳永川の上）からみると、分散型と捕えた方が妥当である。

基本的には、バイパス建設のために幅40mのトレンチが京都平野に8kmにわたって、はいつたこととなるわけで、それぞれの遺跡についての詳細な実態については、報告書の刊行を待ねばならないが、津留・辻垣ヲサマル遺跡については、実態を述べることができる。

津留遺跡については、その報告書から、水田面に面した微高地を中心に調査を実施したわけで、住居跡1軒が標高9m前後位置で発掘地区ぎりぎりで見出されている。これと共伴して河川流路の変化にともなう大溝等であった。報告書の中では、津留遺跡は標高9m前後の低地の遺跡で、この時期の生活遺構では河口に近い水辺集落であると述べている。これと水辺祭祀がみられることが報告書の中で見聞される。青銅鏡片と手捏ミニチャー土器等である。

立地等から考察すると、津留遺跡は当該遺跡より2km下流に立地し、中央部に大きな溝（旧河川の流路）がみられ、島状に沖積地が陸地化したもので、標高9m前後で住居跡を検出している。このことから集落は島状に高く残った部分に存在することが考えられる。道路幅ぎりぎり、高位置の部分で住居跡が見出されているわけであるため、周辺部の開発の折りに調査されることが期待される。

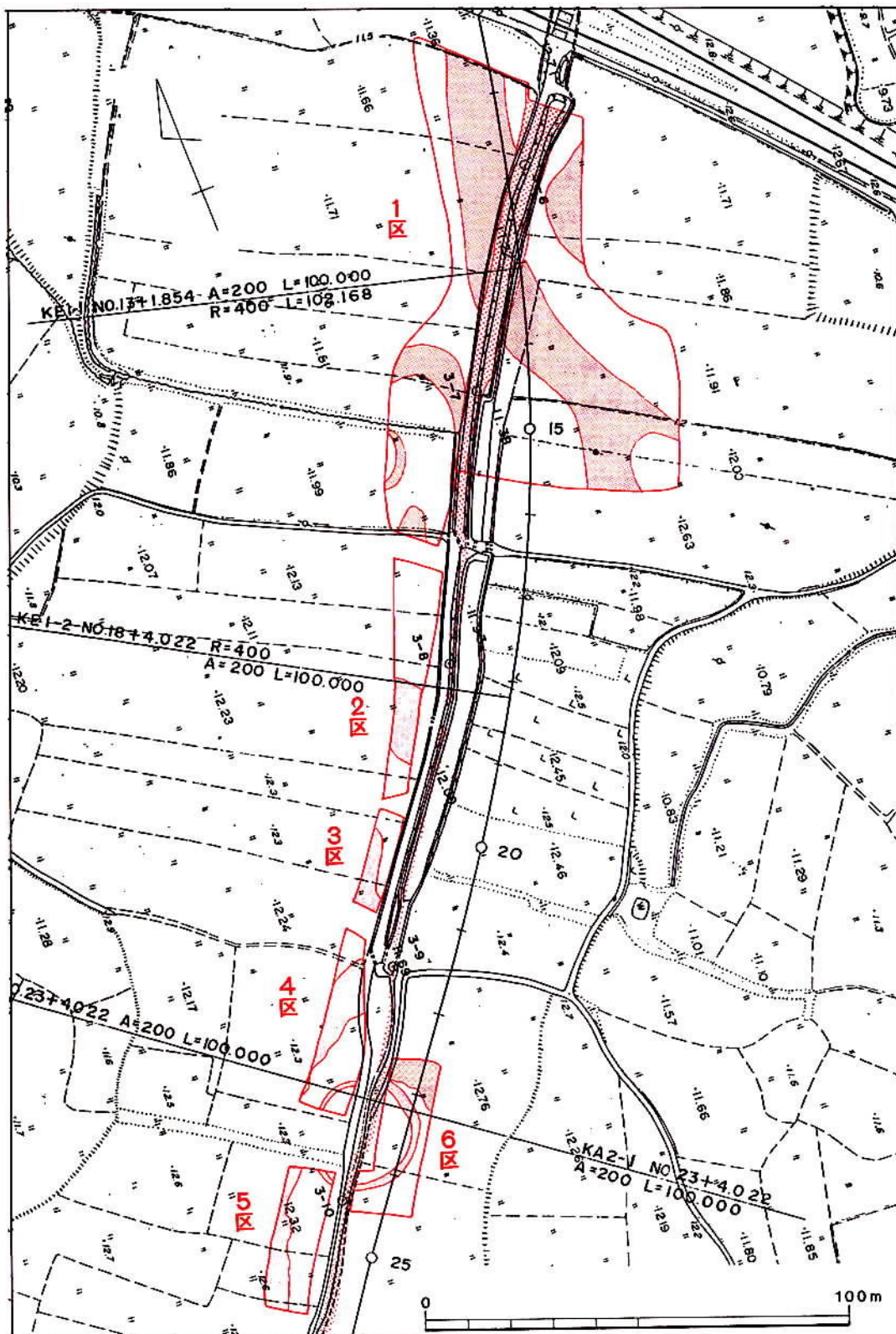
当該遺跡の辻垣ヲサマル遺跡では、第44図で示す様に、旧河道の流路が大溝となって走っている。南側5・6区では円形周溝は、陸地化が早かったわけで、弥生前期の遺構がみられる。2・4区では、それよりも新しい弥生終末から古墳時代初頭期の水際の祭祀等を見出している。また1区では、歴史時代の中世期の遺構と古墳時代初頭の流路等を見出している。

しかしながら、遺跡全体に後世の排水路が縦横に走っているため、円形周溝の中央部について削平されていた。遺跡は標高11～12m前後に位置していることがわかる。

遺跡の中の遺構の存在については、一言では流路と陸地化された部分（円形周溝の部分）であって、その大半は流路の中と考えた方が妥当である。これに伴う集落地を求めるならば南側の高位置の水田の中の微高地がこれにあたろう。

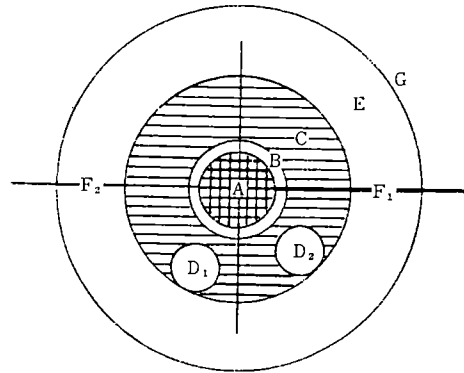
周辺部の開発によって、より正確に捕捉されることであろう。今後の展開が期待される。

徳永川の上遺跡は、辻垣より3km上流の河岸段丘状にあるもので、弥生前期～古墳時代にかけての遺構が見出されている。詳細については報告書の刊行がまつれる。



第44図 辻垣ヲサマル遺跡溝状遺構配置図

また当該遺跡から古墳時代初頭期の生活領域を求めるならば、流路にとまなう水際（水辺）の祭祀である。前述の酒井氏は機能空間を次の様書いている。生活領域と重複しさらに広がる機能空間は水田・畑・工房・墳墓・祭祀場・広場・倉庫・水路他、生業や祭祀他、各種の「機能施設」がパッチワーク状に隙間なく設けられ、全体として完全な「人工景観」（遺構）をなす。遺跡中心部ではそれらは住居等の施設と混在し、その外側では各種機能的な遺構・遺物類だけが重点的に分布する。各種生活施設と近接して壺棺や埋葬等が発見されるとそこが遺跡中心部＝基本生活領域・広い水田や方形周溝墓群だけだとそこは生活領域外側の機能空間であることを示す。この空間規模は直径 700 m 程度の遺跡が多い。もちろん自然地形の実情に起因して実際にはその平面形は多様である。……（後略）」、と述べている。含蓄深い論究である。



拠点集落遺跡の基本構造概念図 A: 基本生活領域 B: 外帯空間 C: 機能空間 D: 墓域 E: キャンピメントエリア F: 道 G: 外界

第45図 拠点集落遺跡の基本構造概念図

機能空間論については、遺跡をマクロ的に、またミクロ的に導き出すことができるわけで、京都平野における機能空間については今後の宿題としたい。

当該遺跡は基本生活の領域である。しかしながら、発掘面積が道路幅であったため、マクロ的に導き出すことはできなかつたが、推察することは可能である。

## 2. 出土遺物について

出土遺物からみて、当該遺跡が立地していたのは、弥生時代の前期後半頃の円形周溝に伴なうものと、古墳時代の初頭ごろの古式土師器の一群である。それと、大溝中に流れ込んだ縄文後期の破片である。

大溝中には流木を中心に木根もみられていることから、風倒木の可能性が強いものと考えられるものも若干出土している。図版17-(2)は三叉鍬である。取り上げ中に失敗したので、図示できなかった。

とくに出土状況等から、興味を引いたのは、2区の土器等の出土状態と土製の模造鏡の出土した状況である。

いわゆる、水辺の祭祀を思わせるものである。第10図、図版11・12で見られる様に、完形甕



・器台・壺等と共伴して土製の模造鏡がみられた。

周防灘沿岸部での土製の模造鏡がみられるのは遺跡は次の通りである。

1. 長野A遺跡（北九州市小倉南区）古墳期の集落 (註4)
2. 潤崎遺跡（北九州市小倉南区）古墳期の集落 (註5)
3. 五反田遺跡（京都郡豊津町）古墳期 (註6)

の3ヶ所を上げることができる。

溝の中から出土した青銅鏡片については、2km北側の行橋市津留遺跡（註7）を上げる。出土状況からみて、水辺の祭祀の可能性をもつもので、報告書から引用すると、Ⅱ区の溝5の底辺より出土した方格規矩鏡片で、復原直径は13cm前後で、折損分を丸く磨き上げている。鑄上がりは良好で、舶載品で、後漢後半のものと考えられる。時期的には、ヲサマル遺跡の2区の時期と同じである。弥生終末から古墳時代初頭期と考えられ、津留遺跡と辻垣ヲサマル遺跡とは、ほぼ同時期に存在している。

水際の祭祀と捕えられるのは、ヲサマル遺跡でいえるわけである。第10図、図版11・12をもう一度見て欲しい。土製の模造鏡を中心に土器の検出がみられ、先に行ほど、木・木根等が出土している。

このことを踏まえて、津留遺跡をみると、Ⅱ区の溝5から手捏のミニチャーの壺・鉢形土器が、鏡片の近くから出土していることに気付くであろう。

津留遺跡は水辺の集落の可能性があると総括しているが、その溝の水際で祭祀が行なわれたことは言えるであろう。

2km南側の辻垣ヲサマル遺跡では、水際の祭祀の状況がみられることが実証されたと言ってもよいものである。

この期はいわゆる邪馬台国時代の集落が、大字津留・大字辻垣・大字徳永とつづく。祓川の上流部にかけて、ほぼ等隔で集落があったことは、椎田道路関係の埋蔵文化財の発掘調査で捕捉されたわけで、今後調査報告書として刊行され、その実態が明確化され、より京都平野の弥生終末期から古墳初頭期が実証されることを期待して、今後としたい。

## 註

- 註1 副島邦弘『津留遺跡』「行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集 福岡県教育委員会 1991
- 註2 昭和63年度から平成2年まで調査を実施した遺跡で、現在整理作業中
- 註3 酒井龍一「拠点集落と弥生社会」『景観Ⅰ（原始・古代・中世）』日本村落史講座2 雄山閣 1990
- 註4 熊本市立博物館『九州古代のまつり—出土品にみる人びとのいのり—』地名表 開館30周年特別展 1982
- 註5 熊本市立博物館『九州古代のまつり—出土品にみる人びとのいのり—』地名表 開館30周年特別展 1982
- 註6 佐田茂「九州の祭祀遺跡」『九州考古学の諸問題』
- 註7 註1に同じ

### 3. 総 括

今回の発掘調査の成果を箇条書にして総括してみたい。

1. 辻垣ヲサマル遺跡は、祓川の河川段丘に位置し、標高11~12m 前後で、祓川自身が大きく流れを蛇行させている。この周辺部が沖積化（陸地化）は縄文後期後半と見受けられる。その後、弥生前期には氾濫等の河道の変化がみられる。そのため、弥生後期から古墳時代の始めには、完全に陸地化の部分と河川の流路であったことが理解された。
2. 5区・6区には円形周溝の遺構が検出された。その中央部分が近代の排水路によって破壊されていたので、完全に検出することができなかった。
3. 円形周溝の溝底には弥生前期の土器群がみられた。石剣・石庖丁等も出土している。時期的には弥生前期後半と考えられる。
4. 辻垣ヲサマル遺跡の年代は、古墳時代の初頭の遺物とそして木製品・流木等が2区を中心とした地区で、遺物としては土製模造鏡は興味を引くものである。1区には歴史時代の中世期のものがみられた。
5. 今回の調査目的は、弥生時代の水田・集落・墓地等の検出をねらっていたが、路線内だけの調査からは残念ながら捕捉することができなかった。
6. この周辺部には、弥生時代の集落遺構や、弥生時代の水田跡の検出が可能である。今後この道路によって、開発が周辺部に広がった場合には注意を喚起する必要がある。
7. 発掘地区での遺構については、前章で述べたとおりである。畠田・長通を入れたところで、遺跡の実態について考えることが望ましい。

以上が、辻垣ヲサマル遺跡のまとめである。発掘調査・整理報告作業に協力された方々に感謝しつつ、筆を擱く。(H5. 3)

辻垣ヲサマル遺跡の発掘調査の野帳より二句

ごいさぎの

川面にさむし

雪のくれ

久仁 (S62. 12)

くれ雪の

明日は新たな

年はじめ

久仁 (S62. 12)

# 辻垣遺跡の花粉分析

畑 中 健 一

福岡県行橋市大字辻垣字畑田に所在する「辻垣遺跡」のトレンチ壁面から採取した試料について行なった花粉分析の結果について報告する。

辻垣遺跡は、標高11m前後の微高地に立地している。発掘調査により、弥生時代前期（板付Ⅰ）から、中期（須玖）、後期にかけての溝状遺構と、自然流路と推定される大溝および袋状竪穴・柱穴を検出している。出土遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器・木製品類（杭・鍬）および自然遺物等で、石器類は少ない。

報告書をまとめるにあたり、発掘現場で試料の採取にご協力いただいた福岡県教育委員会文化課の副島邦弘氏に厚く御礼申し上げる。

**分析試料：**花粉分析の試料は、大溝のトレンチ壁面から10cm間隔で順次採取した。

**分析結果：**分析結果は各資料毎に、検出された樹木花粉（AP）の総数を基数（分母）として各分類群の出現率を算出し、ダイアグラム（第46図）に表示した。

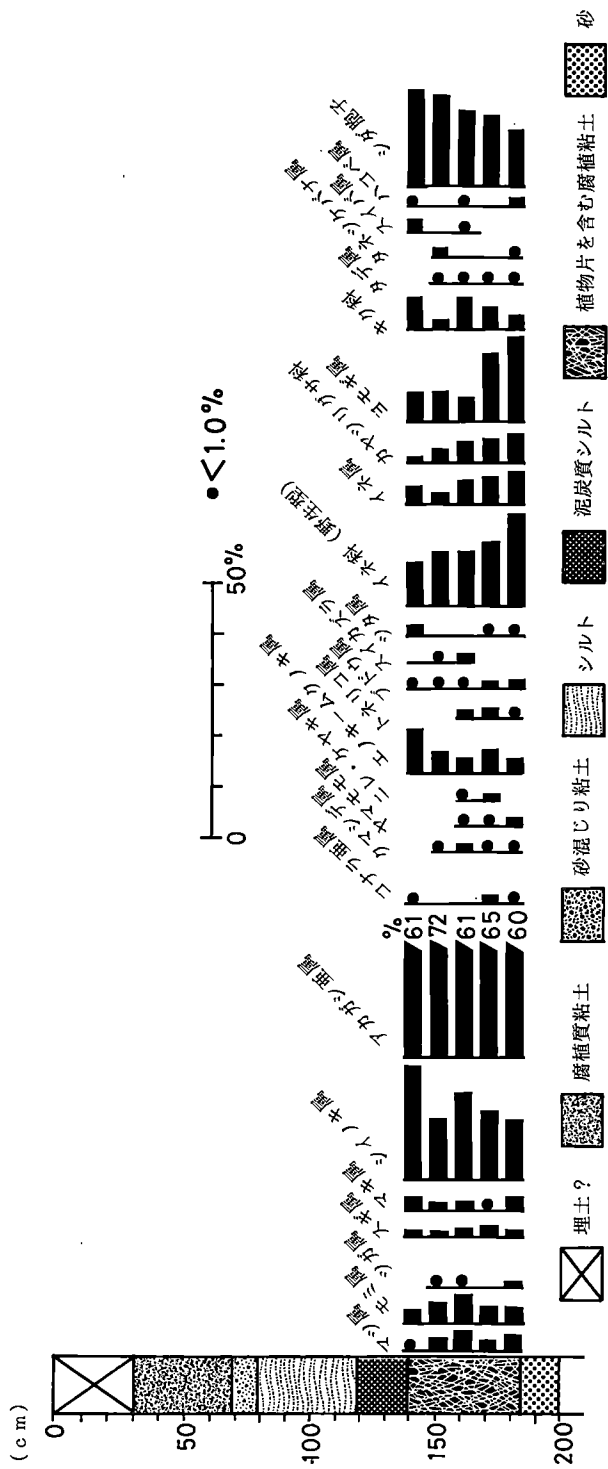
図に明らかなように、大溝の堆積物は表層（0～30cm）の埋土を含め、地表下140cmの層準まで無花粉層であり、最下位の砂層からも花粉化石は検出されなかった。

地表下140～184cmの植物片を含む腐植粘土層（弥生前期；板付Ⅰ）の花粉群集は、シイノキ属およびアカガシ亜属の圧倒的優占によって特徴づけられる。とくにアカガシ亜属は60%以上の高い出現率を示し、どの層準でもシイノキ属の出現率を上回っている。一般に北部九州の極相林（原生林）は、シイノキ属を中核とした照葉樹林と考えてよいが、辻垣遺跡の花粉群集では明らかにシイノキ属はアカガシ亜属よりも劣勢である。

このことから、当時（弥生前期）この遺跡周辺の丘陵地一帯には照葉樹林（常緑広葉樹林）が発達していたと考えられるが、すでに、人類文化の影響によりシイノキ属とアカガシ亜属の優占度は逆転し、アカガシ亜属優占の樹林に変貌していたと推定される。

このことは、エノキ・ムクノキ属、ブドウ属、スイカズラ属、ツタ属など二次林に生育する植物の花粉が出現することからも裏づけられる。

草本類ではイネ科（野生型）、ヨモギ属、キク科（ヨモギ属を除く）が多く出現する。イネ層（*Oryza*）は、2～6%と低率ながら連続的に出現し、粗放もしくは小規模ながら稲の栽培が行なわれていたことを示唆している。散発的に出現するタデ属、タネツケバナ属、スイバ属、ハコベ属などの花粉は、水田もしくはその近傍に生育した植物に由来するものであろう。



第46図 辻垣遺跡の花粉ダイアグラム

# 圖 版



辻垣ヲサマル遺跡周辺俯瞰航空写真（祓川上空から西側を見る）

建設省提供

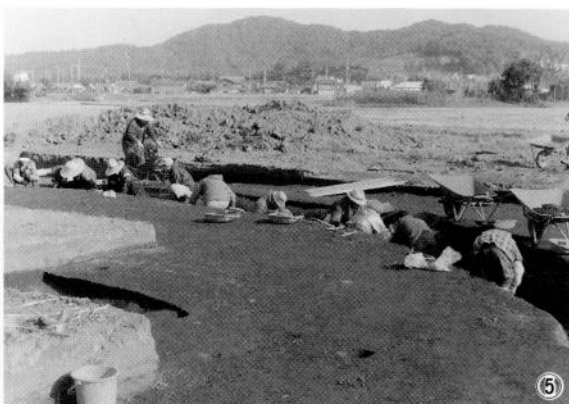
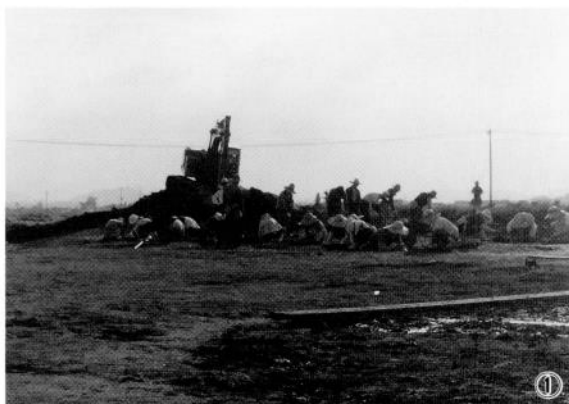


辻垣ヲサマル遺跡付近航空写真（国道10号線を中心にして）



辻垣ヲサマル遺跡全景 (南から)





発掘風景（遺構検出から埋戻まで）



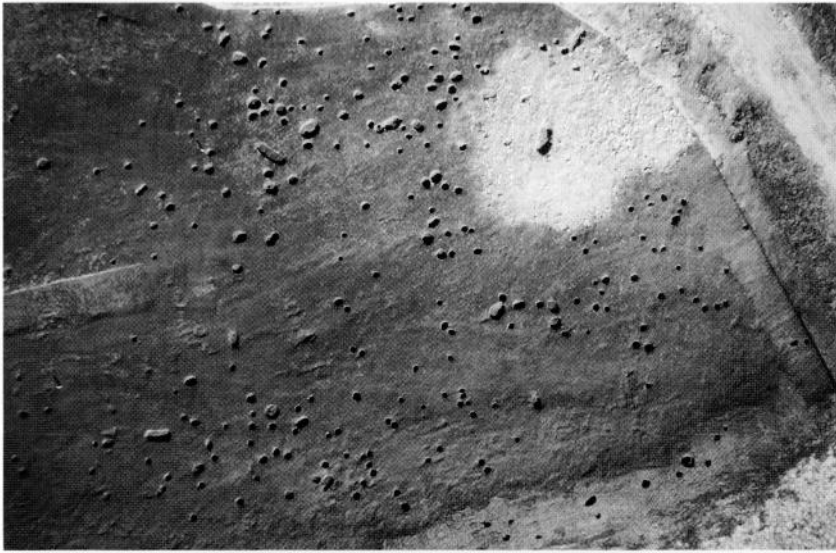
辻垣ヲサマル遺跡1区全景（西から）



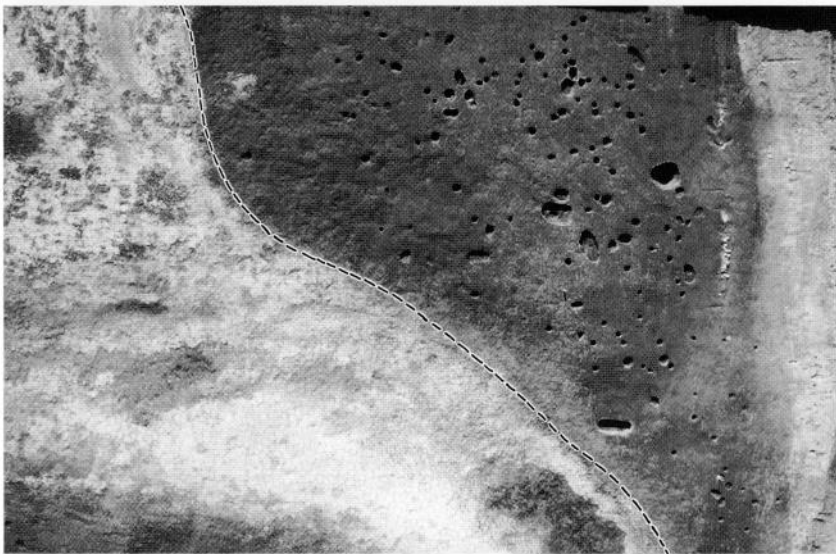
(1) 1区の流路跡と遺構全景



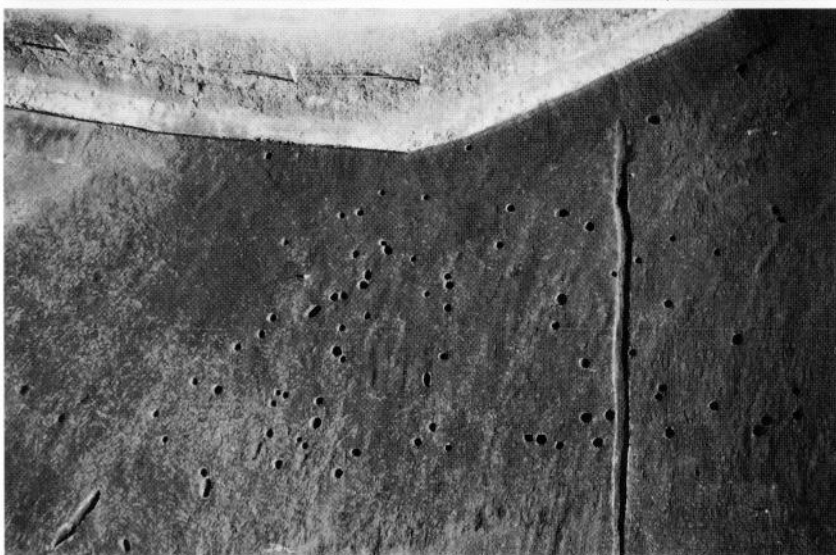
(2) 1区流路跡と遺構近景



(1) 1区遺構の状態  
(柱穴を中心に)



(2) 1区遺構の状態  
(柱穴を中心に)



(3) 1区遺構の状態  
(柱穴を中心に)



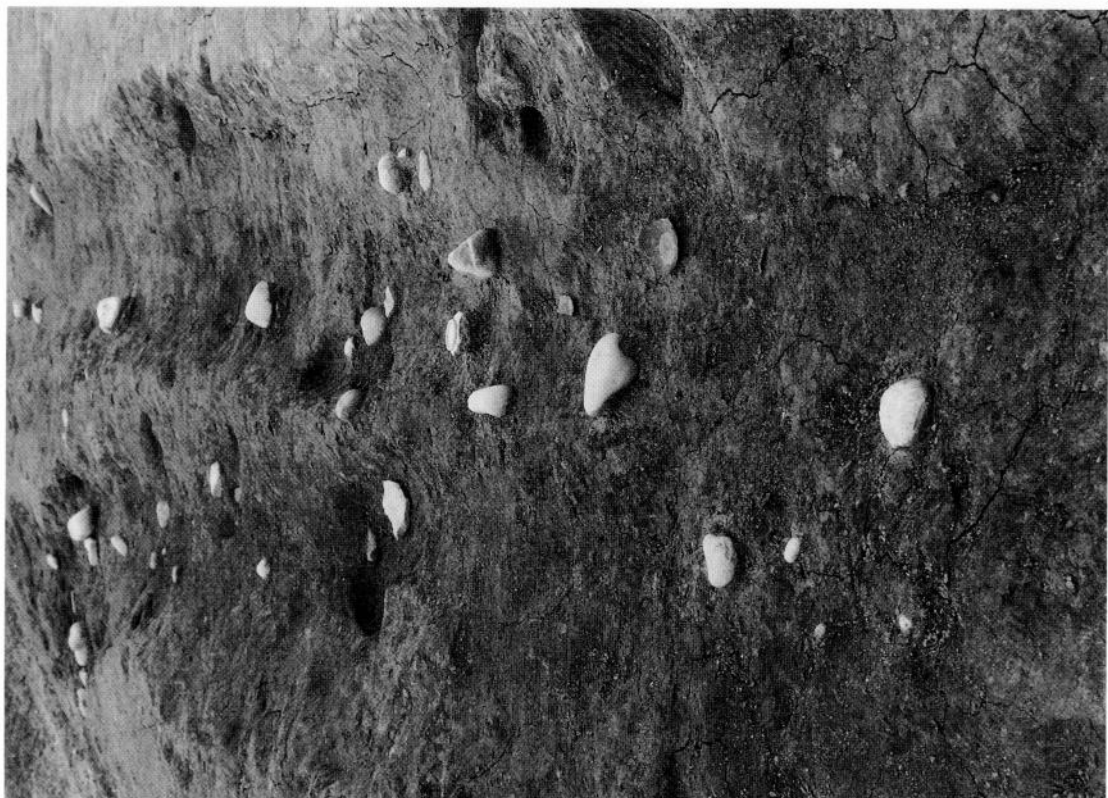
(1) 近現代水路と溝状遺構 (中世期)



(2) 溝状遺構近景



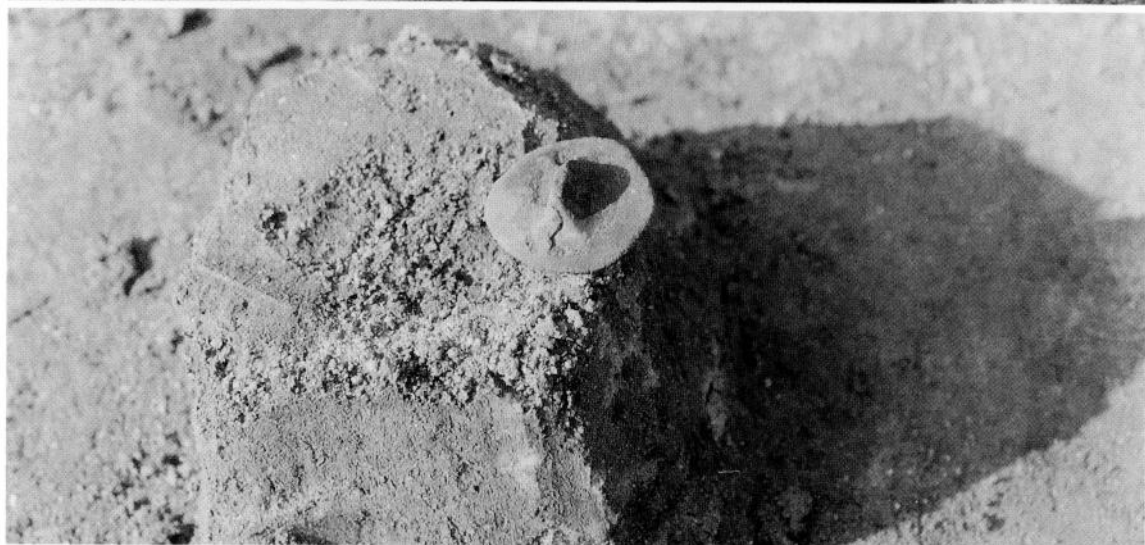
(1) 1号溝の状況(北から)



(2) 1号溝の遺物出土状態近景(北から)

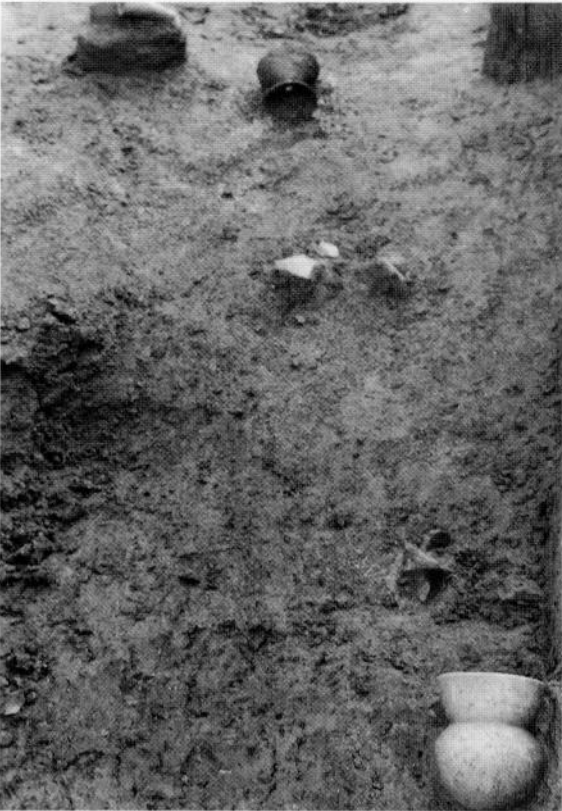


辻垣ヲサマル遺跡 2区全景



2 区 遗 物 出 土 状 态





2 区 遗 物 出 土 状 态



辻垣ヲサマル3区全景



(1) 辻垣ヲサマル遺跡3区近景



(2) 辻垣ヲサマル遺跡3区流路跡の状態



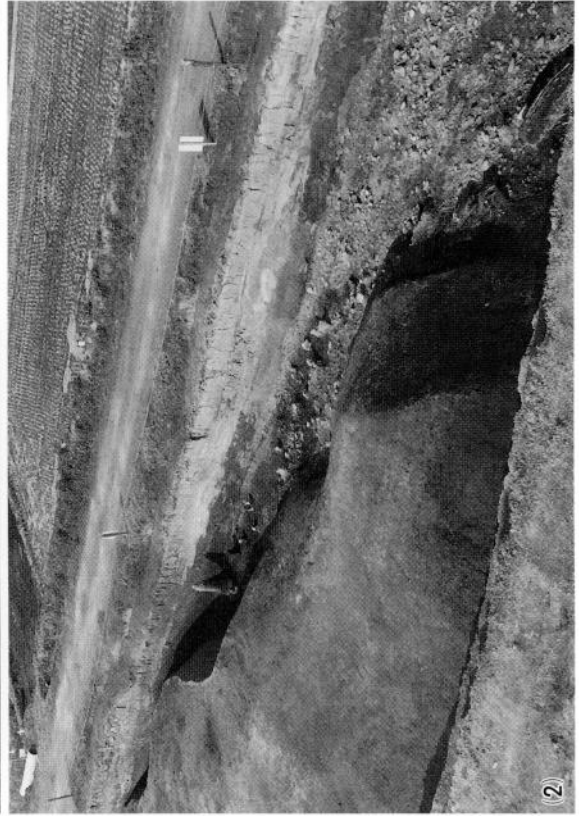
(1) 辻垣ヲサマル遺跡4区発掘前全景（試掘溝のみ）



(2) 辻垣ヲサマル遺跡4区発掘後全景



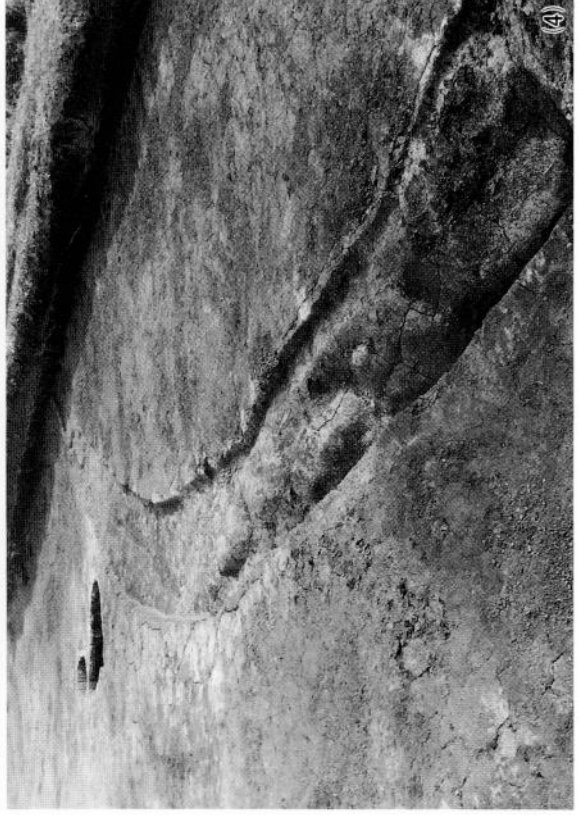
(1) 4区流路跡状態



(2) 4区流路跡状態



(3) 4区円形溝の状態



(4) 4区円形溝の近景



(2) 4区遺物出土状態(三叉鉄)

(1) 4区遺物出土状態

(4) 流路底遺物出土状態(石匣丁)

(3) 4区遺物出土状態(木製品建築材)



辻垣ヲサマル遺跡5区全景（上から）



(1) 5区表土剥ぎ終了時状態



(2) 5区遺構検出後状態

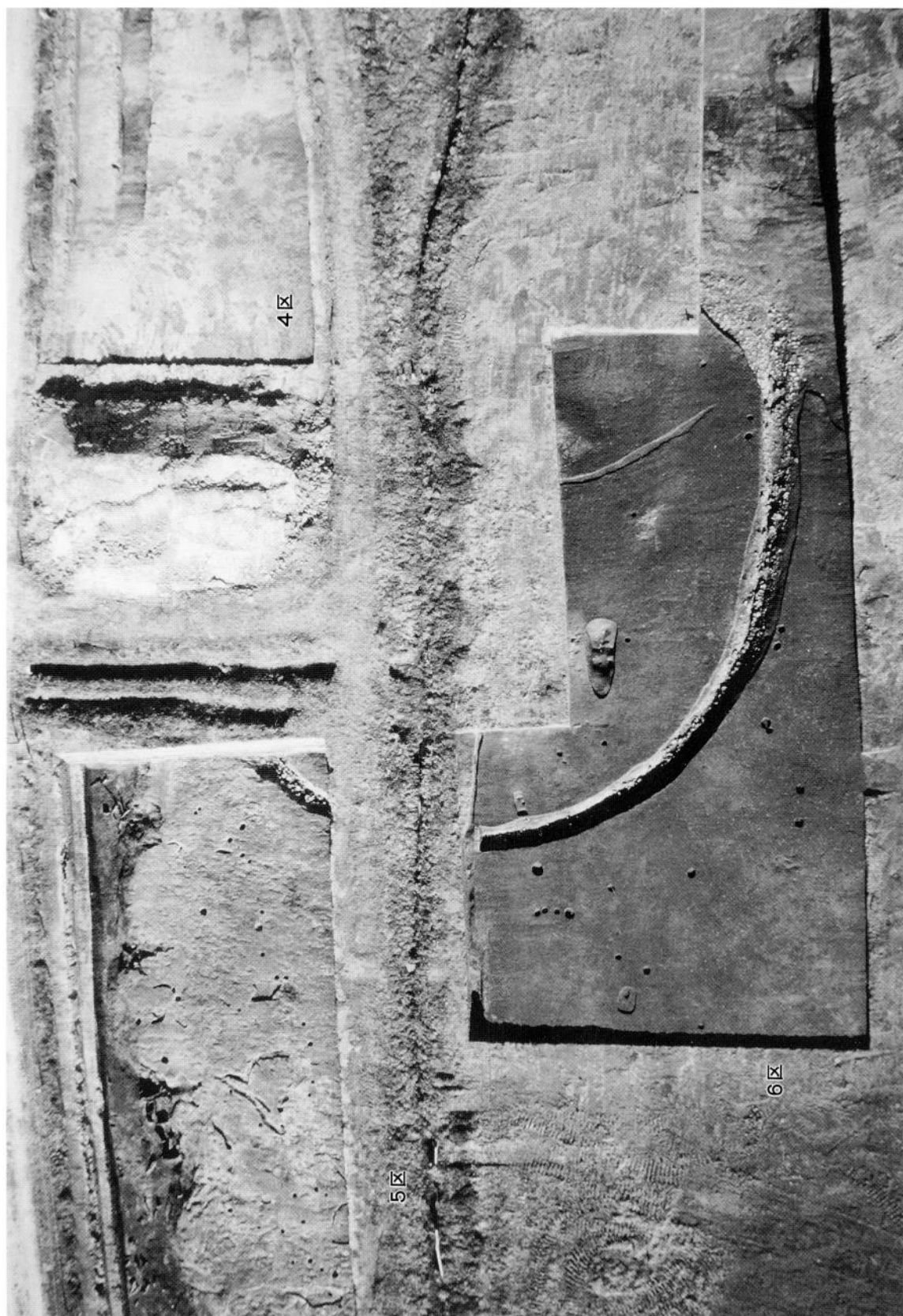




辻垣ヲサマル遺跡5区近景



辻垣ヲサマル遺跡5区木製品出土状態



辻垣ヲサマル遺跡6区全景



辻垣ヲサマル遺跡6区近景（北から）



辻垣ヲサマル遺跡6区流路跡のカタの部分と円形周溝(1)



辻垣ヲサマル遺跡6区流路跡のカタの部分と円形周溝(2)



(1) 辻垣ヲサマル遺跡 6 区流路跡のカタの部分状態



(2) 辻垣ヲサマル遺跡 6 区流路跡の末端部の状態



辻垣ヲサマル遺跡4区・5区・6区円形周溝の状態





(1) 辻垣ヲサマル遺跡6区円形周溝遺物出土状態 (1)



(2) 6区円形周溝遺物出土状態 (2)



(1) 辻垣ヲサマル遺跡 6 区円形周溝遺物出土状態 (3)



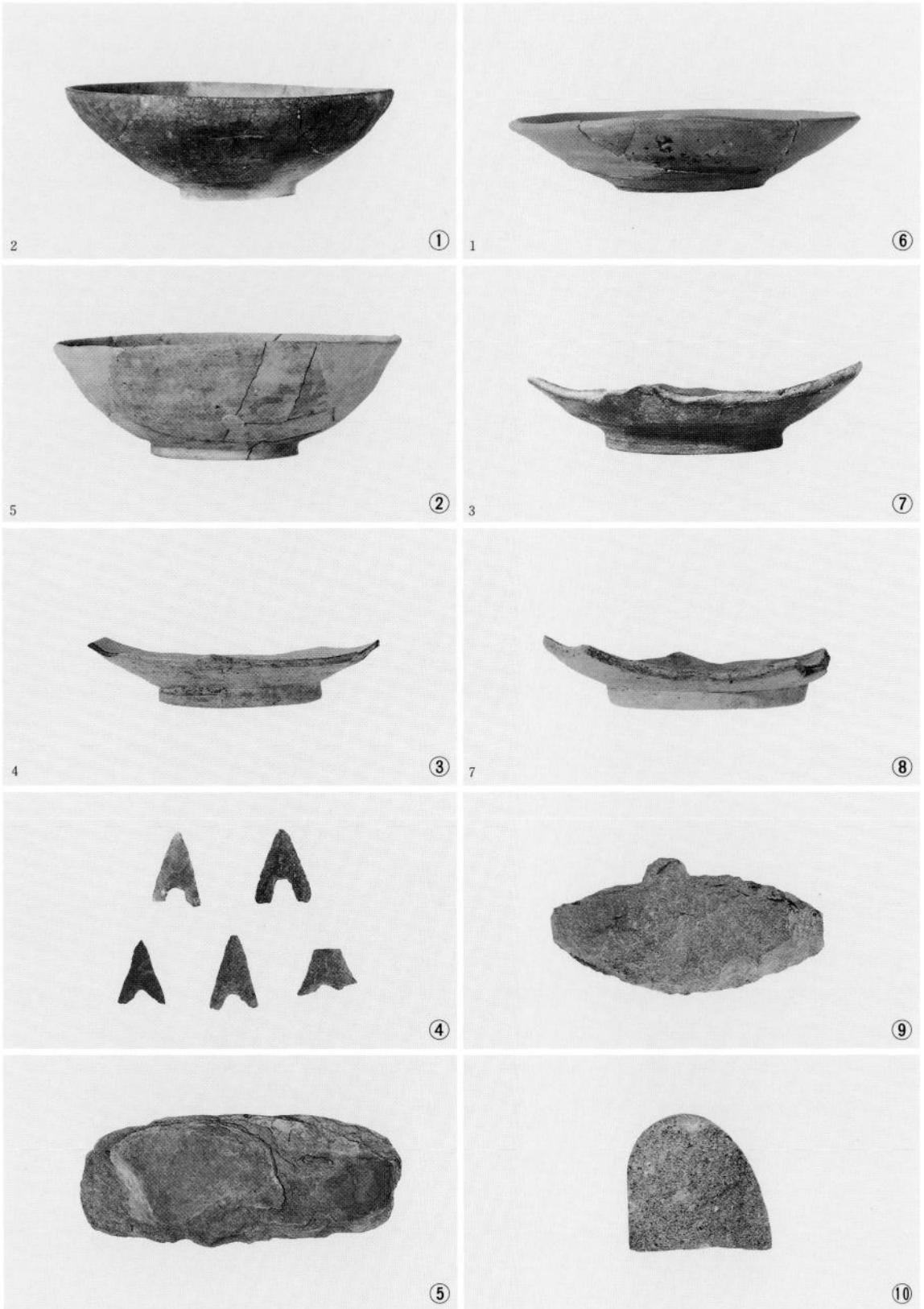
(2) 辻垣ヲサマル遺跡 6 区円形周溝の断面 (4)



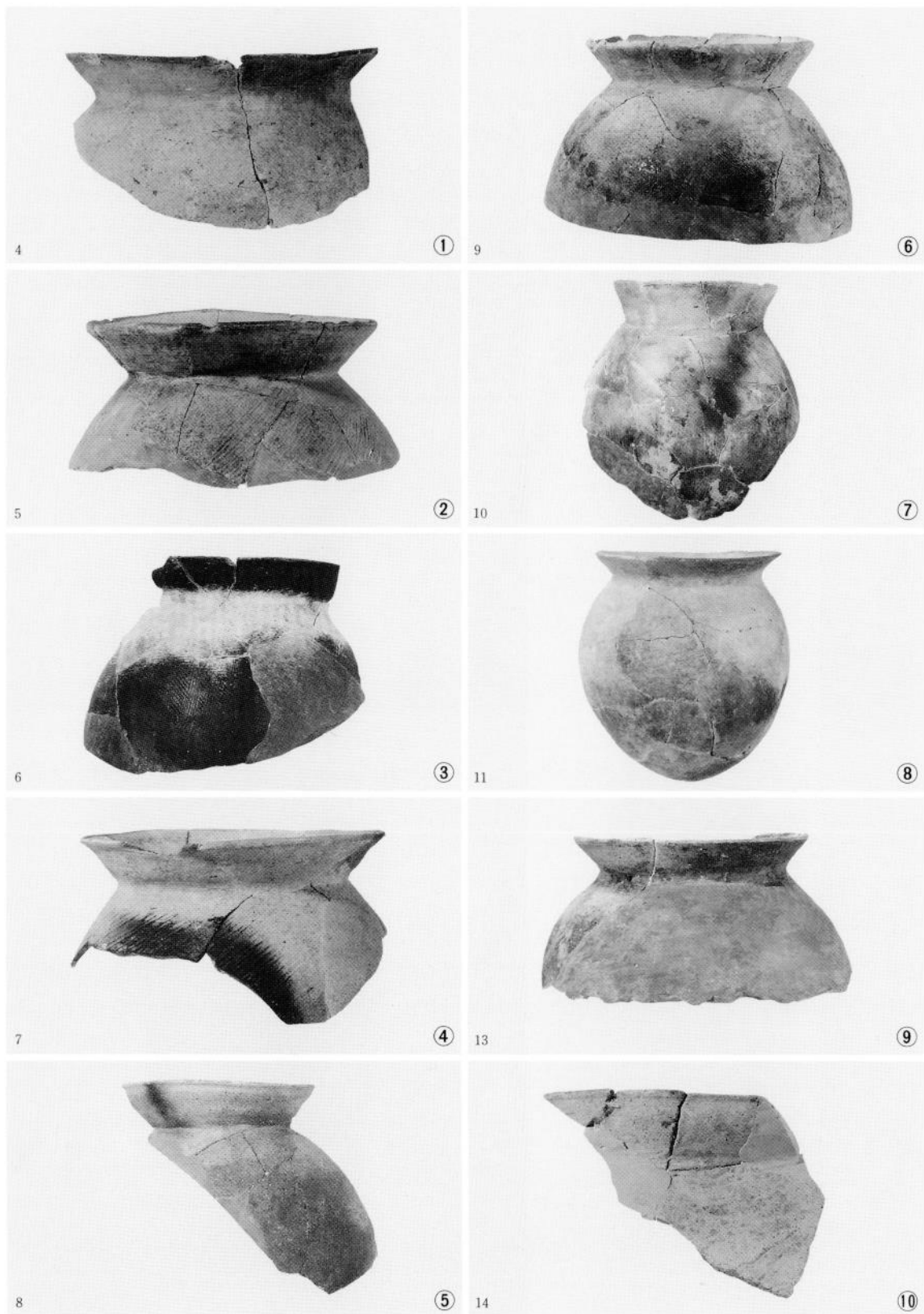
(1) 辻垣ヲサマル遺跡 6 区流路跡中遺物出土状態 (石剣等)



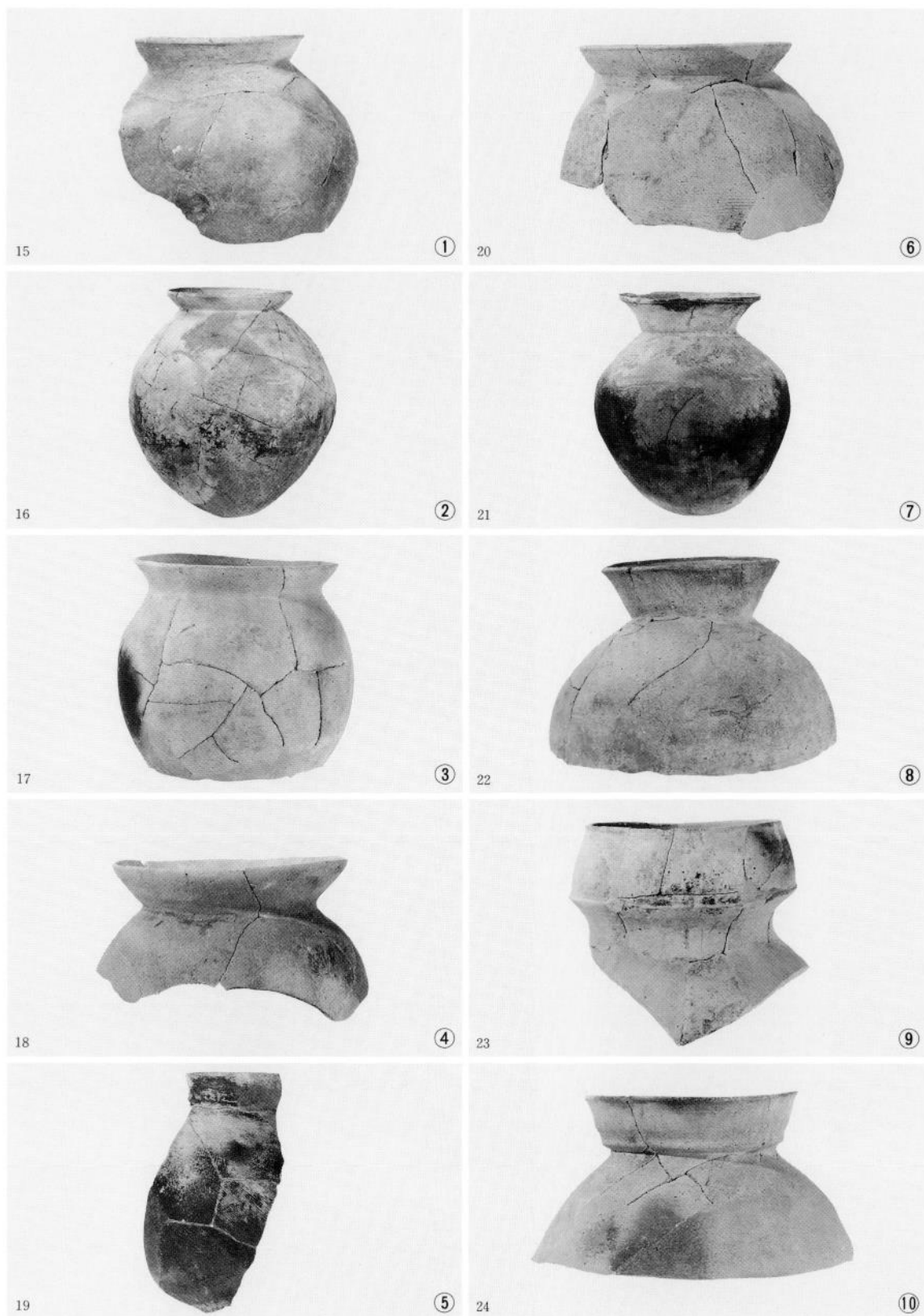
(2) 辻垣ヲサマル遺跡 6 区流路跡中遺物出土状態 (木製品)



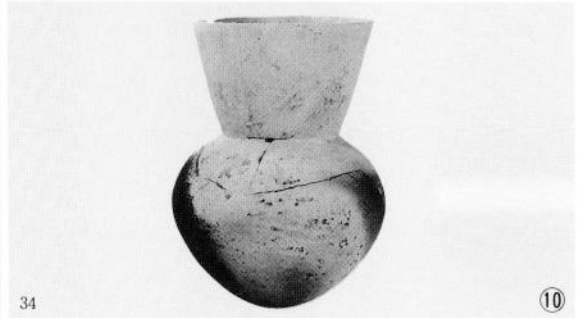
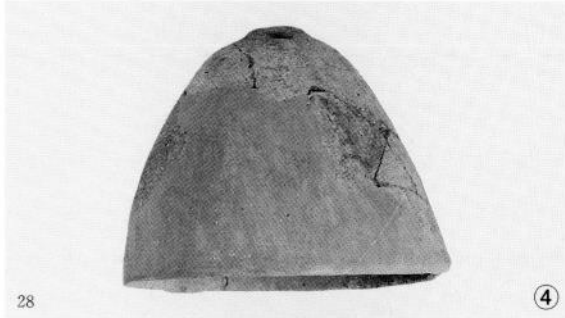
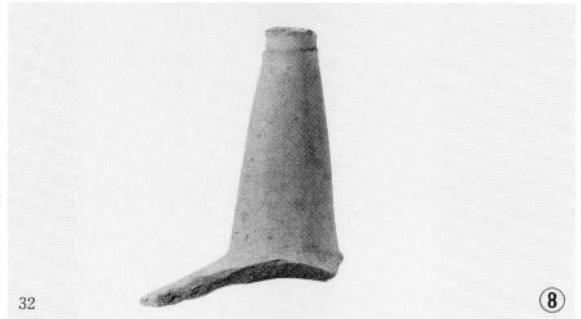
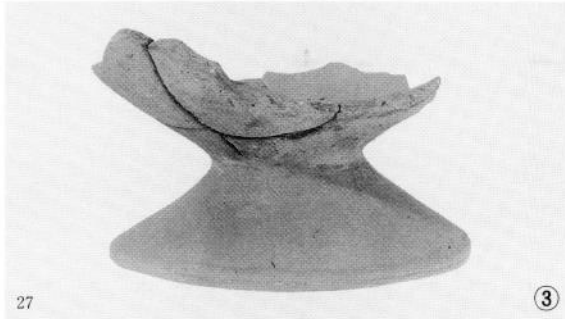
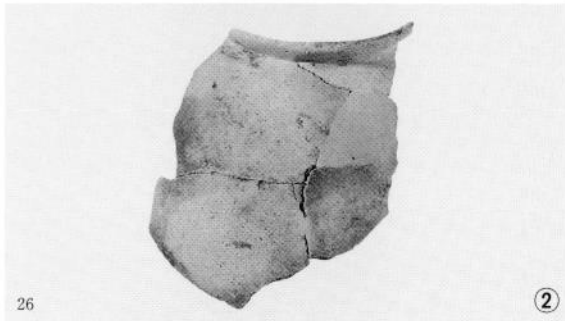
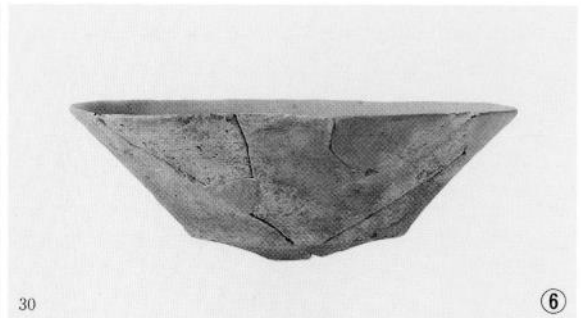
辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ① 1区出土（土器・石器）



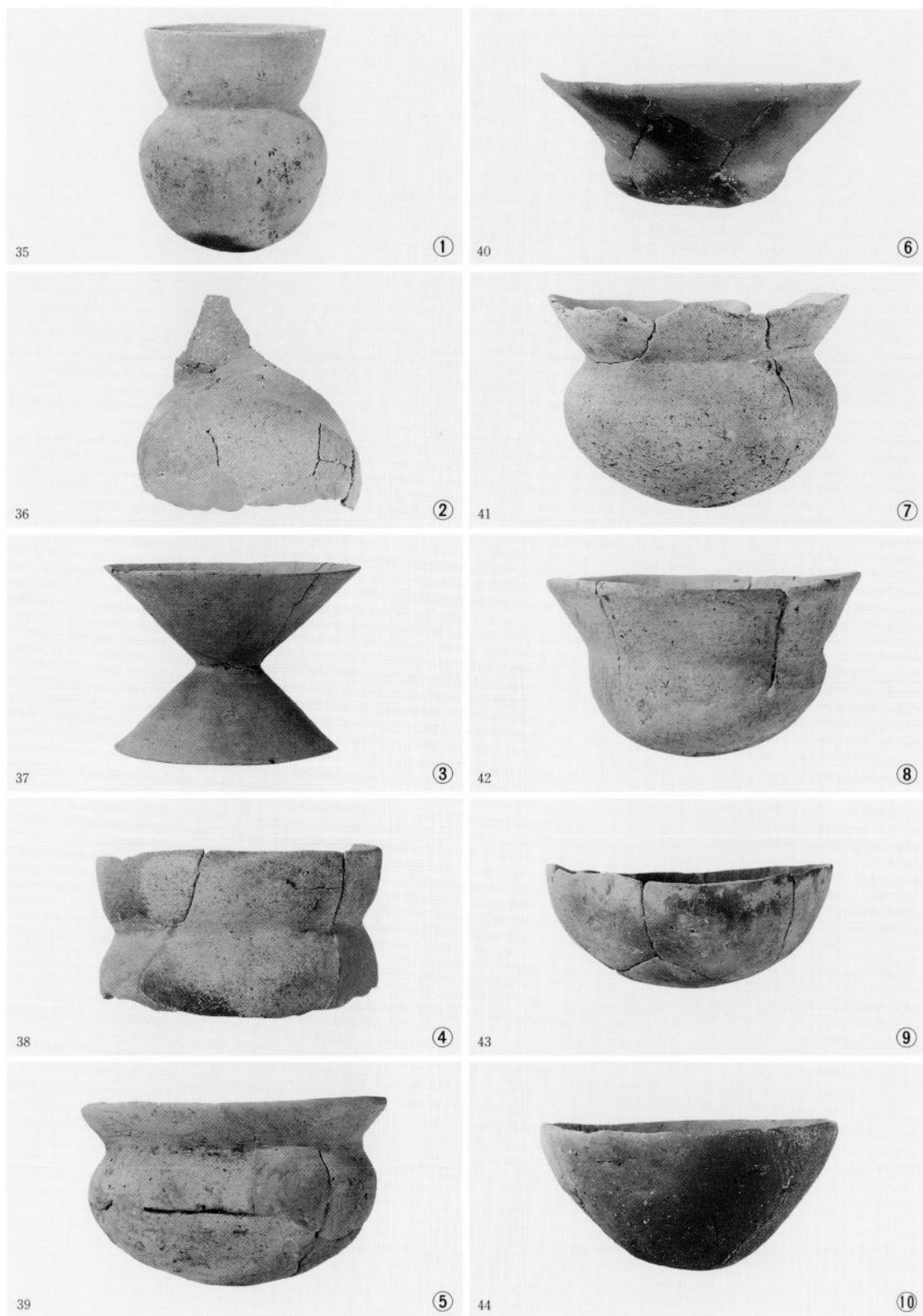
辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ② 2区出土(土器)



辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ③ 2区出土(土器)

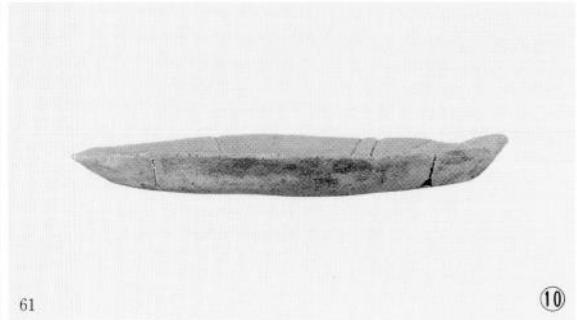
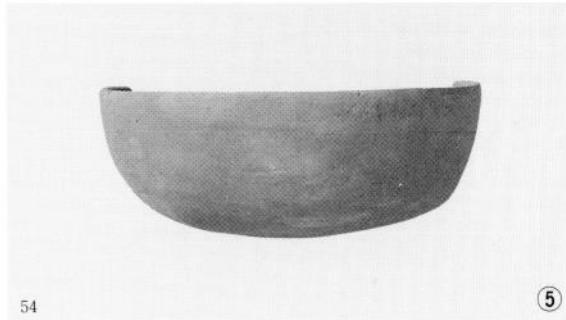
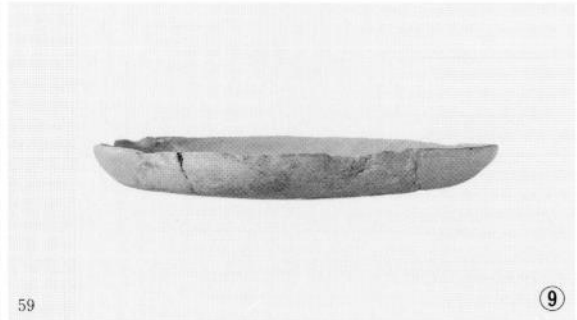
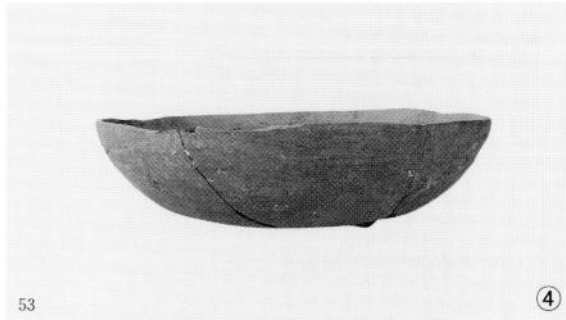
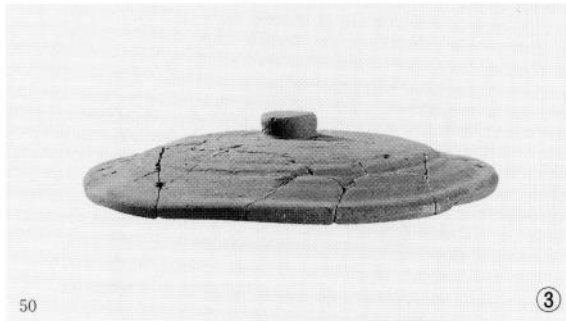
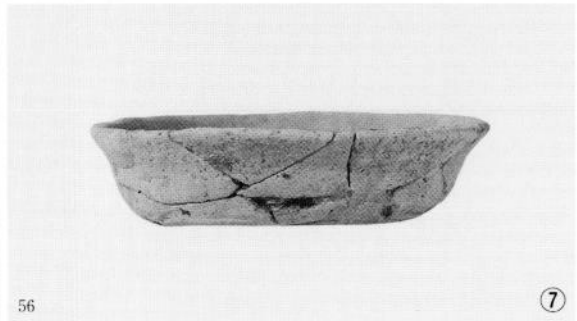
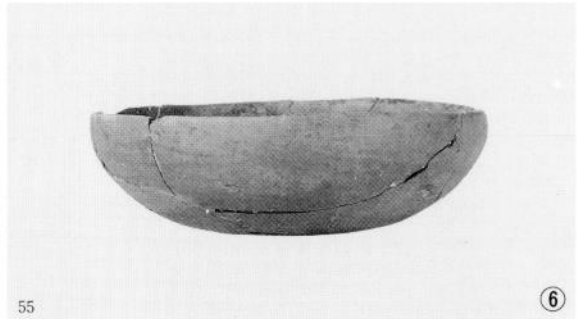


辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ④ 2区出土(土器)

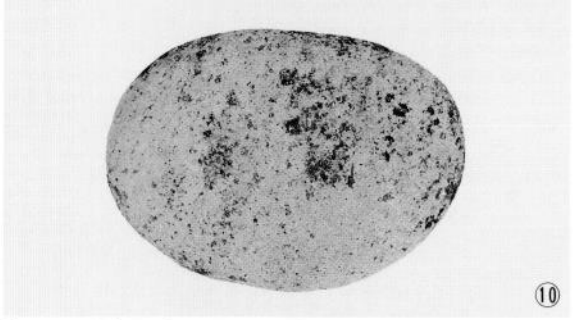
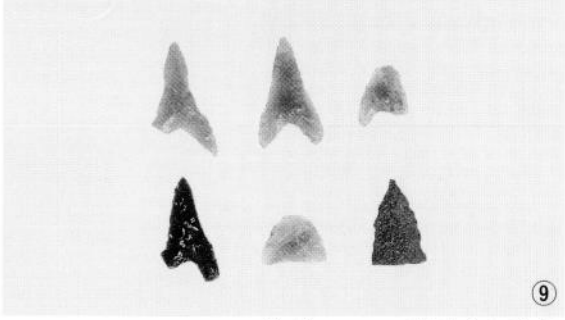
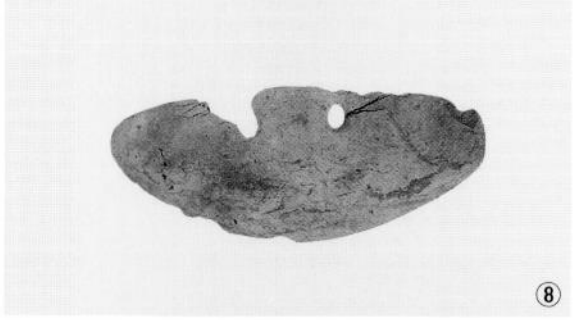
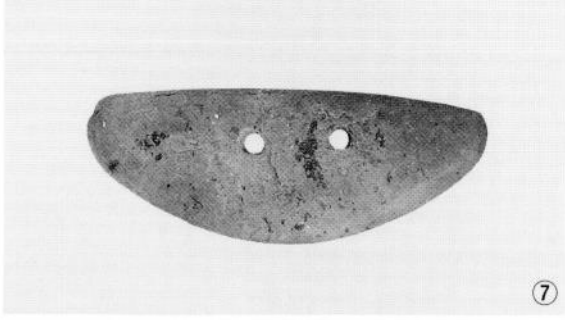
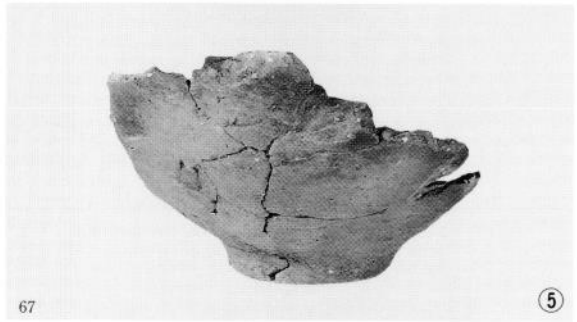
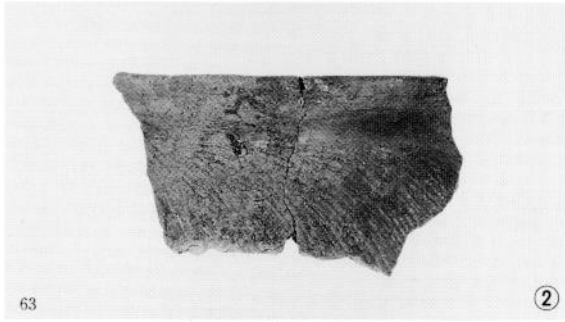


辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑤ 2区出土(土器)

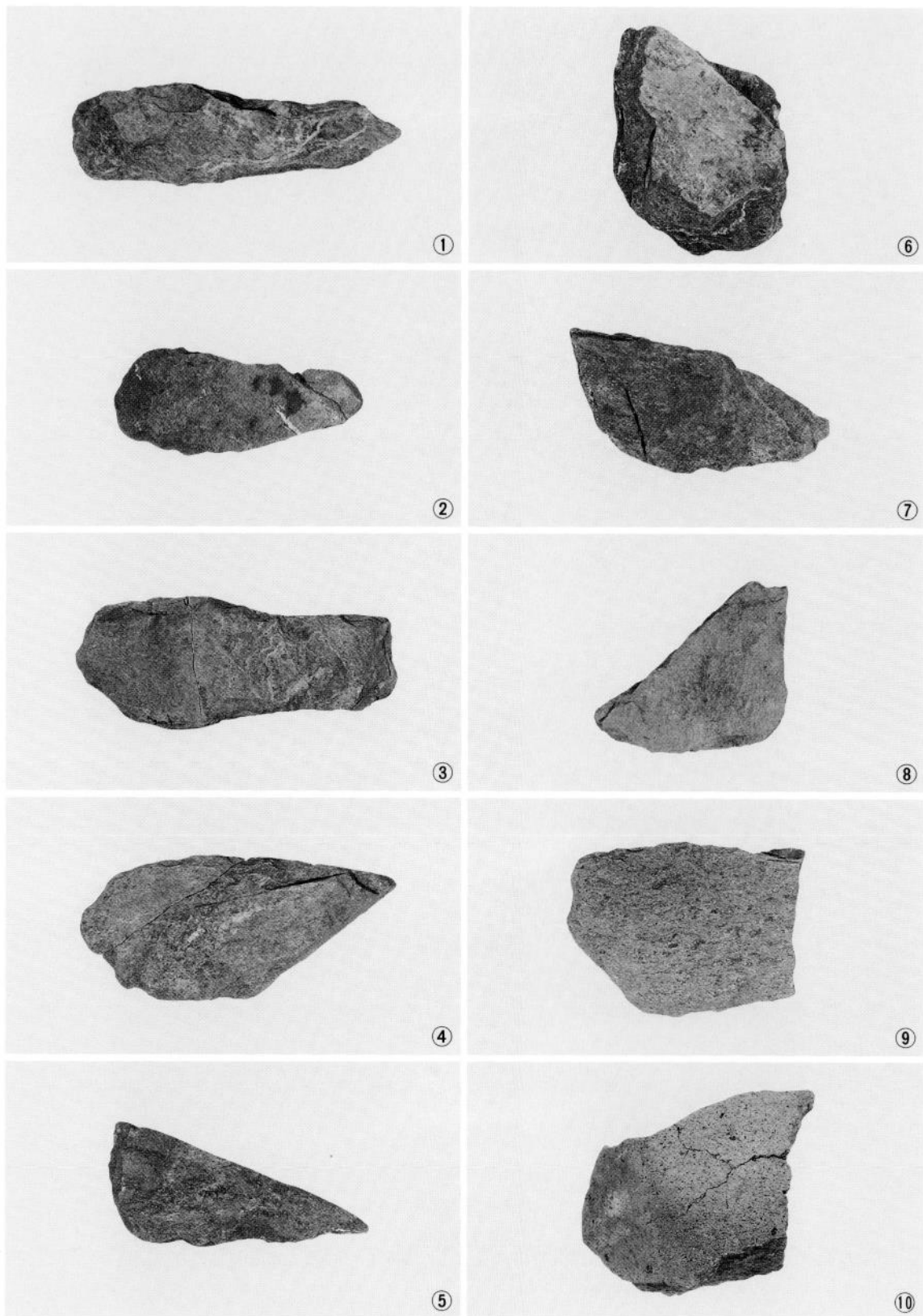




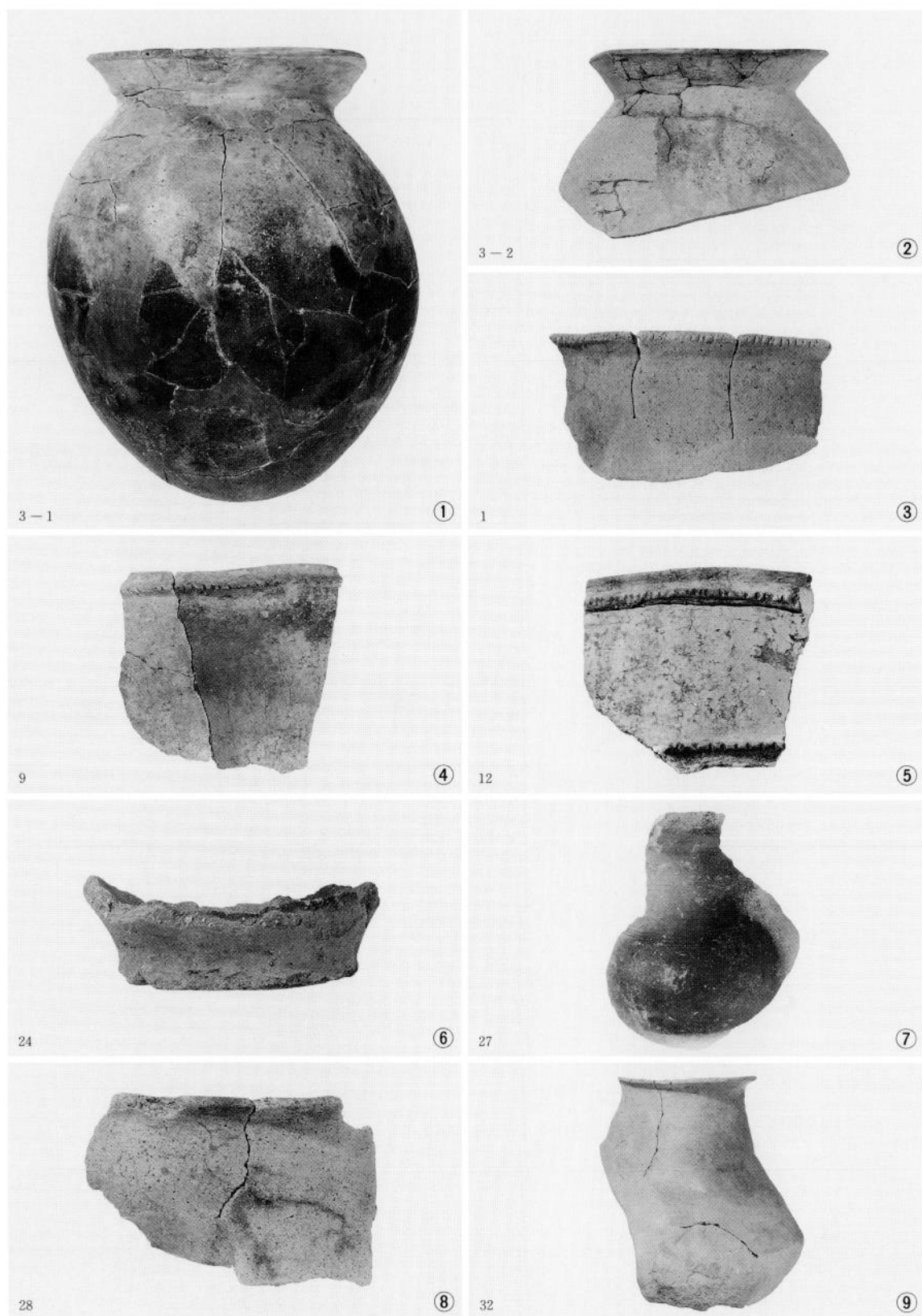
辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑥ 2区出土(土器)



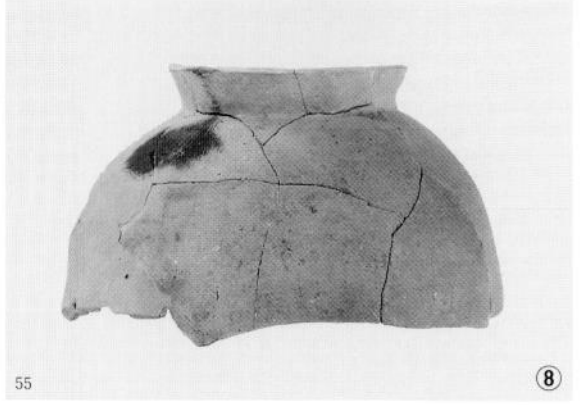
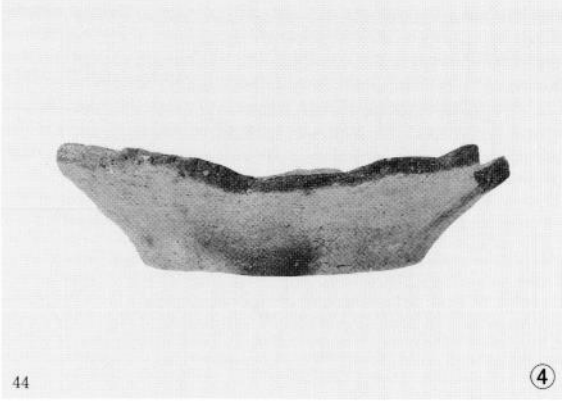
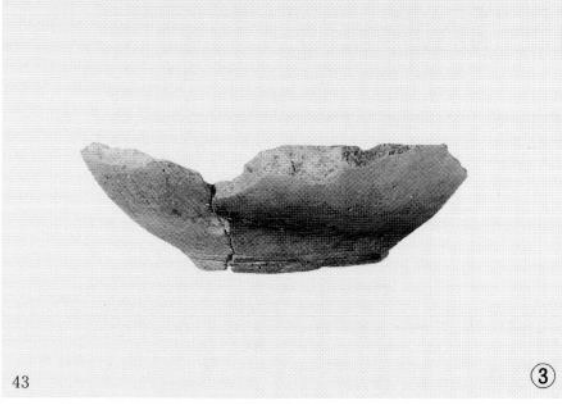
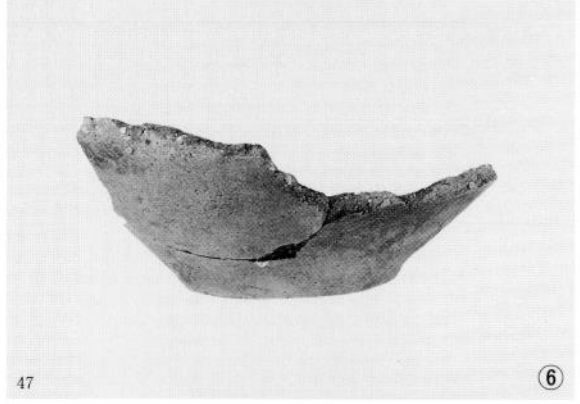
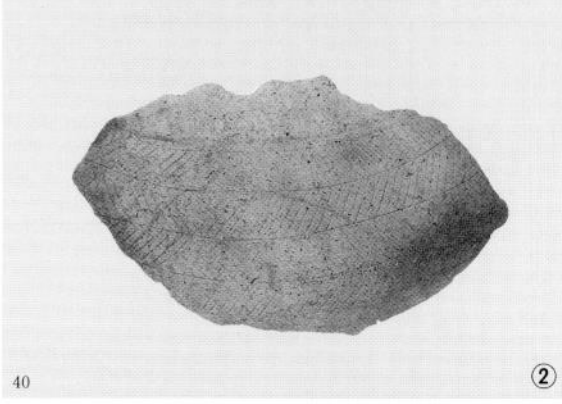
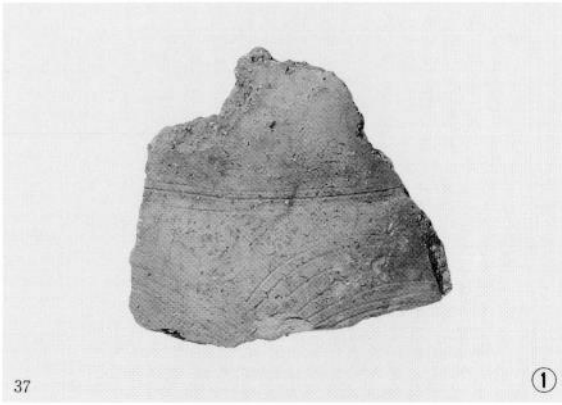
辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑦ 2区出土 (土器・石器)



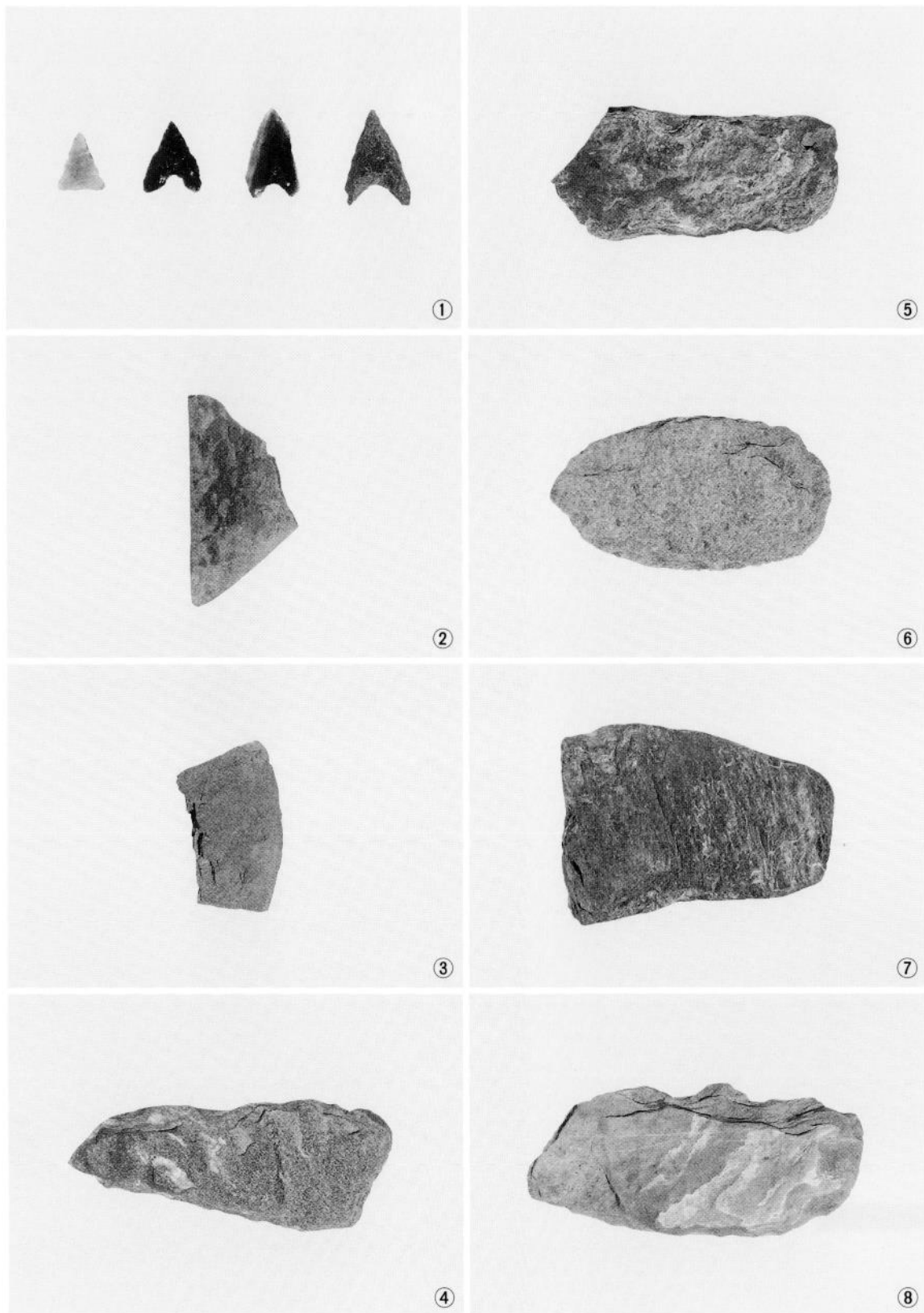
辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑧ 2区出土 (石器)



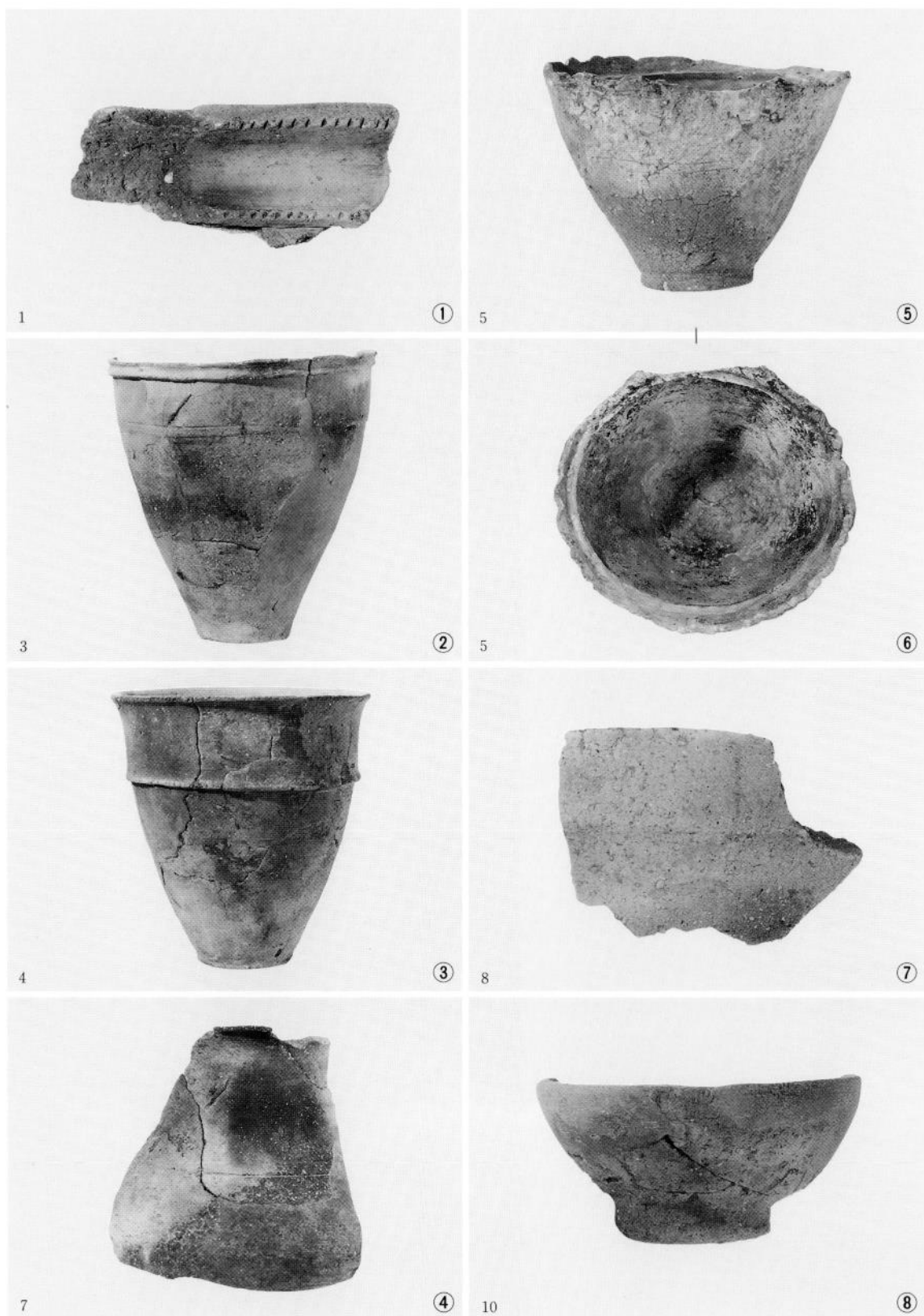
辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑨ 3・4区出土(土器)



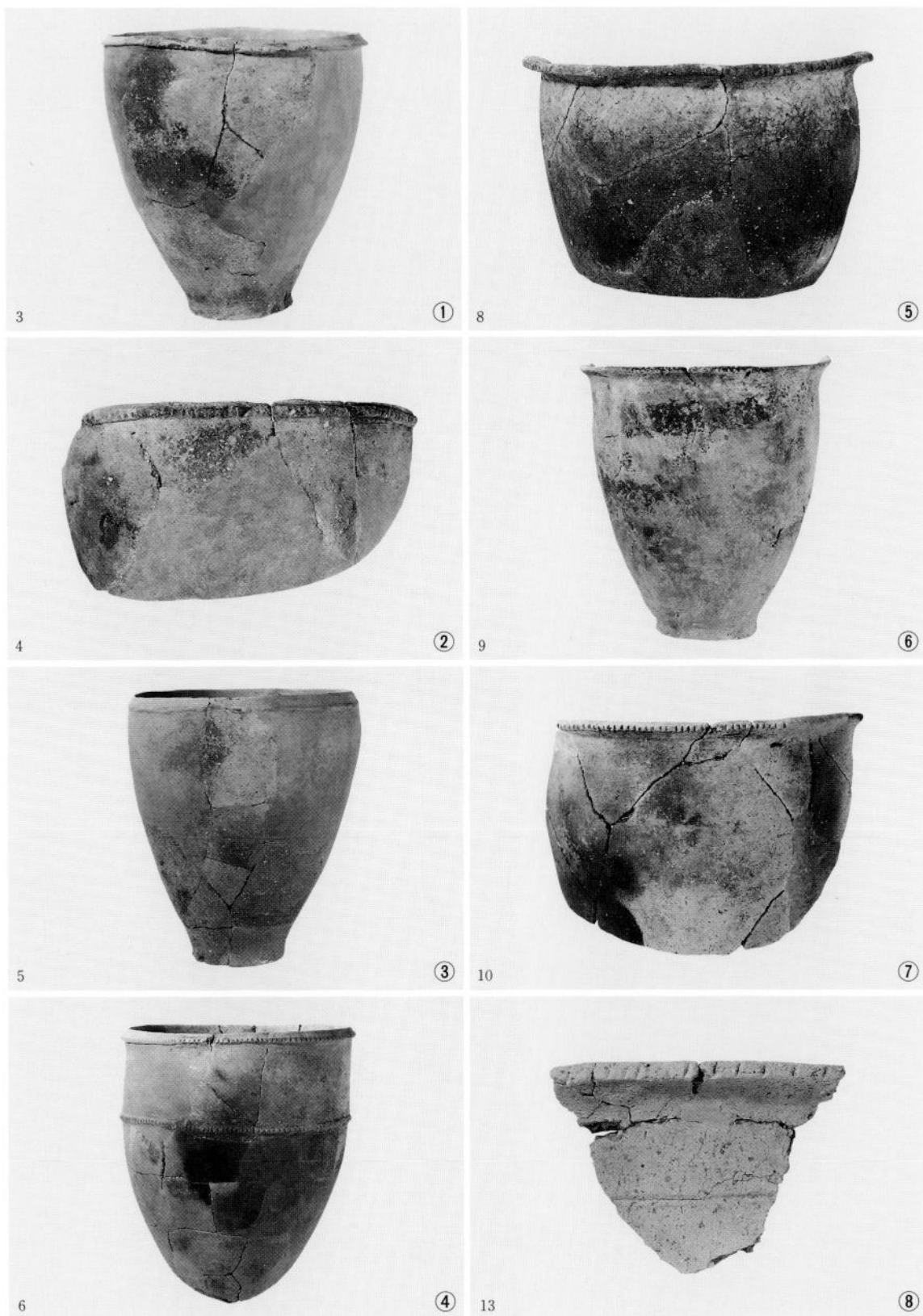
辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑩ 4区出土土器



辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑪ 4区出土石器

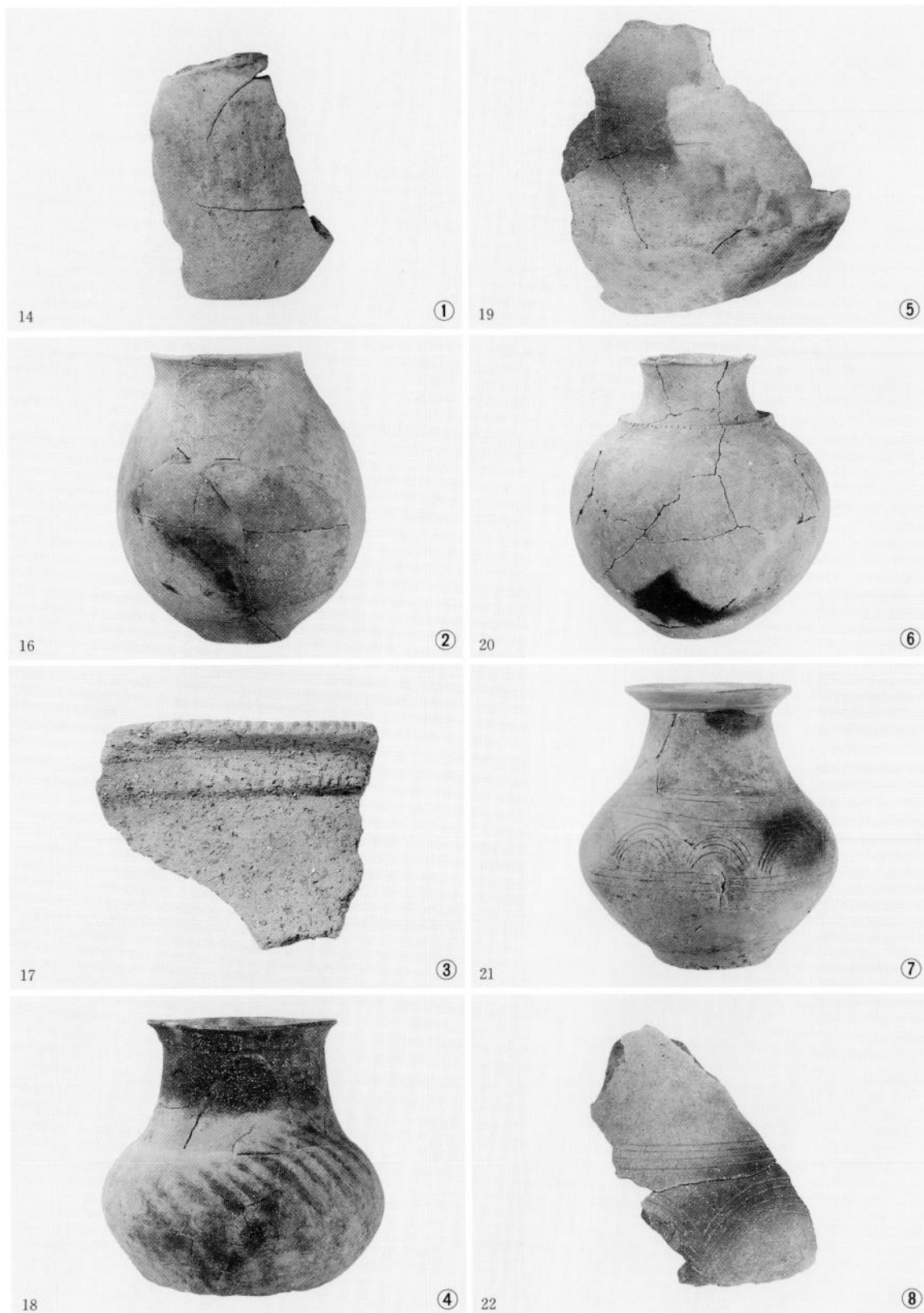


辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑫ 5区出土土器

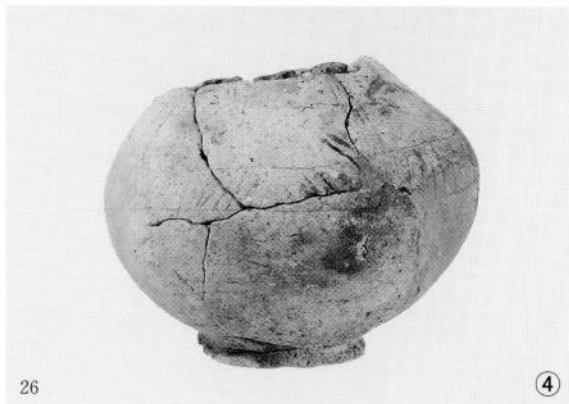
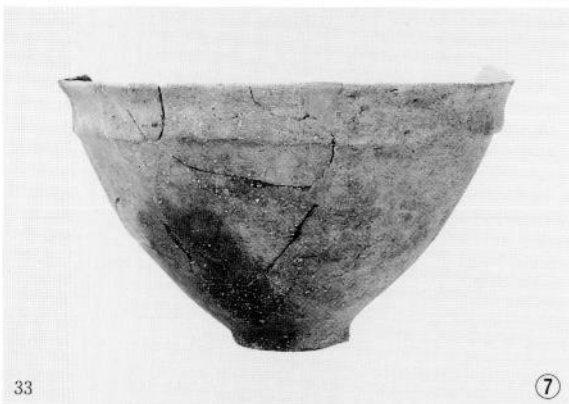
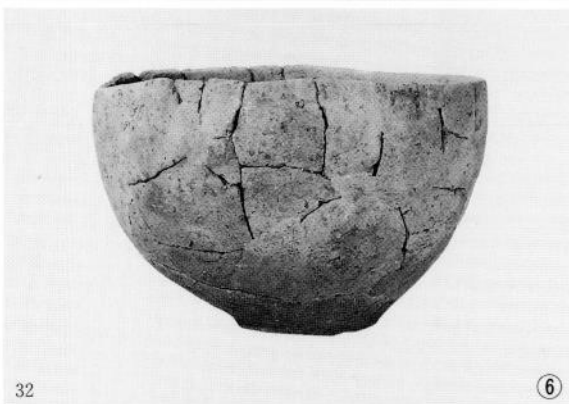
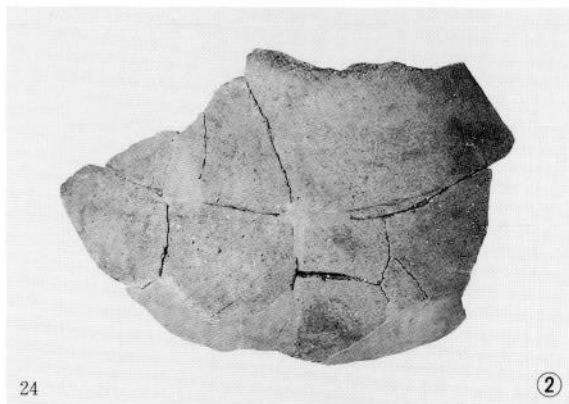
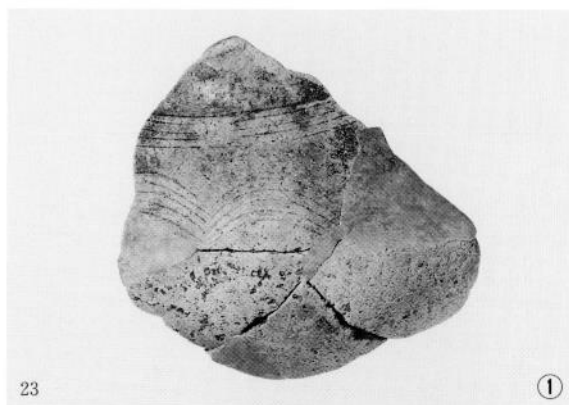


辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑬ 6区出土土器

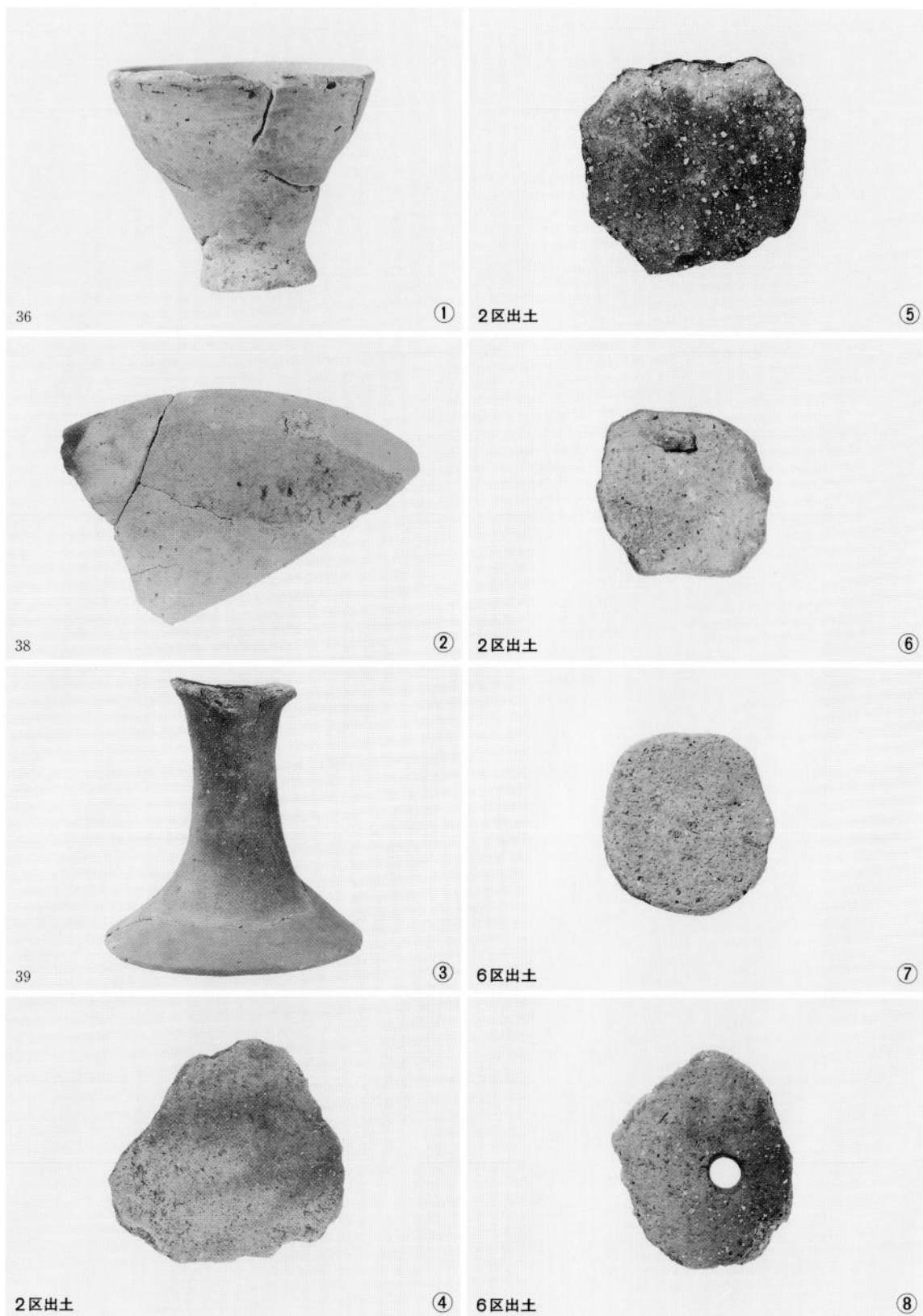




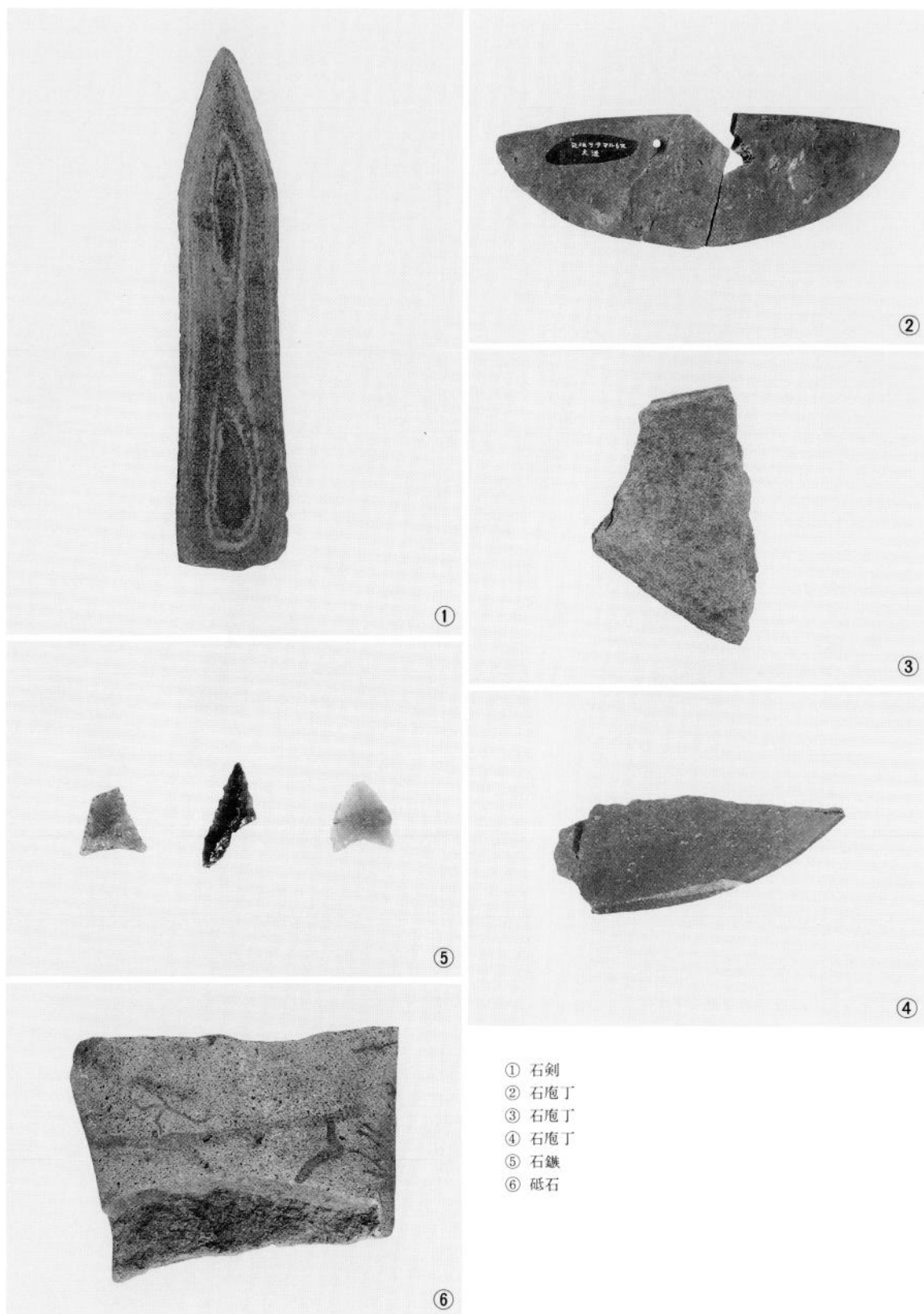
辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑭ 6区出土土器



辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑮ 6区出土土器

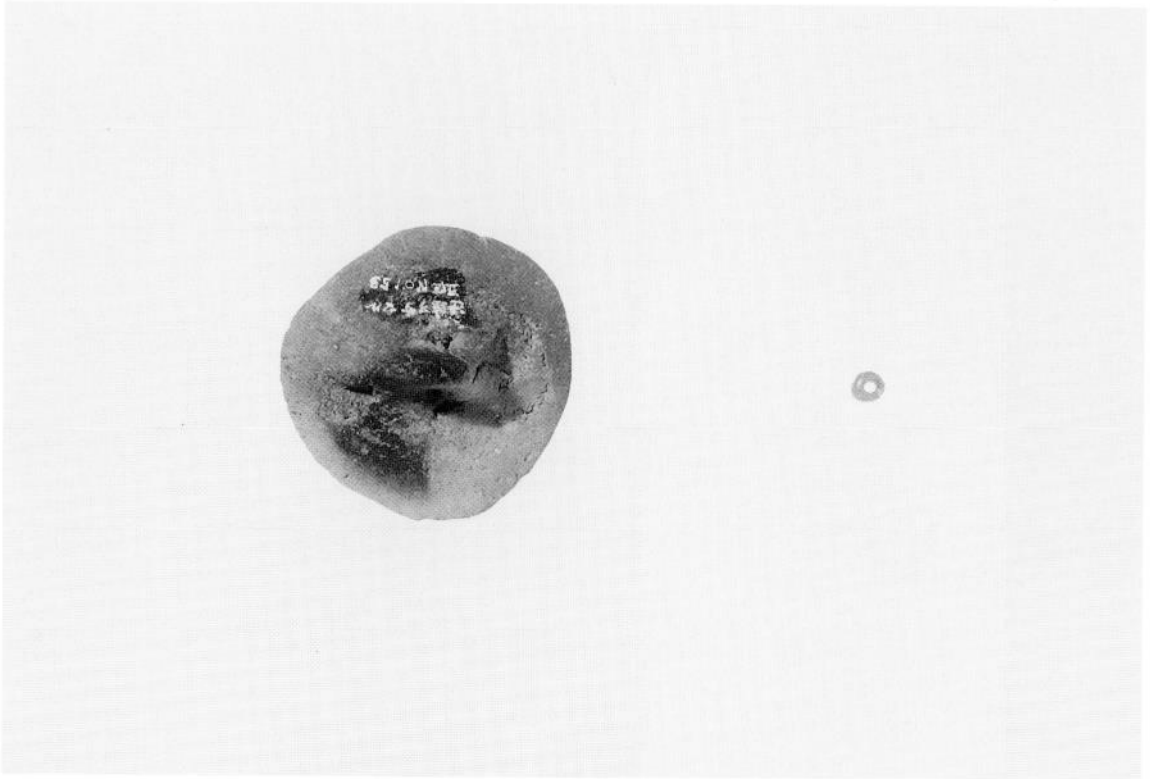


辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑩ 2・6区出土土器(6区)・土製品(2区・6区)



- ① 石剣
- ② 石庖丁
- ③ 石庖丁
- ④ 石庖丁
- ⑤ 石鑿
- ⑥ 砥石

辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑰ 6区出土石器



特殊遺物 2区出土 土製模造鏡・ガラス小玉



辻垣ヲサマル遺跡出土遺物 ⑬4区出土 (石製品・石鋏)

一般国道  
10号線 椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第1集

## 辻垣ヲサマル遺跡

1993年3月31日

発行 福岡県教育委員会  
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 福岡印刷株式会社  
福岡市博多区東那珂1丁目10番15号  
電話 (092) 451-0027

### 福岡行政資料

分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 4	登録番号 4